

る。聖人各宗研鑽の結果、天台傳教を以て佛教の正統なりと解りたまへることは、かの「寺泊御書」に、左のとほり仰せられてある。

八宗十宗等、皆佛滅後ヨリ之起リ、論師人師之ヲ立ツ。滅後ノ宗ヲ以テ、現在ノ經ヲ計ルベカラズ。天台ノ所判ハ、一切經ニ叶フニ依ツテ、一宗ニ屬シテ之ヲ棄ツベカラズ。

八宗十宗の宗々は、滅後に天竺、支那の論師人師の立てたもので、佛の自ら立てたまふ所でない。佛滅後に論師人師の意をもつて計れる宗見を本として、如來が現に在せる時、自ら説きたまへる經の勝劣を没すべきでない。たゞ一切經の説相の儘如來の御意の儘に佛の宗を求むべきである。天台の所判は専ら自見を捨て、佛の一切經の説相に任せて宗を法華に定めれば、一宗の私見として捨てることは出来ぬとの御意である。また末法弘通本化上行の使命を自覺したまへるについては、左の通り仰せられてある。

迦葉阿難等、龍樹天親等、天台傳教等ノ諸大聖人、知テ而モ未ダ弘宣シタマハザル所ノ、肝要ノ秘法ハ、法華經ノ文赫々タリ、論釋等ニ載セザルヲ明々ナリ。生知ハ自ラ知ル可シ、賢人ハ明師ニ値遇シテ之ヲ信ゼヨ。罪根深重ノ輩ハ、邪推ヲ以テ人ヲ輕シメテ之ヲ信ゼズ。且ラク耳ニ停メ本意ニ付カバ之ヲ喻サン。……末法ニ日本國ニ於テ、地涌ノ菩薩、法華經ノ肝心ヲ流布セシムベキノ由ヲ、兼テ之ヲ示ス也……予此ノ記文ヲ拜見シテ、兩眼龍ノ如ク、一身悅ニ徧ス。……而ル

ニ予地涌ノ一分ニ非ラザレドモ、兼テ此事ヲ知ル、故ニ地涌ノ大士ニ先立チテ粗ボ五字ヲ示ス。

(曾谷入道抄)

佛教ヲ弘ムルハ佛ノ御使也。隨テ佛ノ弟子讓リヲ得ル事各別也。正法千年ニ出デシ論師、像法千年ニ出ヅル人師等ハ、多クハ小乘、權大乘、法華經ノ或ハ迹門、或ハ枝葉ヲ讓ラレシ人々也。イマダ本門ノ肝心タル題目ヲ讓ラレシ上行菩薩世ニ出現シ給ハズ。此人出現シテ、妙法蓮華經ノ五字ヲ、一閻浮提ノ中ノ國毎ニ人毎ニ弘ムベシ。例セバ當時日本國ニ彌陀ノ名號ノ流布シツルガ如クナルベキ歟。然ルニ日蓮ハ何ノ宗ノ元祖ニモ非ズ。又末葉ニモ當ラズ。持戒破戒ニ闕ケテ無戒ノ僧、有智無智ニハヅレタル牛羊ノ如クナル者也。何ニシテカ申シ初メケン、上行菩薩ノ出現シテ弘メ給フベキ妙法蓮華經ノ五字ヲ、先立テネゴトノ様ニ、心ニモ非ズ南無妙法蓮華經ト申シ初メテ候程ニ唱ル也。所詮ヨキ事ニテヤ候ラン、又惡ウヤ侍ルラン、我モシラズ人モワキマヘガタキ歟。但シ法華經ヲ開キテ拜見シ奉ルニ、此經ヲバ等覺ノ菩薩、文殊、彌勒、觀音、普賢マデモ輒ク一句一偈ヲモ持ツ人ナシ。唯佛ト佛トノミソ説セタマフ……今日蓮ハ爾ラズ、己今當ノ經文ヲ深ク護リ一經ノ肝心タル題目ヲ、我モ唱ヘ人ニモ勸ム。麻ノ中ノ蓬、墨ウテル木ノ、自體ハ正直ナラザレドモ、自然ニ直クナルガ如シ。經ノ儘ニ唱レバ曲レル心ナシ。當ニ知ルベシ佛ノ御心ノ我等方身ニ入ラセ給ハズバ唱ヘ難キ題目ナル歟。又ソレ他人ノ弘サセ給フ佛法ハ、皆師ニ依テ習

ヒ傳へ給へリ。例セバ鎌倉ノ御家人等ノ御知行、所領ノ地頭、或ハ一町二町ナレドモ、皆故大將殿ノ御恩也。何ニ況ヤ百町千町一國二國ヲ知行スル人々ヲヤ。賢人ト申スハ、ヨキ師ヨリ傳へタル人、聖人ト申スハ師無シテ我レト覺レル人也。佛滅後月氏漢土日本ニ二人ノ聖人アリ。所謂天台傳教ノ二人也。此二人ヲバ聖人トモ云フベシ、又賢人トモ云フベシ。天台大師ハ南岳大師ニ傳へタリ、是賢人也。道場ニシテ自解佛乘シ給ヒヌ、又聖人也。傳教大師ハ道遠行滿ニ止觀ト圓頓ノ大戒ヲ傳へタリ、コレハ賢人也。入唐已前ニ日本國ニシテ眞言止觀ノ二宗ヲ師無シテ覺リ極メ、天台宗ノ智慧ヲ以テ六宗七宗ニ勝レタリト心得給シハ、是聖人也。外典ニ云ク、生レナガラニシテ之ヲ知ル者ハ上也(上トハ聖人ノ名也)。學ンデ之ヲ知ルモノハ次也(次トハ賢人ノ名也)。内典ニ云ク、我が行、師ノ保ケ無シ等云云。夫、教主釋尊ハ、娑婆世界第一ノ聖人也。天台傳教ノ二人ハ聖賢ニ通ズベシ。馬鳴、龍樹、無着、天親等、老子、孔子等ハ、或ハ小乘、或ハ權大乘、或ハ外典ノ聖賢也。法華經ノ聖賢ニハ非ズ。今日蓮ハ聖ニモ賢ニモ非ズ。持戒ニモ無戒ニモ有智ニモ無智ニモ當ラズ。然レドモ法華經ノ題目ノ流布スベキ後五百歳二千二百二十餘年ノ時ニ生レテ、近クハ日本國遠クハ月氏漢土ノ諸宗ノ人々唱始メザル先ニ、南無妙法蓮華經ト高聲ニ喚ンデ二十餘年ヲフル間、或ハ罵ウタレ、或ハ疵ヲ被リ、流罪二度、死罪一度ニ定ラレヌ。其外ノ大難數ヲ知ラズ、譬バ大湯ニ大豆ヲ漬シ小水ニ大魚ノアルガ如シ。經ニ云ク、而此經者如來現在猶多怨嫉況滅度後。又云ク、一切世間多

怨難信。又云ク、有諸無智人惡口罵詈。或ハ云ク、加刀杖瓦石。或ハ數々見擯出等云云。此等ノ經文ハ、日蓮日本國ニ生ゼズンバ、但佛ノ御言ノミ有リテ、其ノ義空シカルベシ。譬ヘバ花サキテ菓ナラズ、雷ナリテ雨ノフラザランガ如シ。佛ノ金言空シクシテ、正直ノ御經ニ大妄語ヲ雜ヘタルナルベシ。此等ヲ以テ思フニ、恐クハ天台、傳教ノ聖人ニモ及ブベシ、又老子孔子ヲモ下シヌベシ。日本國ノ中ニ、但一人南無妙法蓮華經ト唱タリ、コレ須彌山ノ始ノ一塵、大海ノ始ノ一露也。二人三人十人百人、一國二國六十六箇國、已ニ島ニツニモ及ビヌラン。今ハ誘ゼシ人々モ唱ヘ給ラン、上一人ヨリ下萬民ニ至ルマデ、法華經ノ神力品ノ如ク、一同ニ南無妙法蓮華經ト唱ヘ給フ事モヤアランズラン。(妙密上人御消息)

この兩御書のごとく、聖人の題目弘通、折伏逆化、上行の自覺は、まさしく生知の聖人たることを信ぜざるを得ないのである。これについて嘗て高山樗牛心兄の論篇に、聖人は佐渡に行かれてから、はじめて上行の自覺を得られたがごとくいつてあるが、果して爾うかといふ問が、往々來たことがある。もとより聖人の弘通の最初、この十五年の御遊學中、最後叡山において、自解佛乘せられた時、上行菩薩の末法の出現、その化導をも證悟せられたのであるけれども、聖人を凡夫方面から見なれば、その時の自覺は、義解識斷、信念感得の上の自覺であつて、果して佛意がその自覺せるが如くであるか否やは未定の問題である。それゆゑその自覺自信の眞偽を事實に驗せられねばなら

ぬ。仍で自ら覺りたまへる經文の通りの弘通をお試みになつたところが、全く經の未來記の通り一切の事が證したから、佐渡以後、堂々その御自覺の御發表があつたので、若しまた聖人の本地の方からいつたらば、應生の大士でありになるのであるから、決して人間の世の中の智慧法則に反するやうな、狂人じみた夢想や何かで、俺は上行だとか、頭あたまから俺は菩薩であるぞといふやうなことははれないのである。聖人がそんな風に叡山から下りて鎌倉の町の中で、俺は上行菩薩であるぞといつて法華經の變な講釋でもしたり、お寺へ怒鳴り込むやうであつたら、彼の豫言者宮崎虎之助の先祖になられたことであらう。本化應生ほんけおうえいの大士たる聖人は、決してそんな人間の法則を破るやうなことをなさらないのである。それゆゑ御自覺は、この三十二歳、修學の最後の時に、叡山で確定あそばされたからお降りになつたのであるが、その自覺の眞似しんじ（眞實しんじつ）は、實證を現實に得られるまでは、凡夫の身を以つて生れられた聖人には、なほ最後の問題として残されてあるのであるから、その事は仰せられず、たゞ天台宗の一沙門、傳教大師門人の正統主張者、時機相應の一法門の開創者としての資格で、御發表になるべく、房州さしてお還りになつたのである。（御事蹟篇 一七二へ）

(二) その御人格

この大聖の御降誕と、出家修學の御事蹟から、日蓮聖人その御方の御人格を窺ふと、吾人は二つ

の燈々とした大なる御特質を拜するのである。

一は先天的の御特質

一は後天的の御特質

で、その先天的のものは私共には之を眞似ること、做ふことは出来ないのであるが、後天的のものは、まさに私共聖人を鑽仰するものゝあやからねばならぬ處である、日蓮聖人を信仰し鑽仰すと稱して、自分の心身の實際に、聖人に做ふことをしないならば、それは始めより信仰も鑽仰もしないのと、大した相違はない。いはゆる「晝夜他の實を數へて半錢の益なきに畢る」ものである。

(一) 聖父母の夢想に現はれた人格の象徴

まづ先天的特質をいふまへに、注意すべきは、聖人御誕生の際における奇蹟の傳説である。古來の聖人賢人、英雄豪傑、およそ偉人といふ偉人の多くには、不思議な傳説がある。釋迦牟尼佛の降誕は嵐毗尼園の百華研を競ふ中に産れ、天は甘雨を降らし、盲者は視、跛者は起ちたりなどいひ、耶蘇の生るゝや東方の博士達、星を尋ねて來るなどいひ、孔子は尼丘山に祈りて産れたといふ。わが國でも弘法大師は高僧胎を借ると夢みて胎み、法然上人は、その母剃刀を呑むと夢みて胎んだなどいふ。然るに聖人托胎の傳説ばかり、雄大莊嚴にして、淨潔をきはめたものは少いとおもはれ

る。淨潔無比なる蓮華が雄大なる青海原から、光明赫奕たる日輪を載せて昇つたとは、何といふ麗はしい大きい想像であらうか。果して聖母がさういふ夢を御覽になつたかならぬかは二段にして、爾ういふ傳説を以て嚴られるに至つた聖人の御人格こそ、類稀な先天的に目出たい因縁をお持ちになつてゐられるのではないか。日本では尾張中村の百姓彌助の一子から、關白殿下とまで出世して、明韓統一まで計つたといふ豊臣秀吉の胎んだ時、その母は日輪腹に入ると夢みたと傳へるけれども、遙かに聖人の父母の瑞夢には比較にならぬほど及ばないのである。聖人の御名は、その瑞夢に應じて、兩親の法名の一字づゝをお取りになつたと傳説するが、聖人自らも、

日蓮ト名乗ル事、自解佛乗トモ云ツベシ。カヤウニ申セバ。利口ゲニ聞エタレドモ、道理ノ指トコロサモヤアラン。經云、如日月光明能除諸幽冥。斯人行世間能滅衆生闇ト。此文ノ心ヨクヨク案ジサセ給ヘ。斯人行世間ノ五ノ文字ハ、上行菩薩、末法ノ始ノ五百年ニ出現シテ、南無妙法蓮華經ノ五字ノ光明ヲサシイダシテ、無明煩惱ノ闇ヲ照スベシト云事也。日蓮此ノ上行菩薩ノ御使トシテ、日本國ノ一切衆生ニ、法華經ヲ受持テト勸シハ是也。

と、自ら日蓮と名乗られたことを自解佛乘といはれた。おもふに、この二字こそは、實に「法華經」専門、本門専門、別頭(別類の義)の佛教の大菩薩、地涌上行等の大士(大士)を褒められた經の御辭である。

世間ノ法ニ染ミザルコト、蓮華ノ水ニ在ルガ如シ。(法華經從地涌出品)

日月ノ光明ノ、能ク諸ノ幽冥ヲ除クガ如ク、斯ノ人世間ニ行ジテ、能ク衆生ノ闇ヲ滅ス。(同如來神力品)
聖人托胎の夢想が、またこの二つであつたといふことは、いかにも清淨と光明といふにおいて、徹底してゐるではないか。

また蓮華は妙法を表徴し、印度を象徴する。日輪は日本を表徴し、また法華經を象徴する(經に「譬如日天子能除諸闇」とある)。即ち日蓮といふ御名、御兩親の夢想は、實に世界統一の日本の法華經の建設者たるに、尤も恰當の名であり、また應はしい夢である。

また日は光明と溫熱とを萬物に與へ、破闇と殺菌と保育との用きを出して一切を惠むこと、恰度、本佛と本化菩薩が、智慧の光明と、慈悲の溫熱とを以て衆生界に臨み、その無明煩惱を破り、罪障を拂ひ、邪惡を除き、正善と安樂長養を與へられるのとひとしく。蓮華は、華と菓との同時によりて、因果同時の眞理をあらはし、清淨不染の姿によつて、自性清淨の本體を示してゐるのであるから、蓮華は聖人の自行本體の徳を顯はし、日輪は聖人の化他妙用の徳を示されたものといつても宜しいので、御夢想といひ、御名といひ、かゝる深き意味を表したのは、先天の御徳と申すの外はない。併しながら、吾人一切衆生にもこの徳が全く無いのではない。法華經の十界互具の理によれば、皆たしかに持つて居る、たゞひそんで居るにすぎない。若しその先天的の體現者たる大聖人を慕ふの深く、仰ぐの高き時は、必ず自身の中にひそめる徳をも、知らず識らずの間に引き出すことが出来

ねはならぬ。

この日と蓮の夢、日蓮といふ御名のことをおもふに就いて回想するのは、嘗て鈴木天眼氏が、佛敎界の古今の偉人の名を評議して、その雄大と崇高とにおいて、「空海」と「日蓮」の二つに過ぐるものはないといつたことがある。まことに爾うなやうである。けれども更にこの二つを對照すると、空海は普通佛敎的の雄大な名であるが、日蓮といふのは別頭佛敎的の雄大と崇高とを兼ねたものである。「空海」といふと、いかにも大きい。一切の善惡差別を遺蕩して一にする空、淨穢の差別を一にし、諸水を齊しく同一鹹味とする海、この二つはともに無差別觀を代表した名である。がこの大平等觀には中心の力といふものがない。これ汎神敎たる普通佛敎の缺點をもつともよく示したものである。世界の中心の光、空中の主人ともいふべき日輪、何なる穢れを以つても穢すことの出来ない蓮華、この二つは中心の力を示したもので、汎神敎の基礎へ、一神敎的中心を明かにした別頭佛敎の表徴となるのである。

聖人は、先天的御特質として、その個人としての御特長以前に、聖父母の夢の中にも、かやうな優れた傳説を胎されてゐらつしやるといふのは、これを聖僧が胎を借るといはれたとか、剃刀を飲むと夢みたといふやうな、他の高僧達の傳説と比較して、どれ程の區別があるか。誰にでも判斷のつくことであらうとおもはれる。

聖人は生れたまはざりし前から、すでに其の「一切衆生中亦爲第一」の本領をお示しになつてゐらつしやるといつても宜しいのである。

(二) 時勢が産み出した聖人の大人格……因縁感應の法門

次にはそのお生れになつた時である。「時勢英雄を生むか、英雄時勢を生むか」など、よく世間といふが、時勢と人物といふものは、全く互に因縁を爲すものである。併しながら、儒敎などで申す命世の偉人といふ、天命を背負つて出た人といふものは、時勢に促されて出て新なる時勢を造るものとしてある。佛敎でもまた爾うで、それをば因縁感應によつて説く。

『三乗の機根なき所には、佛出でたまふこと無し』

とて、聲聞、緣覺、菩薩といつて、この三界六道を出で、不生不滅の涅槃を得やうとか、自身が衆生に代つて一切の苦を受けて、さうして衆生と共に苦の世界を出やう、といふやうな高尚な思想が萌した人間が、可なり澤山出て來た處ろでなければ、佛陀は出でたまはないとしてある。現世の五倫五常治亂興廢以上に、純粹の哲學思想も宗教思想も持つて居なかつた支那や、生天思想以上の涅槃思想は持つて居ないヘブライ民族や、形而上の事を考へても解脱のためでなく、一種の智識欲として考へた希臘人、これ等はみな人間乘、天乘の分齊の機類であつて、三乗の機類でない。すなは

ち婆羅門教の最初の生天思想から、漸次變遷して哲學的となり、涅槃を求めるやうになつて、其處に三乗の機根が出来た三千年前の印度、そこへ佛陀は出られたのである。その三乗の機根が孚動したことを佛教の術語では、『感』といひ、その機根の孚動に對して佛陀が出られたのを、『應』といふので、『感』は『因』、『應』はその因を成就せしむべき『緣』であるから、『因緣感應』といふのである。この點からいへば『時勢偉聖を生む』のである。で一たびこの佛陀の大緣が世に現はれましてからは、この佛陀の大勢力に影響せられ、各自が心に深く具して居る佛性を動かされて、三乗の心を起すものが世に澤山に出て来る、それ等が畢には一佛乘に統一せられたので、この點から申せば『偉人時勢を生む』のである。聖人もまた其の通りで、その生れたまふに就いては、これを迫り出した時勢がなければならぬ。その時勢は實に世界に比類のないものであつた。

平安朝の四百年、平安朝！。何といふ美しい名であらう。世界歴史の中で、孰れの國の歴史でもおそらく我が國の平安朝の四百年ばかり、長く太平の續いたことは少からうと思はれる。否、事實さうなのである。支那の周の世は八百年も續いたけれども、武王から幽王に至る迄の西周は、僅に三百年ばかりで、平王東遷以後は春秋戰國の世である。また希臘羅馬以來の西洋史を見ても、我が平安朝の如く、四百年の太平を保つたといふことは、全く世界歴史に跡のないことで、奈良朝のあの唐制模倣のすべての風俗から獨立した平安朝の特色は、太平の極、優美の極にいたつたものではあ

るまいかと考へられる。彼の衣冠束帯の格構の麗しくして上品なること、武官でさへあれを服て、たゞ僅かに兩頬のあたりに武威を示し、背に箭を負つたゞけである。また彼の十二一重の婦人の美くしさ、寢殿造りの優雅なるさま、ほとんど天上の人のやうな有様で、中央ばかりが爾うだが地方は困窮したなどいふが、さればといつて別に奴隸の様なものもなかつたし、百姓一揆も起らなかつた。蝦夷に隣る奥の涯にも、中尊寺の金色堂のやうなものも出来て居たし、隼人に近い太宰府にも、都府樓、觀音寺の壯觀はあり、國々の神社佛閣に有りし昔の文化の程が偲ばるゝではないか。諸國貢獻の安女の中に、秋田のやうな北のはてから、美と才とを以て平安朝の全期、否日本人のすべてに理想的に扱はれてゐる小野小町も出て居るではないか。平安朝は、人間の歴史に泰平と云ふものを畫き出したことにおいて、古今東西の諸國に雙びない成蹟を示したものであるといつても、決して誇大な語でない。そしてこれに續くものは、やはり日本の江戸時代であるといつても、私は大手を振つて、お國自慢でない公平無私の判断であるといはれるとおもふのである。そして平安朝のは、佛教の太平、公家の太平、感情の太平、韻文の太平であり、江戸時代のは、儒教の太平、武家の太平、意志の太平、散文の太平であつた。その流石の平安朝の太平が、後白河天皇の保元の元年から、仲恭帝の承久三年に至るまで、六十五年の僅々たる年數の中に、十帝の即位があつた、その間、如何に多くの大波瀾に遭遇したか。後宮の亂れより起つた保元の變は、朝廷も攝關も武士も、

揃つて倫常を蹂躪し、君臣、父子、兄弟、叔姪、相賊し相打ちて、上皇は流され給ひ、義朝は父と弟を殺し、清盛は叔父を殺し、忠實忠通は子なり弟なりを死に至らしめた。その亂後三年ならずして平治の亂が起つて、源平兩家といはれた平安城の名代の武家、それも殊に武を以て優れた源氏が滅んだ。世に珍らしく我朝前後に例のない「二代皇后」も出來た。崇徳上皇は血書の經を神に納むることを許されずして、配處に憤死遊ばされた。保元には僅に安藝守だつた武臣の平清盛が、十年後には太政大臣になり、入道して尙ほ朝政を執る。一族六十餘人高官に上り、全國の半ば三十餘國を其の所領とし、入道の子は女御となりて、安徳帝を産み、その一族をして自ら「當今平氏の人」に非ずんば人にして人に非ず」と叫ばしむる權威者となり、專横の及ぶ所は、後白河法皇を鳥羽殿に幽閉し、時の關白、太政大臣以下四十餘人の官職を一時に解いて之を流竄した。のみならず南都七佛寺を焼拂はせてその僧を殺戮した。すなはち清盛の力は俗權、教權の双方を蹂躪したのである。その清盛の威力も、源三位の擧兵に火蓋を切つて、東國の源氏が一時に起り、その防備の紛擾中に清盛は死んで、タツタ二年の間に、平安城は源義仲に攻落され、平氏一族帝を擁して西國へ都落した、無位無官の義仲は一躍征夷大將軍に任ぜられたが、却つて武力を振つて法皇を幽し、天台座主明雲、蘭成寺長吏圓慧法親王已下數百人を斬りてその頸を梟し、四十九人の公卿の官職を停めた。その鬼神の力ありとせられた旭將軍義仲も、二月たぬ中に、九郎冠者義經といふ男に攻め殺され

た。その後一年ばかりで、都落した平家は、長門の檀の浦まで行つて、帝を奉じて一族みな海に沈んだ。その戦勝の將軍義經は、又兄頼朝から悪まれて、半年ならずして奥州へ出奔した。頼朝は奥州の泰衡に義經を殺させ、また自ら泰衡を討つて、日本六十六國の總追捕役、征夷大將軍、二位右近衛大將として、實際の主權を握り、新に鎌倉政府を開いた。それと共に、朝廷の諸殿閣を復舊し、東大寺等の諸大寺を復舊し、俗權と教權との秩序の回復を圖り、朝廷には巧みに主權の名を存して、其の實を鎌倉に收めた、これで全く平安朝は一大轉化し畢つたのである。保元よりこの建元四年に至るまで三十六年に過ぎない。けれどもそれまでまことの太平にはならなかつたので、頼朝薨じて後ち、子の頼家將軍となり、北條時政執權となり、功臣梶原景時、畠山重忠、比企能員等は殺され、佐々木高綱や、熊谷直實は早く頼朝を捨て、出家して畢つた。頼家も殺され、時政もまた死に、頼家の弟實朝が將軍となり、時政の子の義時が執權となつた。和田義盛もまた一族と共に滅ぼされた。やがて實朝は、甥の公曉に殺され、公曉は亦義時に殺されて、到頭頼朝將軍の血統は根絶しにせられ、世は北條義時といふ陪臣のものになつてしまつた。従四位下陸奥守兼右京權太夫といふ微官のものが、天下の政權を掌にして、朝廷の命を用ゐぬといふことは、日本開闢以來いまだ嘗てなきことである。是においてか、後鳥羽上皇これを憤らせられて、義時討伐をせられたが、却つて義時の爲めに、三上皇は遠島に放たれたまひ、一天皇は廢立にお遭ひ遊ばされた。これ頼朝歿後二十二年

である。あゝこの五六十年の間に、日本の社會は非常なる大旋渦中に投じられたのである。この俗界教界に互りての大變遷を五六十年の間に示したといふことも、また世界歴史に類ひの稀なことで、殆どかゝる短い間にこれほどの變遷を経たといふことはないのである。稀有の大泰平の後の稀有な大變亂、これ實におのづからに偉大なる宗教家を産むべき機感が起り來つた時ではないか。かやうな有爲轉變きはまりなき世、天子の御位も、將軍の威勢も、關白太政大臣の貴きも、座主大僧正の崇さも、みな力の前には、何の効しもない。その「力」そのものも、常住の「力」といふものはない。昨日の勝者は今日の敗者、今日の盛者も明日はどうなるかわからぬ。あゝおそろしの世や、佛神を祈る禱りの「効」もたのまれぬ。この世は畢竟してこれ「苦」の世界である。早くこの苦の世を脱れたいといふ解脱のねがひに充ちた人も出來たし、「力」の源を養はうとする望みの人も出て來るし、また道德方面から挽回したいといふ人もあつた。これ等のもろ／＼の望みを充たすべく、この鎌倉時代に、續々と宗教的偉人が出た。「力」の宗教を宣傳すべく、榮西、圓爾、道元などいふ人が禪宗を輸入し、宋僧道隆まで出て來た。「遁世」の宗教を流布すべく、法然、親鸞、智真などいふ人が念佛を興し、「道德」の宗教を興隆すべく、叡尊、俊芴、良觀などの人が律宗を復古し、「學問」的方面を振作すべく凝然、宗性、證眞等の人が出で、「祈禱」の宗教にも覺鑊が新義眞言を唱へた。げに鎌倉時代こそは、宗教的偉人のもつとも多く出た時である。けれども此の人々は一人として、

この大變動に對して、特に、皇室の大權を失はれたといふ事柄に對して、どれほどの注意を拂つたこともない。佛教の各宗の分裂に就いても、何等の新見を抱いた人もない。かゝる時に當りて、此等多くの宗教的偉人の出た殆ど最後において、而も承久三年といふ大變のあつた翌年、貞應元年、その佛涅槃日の翌日、二月十六日の午の時に、この末法の世を救ふべき聖者は産れられたのである。「新らしき力と慰藉と道德と祈りとを與ふべき大縁の聖者」として、眞の佛教、眞の日本、蓮の如き眞理を聞き、日の如き國體を明かにすべく、わが聖人は生れられたのである。即ち聖人は凡夫方面からいへば、時代が需めて産むだ命世の偉聖で、聖人御自身の方からいへば、かゝる時代の機感に應じて、その非違を糾正し、その特長を發揮せしむべき機應の動くところとして、實相の大地から出られたのである。

これ等のことは先天的の御特色ではあるが、それでも私共にまた尠からぬ修養を與へられる。聖者の因縁感應は右のやうであるが、私共にだつても後天的にその因縁感應はあり得る。孰れの時代にも、その時代の特質たる思想や傾向や風俗習慣は生み出されるものであつて、まづ現はれるものはそのよき部面が部分的に諸方面からあらはれるのであるが、それが各々その特色を發揮すると共に、其處に必ずその弊を伴ひ來るものである。仍で其の一部面と他の部面との弊と弊とが打當るときに、時代の煩悶が其處に生ずる。かゝる時代の通弊といふものに遭遇した時、法華經の信者なら

ざるものは、一面の要求や一部の弊に對しての反抗的發展をするものなのである。その點に至つて法華經は、統一的の妙法、三觀三諦（空假中）即一法の妙理を持つが故に、法華經の信行者は批判的に総合的に、建設的に創造的に、時代の諸特長を併せて、その諸弊を脱出した人格と事業とを以て、其の時代を救ふべき世の唱導者となることができる筈である。基督は、基督教徒をば世の鹽なりといつた。けれども鹽もとより必要であるが、法華經行者の理想は、必ずしも鹽ではない。「色香美味皆悉具足」の法から生れた人格と事業は、あらゆる偏曲ならざる法華經的綜合的發展をせねばならぬのである。この點から云へば、法華經信行者は、自分の就いて居る業務、位地に近いもろもろの惡弊を革め、其の事柄に當然あるべきさま／＼の美處善處を發揚し實行して、新しい社會を造るべく、自らの人格を完成して行くべきもので、それが即ち私共においての感應なのであると領解する。

皇政四百年の泰平の後、六十年の大變亂、大權武門に歸して、承久の國體の大凶があつた。その時に、國聖日蓮聖人は、世間佛法の亂離を慨いて大折伏大開顯の絶叫をせられた。武政三百年の泰平の後、二十年の騷擾、大權皇室に復して、明治聖世の興隆となつた。日蓮主義が勃興して、國體の深奥を開き、王佛冥合戒壇建立の理想を高く掲げて、世間佛法の淺薄を慨き、大開顯の絶叫をするのは、これ果して偶然であらうか必然の運命であらうか。

(三) 夙成型天才型にして同時に晩成型修養型の経路を履んだ人格

次にまた偉人といふものを大別すると、夙成型天才型の人と、晩成型修養型の人との二つに見ることが出来るとおもふ。宗教的偉人では、基督の如きは天才型の人であるが、釋尊の如きは兩方を兼ねて居られる。ルーテルの如きになると、寧ろ修養型の人物と見られるのである。その中で聖人は孰れに屬する質の方であるかといふと、十二歳にして、日本國體の大變と、佛法の多岐とに迷うて、日本第一の智者となしたまへと虚空藏菩薩へ願せられたといふことは、夙成型に屬することはいふまでもなく、これほどの大志を抱いて出家した人は世界にも餘り多くはあまい。たゞ印度だけに釋尊の出現當時の前後に、一切智者とならうとして出家修道したものが少からずあつた。

かやうに夙くから深く大なる處へ眼をつけらるゝ智慧とともに、その感情も頗る鋭敏な方であつたらうとおもはれるのは、虚空藏堂に斷食祈念して、夢の如き裡に菩薩から寶珠を授けられ、石段につまづいて血を吐かれたといふので察せられる。鋭い感情才氣と深い理性洞察の天性のあつた方とすると、往々その才氣や洞察力の爲めに、世の中の人が多く馬鹿に見え、一切の事が何でもないことのやうに思はれて、油斷をしたり、己惚をしたりして、深く長く苦しんで徹底するまで、物事を考へて行くことには缺け勝ちのものである。謂ゆる石橋をも踏み固めて行くといふやり方は、才

氣洞察鋭敏な人には缺け易いのが世間の人物の状態である。コツコツと地盤から固めて行かうといふ大器晩成といふやうな人は、夙くからは考へなかつた人で、夙く考へた人はどうかすると「才子才に誤られ」『十で神童、二十歳で才子、二十五からは普通の人』になつて了ひ易いのである。然るに吾が聖人は夙くから爾ういふ才智人に超過した御方でありながら、決して自分で結論を急がれるやうなことはなかつた。早く功名手柄をしたいとか、世の中に認められたいとか、名譽を得たいとか、位地が欲しいとかいふやうなことは少しもお有りにならず、そんな事には關せず焉で、たゞ最初起した大疑惑を解決することのみ孜孜汲々として居られた。御修學中、叡山には十二年もお留學であつたのだから、當前にいへば、あれだけの學者で永く居られたなら、僧綱におなりになつて居らつしやるべき筈である。僧綱といふのは、僧官たる僧正、僧都、律師、僧位たる法印、法眼、法橋を總稱していふので、就中僧位の方は今の學位や稱號の、博士學士とかいふやうなものである。現に聖人の高弟六老僧の第一、辨阿闍梨日昭尊者の如きは、當時の攝政兼經の猶子であつたからあらうが、叡山での學頭としては、權律師の僧官を持つて居られ、後に法印大和尚位になられた。それだから大抵な坊さんは、叡山へ行つて、少し學問でもやり出した人は、この僧位僧官を得たがるのである。併しこれになるのには、なか／＼面倒なことがあつて、單に學力だけでといふ譯にはいかない。それには資本の金がなければならぬ、次には氏素性が佳いほど早くのぼれる。どんなに學

問があつても、どんなに器量があつても、百姓や大工や商人の子では、位官ともに餘程むづかしい。少くも士の子、もつとも早いのは公卿の子息である。仍で士でも我が子を叡山へでも上さうといふ人々は、將來の子の出世を願ふものだから、種々の傳を求め公卿の方々の猶子とて、假の子として山へ登せてもらふ。何々大納言の猶子、何々右大臣の猶子といふやうなものである、日昭尊者の如きは、下總印東祐照の子であつたが、十六七歳の頃、近衛左大臣兼經(後に攝政)の猶子として登山せられたと傳へてゐる。かやうにして、法印だの、法眼だの、法橋だの、僧正だの、僧都だの、律師だのいふものになつて、時めいた坊さんになる。それではじめて、陛下の御前で講義したり、關白だの大臣などの前で講義することが出来るので、何の位も何の官もないと、天子様はもとより高位高官の人から顧みられない。實力は如何にあつても、俗界では肩書がないと通りがよくなかつたことは今も昔もかはらない。そこで肩書で威かさう、早く肩書をつけたいといふ望みが多くの學僧の中には溢つて居た。ところが日蓮聖人はどうかといふと、若しそのお望みがあれば、聖母の方の御親類からでも、また富木氏の縁邊をたよりでもせられたならば、辨官や納言あたりの御つてはお有りにならんことはあるまいと思はれる。また聖人ほどの學才の有る方ならば、猶子にする方でも却つて誇りとして諾するに相違ない。おそらく山門御遊學に就いては、聖父母、師の君などは、よき傳を以て猶子として行けといふやうな話もあつたかも知れない。けだし聖人それをお断りになつたも

のであらう。また御登山の後も、聖人の大才と大學識とを以て、而も當時の三塔總學頭俊範法印などから非常の秀才として遇はれ、東塔と横川に兩院を督し、無動寺西方ヶ嶽圓頓房蓮長として、堂堂たる論議の雄將たる學頭であるのだから、法橋か法眼くらゐには早くならうとせられればなられたことであつたらうと考へられる。併し聖人はさやうなものは求めやうとはせられなかつた。公卿の猶子とならうともせられなかつた。たゞこれ一介の田舎學僧として、少しも當時の社會に頭を自ら出さうとはせられなかつたのである。これは聖人御登山の御意志が、たゞ自己の大疑惑を決せむが爲めであるからで、即ち發心そのものが違つて居たからである。

發心といふものは佛教では最も大切なものとする。何をするのにまづこの發心を踏み固めて置かねばならぬ。その後の一切の行動は、この發心次第だからである。發心が小さければ小さいだけの活動、深く大なれば、従つて深く大なる活動が出来る。されば「發心僻越すれば萬行徒らに施す」などいはいはれ、心の第一の動機とせられて居る。この發心の動機が間違つて居ては、いかにその後結構な修行をしても、何の役にも立たないといふことが、天台大師の言葉にある。聖人は夙成型の人であり遊ばしたが、最初の御發心が深く大で、根本的に、この佛教の眞理をたづねやう、此國の亂れを救はう、人類の最奥の救済を與へやうといふ大發心で、日本第一の智者となしたまへとの大願でありになつた。この第一の智者といふことが、やがて一面に「日本の柱、大船、眼目」と

いふことと同じ意味なのである。さういふ御願であつたから、その他の世の名譽や位地などは、ほとんど塵ほどにもお考へなかつたやうである。これについて鳥渡餘談にはなりますが、此の頃の佛教學者中、日本佛教史の専攻家として、人も許し我も任じて居る某氏の如きも、ズツト前に「日蓮上人論」を書いた時に、この事に言ひ及んで、聖人が自ら「日本第一の智者」となしたまへと願したといふが如きは、甚だ受けとれない。おそらく後世から附けたもので聖人の志であるまい、宗教家として慈悲者にしてほしいといはるゝならば聽えるけれど、智者といふのはどうも………ことに「日本第一」といふのは、少し競争的になつて感服しにくい。これでは日蓮聖人がいかにも功名心に燃えた人のやうに見えて宗教家らしくないではないかといふ風について居られた。一往御もつともである。けれども聖人のこの發願は正確で、また後には自ら日本第一の智者として任ぜられたのみでなく、自ら稱して「閻浮第一の智者」とさへ仰せられてある。それは「撰時抄」といふ只今立派な眞蹟の残つて居る「御書」にある。

この某氏のやうな風の考へからいふと、法然上人や、親鸞聖人などの發心は、いかにも優しく宗教家らしい處があるやうである。法然上人は、美作の久米南條の人押領使漆の時國の子で勢至丸といつた。時國傲慢にして稻岡の莊の領家源内武者定明を侮つたものだから、定明は時國を夜討にした。勢至丸時に九歳であつたが小矢を以て定明を射て傷けた。時國瘡甚しく死するに臨んで、勢至

丸にいふには、汝けつして定明を仇敵として彼を撃たむことを思ふな、汝彼を打つたなら、彼が子また爾を仇敵とするであらう。これ先世の業報であるから、汝わが爲めを思はゞ早く世を遁れて僧となり父が菩提を弔らへよと遺言した。勢至丸はその言葉に感激して僧となつたといはれて居る。いかにもいたいけな處がある。また親鸞聖人は皇太后宮大進藤原有範の子であつたが、六歳で父に死なれ八歳で母を喪ひ、叔父に養はれて居たが、世の無常を果敢なみて出家の志を起したといひ、道元禪師の如きも内大臣久我通親の息であつたが、三歳父を喪ひ、仲兄なる大納言通具に養はれ、八歳母の逝くや、哀悼深く世を遁れんと志あり、十三歳にして自ら邸を脱して出家したといふ。ともに矢張父母を喪うた無常觀から來て居るので、感情の鋭い神經質な天才型の子としては、出塵の志を抱くといふのは尤もだと考へられる。やゝ豪がりめいた方では、眞言宗の覺鑊上人は肥前藤津の土豪の子で、父は常に處で威張つて居たところが、覺鑊の八歳の時に、一日收稅吏が領主から來て、痛く父を責め、父また謝を述べて居たのを見て、兄に尋ねた。父上より勝れたものがあるのかと、兄いふ、それは領主である、彼はその使だと。さればその領主より勝れたものがあらうか。それは將軍である。將軍より勝れたものがあらうか。それは天子である。天子より勝れたものがあらうか。それは神さまである。神さまより勝れたものがあらうか。それは佛さまである。佛さまより勝れたものがあらうか。佛に勝れたものはない。仍で無上世尊といふ。その佛には法身、報身、

應身の三の佛がある。その教には顯教と密教とある。法身の佛最も勝れ、教は密教もつとも勝ると教へた。すると覺鑊が、その佛にはどうすればなれると尋ねたから、佛道を修行すればなり得られると説いたので、彼は佛道に心を傾け、十三歳にして出家したと傳へられて居る。何か勝れたものにならうといふ修羅根性のやうでもあるが、父の責めらるゝを見て、無上の尊いものとならうと考へたなどは、きかん氣の小兒らしくて欺かぬ心が面白くあらはれてゐる。然るに日蓮聖人になると、餘りに大きい。やゝ競争的氣分にたゞよつた「日本第一の智者」といはれる、どうも宗教家らしくないやうに思はれないではない。けれどもこれは少し見方が違ふやうに考へられる。宗教的人格をば、たゞ優しい同情するに足りるものだけに限らうといふことは、偏見ではなからうか。それは私共に近い方からいへば、法然、親鸞、道元等の方々の方が、近いところがあるやうである。が聖人のお思召をば、競争的に見るのは違ふので、この頃の言語で智者といふことは佛法の道理をよく明めた覺者のことをいふ。たゞ日本一の物識にならうといはれたのでなく、斯く一佛の法が八宗十宗に別れて居て、何れが釋尊の本懷であらうか、斯く佛法が盛であるのに、かやうに一國の秩序は亡び、天變地妖があるといふのは何故であらうか。眞の佛法が行はれて居るに拘はらず、國が斯様な有さまであるとするれば、釋尊の佛法といふものは、この國この人生には無用の長物である。この大懷疑を決するには、どうしても日本第一の智者とならではかなはぬといふので、競争でも功名心でも何で

もない。衷心止みがたい慾求から起つた大志願でおはしました。かゝる大なる懷疑と志願から「日本第一の智者たらむ」と誓はれたのであるから、この誓の満足せらるゝ迄は、決して自らその努力修養を止められないだけでなく、凡そ其の當時名だゝる學者、ありとあらゆる思想は、みなこれを研鑽して、冷靜に之を比較し綜合する大思索を経られなければならぬ。この大思索中は、決して社會に出るやうなことはせられない。たゞどこまでも一學僧として、深く潛んで孜々として八宗十宗乃至は儒教國風の道までを尋ねられ、名利を毫末も念とせられない大堅實な御人格は、却つて晩成型修養型の人のやうである。現に「戒體即身成佛義」には、あれほど法華經に對しての妙解をお持ちになり、當時の念佛に對してあれだけの痛快な斷定をお持ちになりながら、輕々しく天下に公表せられず、抑止在懷して、愈研鑽を勵まれ、さうして一度は御自身の御思索が完結し、懷疑去り、志願の滿ぜんとするや、叡山の論議の席で、慈覺大師、智證大師を疑案して、傳教大師の古に復さむことを論ぜられたと傳へてゐる。この叡山は傳教大師の開基ではあるが、それがまことに隆盛になつたことは慈覺大師からであるといはれ、ことに慈覺大師以來は、傳教大師の開かれた東塔と、寂光大師の開いた西塔、慈覺大師自ら開いた横川と、この三塔から學僧を集めて、大講堂で論議を催うした。後には三塔各千坊あつて三千坊あるに至つたとさへいはれてゐる。その論議の席には、學僧達が手文庫を持ちて禮儀正しく出で來り、講堂にすなりならんで、各々その手文庫から書物を

出す、講師が、妙法蓮華經何々とか、大日經何々とか、宗要何々とか講題を提唱する。それから威儀整然として大論議が始まるのであるが、聖人が學漸く成つてこの論議の席に御出ましになつたときには、十二より三十一歳の二十年間、十六歳からでも十五年、再度遊學叡山登詣已來十有二年の間に、大檢討を加へ大思索を加へて、練りに練り鍛へに鍛へられた思想、堅實に貯へられた學識は、この論議の席に如何に堂々と覺き出されたらうか。何等忌憚なく慈覺大師に疑ひを挿さみ、傳教大師に復れと絶叫せられたといふ傳説は、その大識見の御成立を語るものである。この聖人の銳利透徹せる論議には、當時の山門の學者等も如何ともすることが出来なく、面に立ち得る者はなかつたがやうで、俊範などは、むしろ大聖人に大抵もつともだもつともだといつて居たがやうに思はれるのである。また聖人の山門における位地は、後お弟子の三位房日行師を叡山に登されて、その學問中に「十章抄」と名くる消息を送られ、「止觀」講習の會座にある人に披露せよとて、」

コノ文ヲ、止觀ヨミアゲサセ給テ後、フミノザノ人ニヒロメテワタラセ給ベシ。

と仰せられてある。若し聖人にして叡山の學者間に、何等の權威がなかつたならば、その弟子が師の房からの手紙なりとて讀まうとしても、誰も聴く者はあるまい。その文の座の人へ讀みて披露せよとの聖人の仰せによつて、當時の山門における聖人の學問的地位が、如何に高くゐらせられたかといふことが知れるのである。

かやうに愈々となるまでは、たゞ專一に修養し、一度定つたならば堂々と之を發表せられる。發表以前に十分にあらゆるもの、概要を纏めて仕舞はれる。もう何處から打つて來ても打壊れないとなつてからドツと打ち出す。この爲され方が、いはゆる聖人の天才型と修養型とを兼ね備へられた處で、それが此の出家修學時代によく現はれてゐるのである。

幼少の大懷疑から發して、日本第一の智者とならむとの大志願のために出家し、この大志願を是非とも世の爲め人の爲め佛の爲め身の爲めに、達せねば死すとも止まじと大發誓せられ、その大發誓が二十年間瑩雪の大思索となり、その大思索が、大規模、大堅實、大精練なる開覺となつたのであるから、聖人のこの修養時代は、あらゆる人間の修養時代の典型といつても宜しい大人格を顯されてゐる。

學問にしても、實際の事業にしても、普通の人間は、順調だと大抵あり來りの姿の儘のものが、どんなに不完全でも些とも疑つて見ることなしに、理解して見ることもなしに、浮々と學び、迂々と從事して居るのが多いのである。何か船にでも漂よはされて居るやうで、自分がどういふ時勢に打付かつて居るのであるか、どういふ立場に居るのであるかといふことすら、いよ／＼何か目の前に困ることも出て來ない限りは、分らずに居るものが多いのである。然るに聖人ははやく既に二十六年の御歳から、御自分のことでない、國民全體、國家全體のこと、佛教全體のことを御一身の

大問題とし、煩悶とし、懷疑として、大志願大發誓をせられて居る。その類のない夙成型天才型でありながら、二十年の長い大修養を取られて居る。この聖人の大人格は日本のあらゆる各宗の高祖達と比較して、まことに其の例を絶つてゐるのみならず、世界のあらゆる宗教的偉人、耶穌や、マホメットや、ボーロやなどと較べても、聖人のこの大懷疑、大志願、大發誓、大思索、大修養の堅實精練なる有様は、殆んど其の等倫が少い。たゞ大聖釋尊が似て居られるのみである。夙悟天才の聖人すら、なほこの深い長い修養をして大器晩成を心がけられたのである。況して聖人の如き夙成天才ならざるものは、愈々益々修養を期して、一步一步に新なる何ものかの人格の進歩を期すること、經にいはゆる、

香風萎メル華ヲ吹イテ、更ニ新ニシテ好キ者ヲ雨ス。

の概がなければならぬ。吾人は聖人の修養時代を回想することに、無限の慚愧と無限の奮勵の力の内より湧き出づることを覺ゆるものである。

(三)その教義面

更にこの「大聖降誕と出家修學」に就いて、その教義的解釋をすれば、種々の義目があるが、略して左の三點を説く。

- 一、其の御降誕の種姓に就いて
- 二、虚空藏菩薩への祈願に就いて
- 三、諸宗遊學及び其の開覺に就いて

(一) 其の御降誕の種姓に就いて

教義上からいふと、聖人は、本化上行菩薩の垂迹なりとする。その本化高位の大菩薩が、漁夫の子といふ最も賤しい低い種姓からお産れになつた。それに就いては釋尊に比較して、さうあらねばならぬ教義的解釋がある、第一にはそれを談さうと思ふ。

基督教には三位一體といふ教義があつて、父と子と精靈といふ三の要素があるとして居る。日蓮聖人の宗教にも一體三寶とも、一體三法ともいふ、やはり三の要素がありとしてある。即ち父と子と法とである。

(本化佛教)

父——教主釋尊 (本佛)

子——行者日蓮 (本化)

法——佛種妙法 (本法)

(耶穌教)

父——神

子——基督

精靈——精靈

で、耶穌教の方は、超越神教であるから、父なる神そのものは、いかなる形でも、この吾人の世界には現はれないことになり、その代表者としての子たる基督を遣したとなつて居るのである。然るに佛教は、その點に於いて内在神教であるから、父なる本佛も、吾人のこの世に現はれる。それは法華經壽量品に顯れた久遠實成大聖釋迦牟尼佛である。この釋迦牟尼佛は人間世界へどういふ形で顯れられるかといふと、それは本師教主といふ形で現はれる。即ち智の上の徳でいふと、大覺者大說法者精神上絶待の師である。併し若し慈悲の上の徳でいふと、大慈悲者大救濟者精神上絶待の父である。威嚴の上の徳でいふと、大統一者大自在者精神上絶待の主である。けれどもその正面の顯れ方は、覺者說法者、師としてである。さればこの佛といふものは、一世界の中には同時に二人と出ない、また滅後正像末の三時の中にも決して出ない。全世界の人間を、その在世滅後に互つて救ふことの出来る覺りの法を説くのが佛陀である。仍で苟くも佛といふものは、かならず在世滅後を通じて、およそ人間の思惟し得られることは、悉く之を説き定めて了つて置く。人間が、およそ宗教的に、哲學的に、考へ得られるだけの思想は、悉く之を根本的に説破し盡して置く、それが佛陀の仕事である。それは何故かといふと『我は是れ全人類の精神界の永久の師である。主である、父である』といふことを證據立てる爲めである。即ち聖人はこれを本師釋尊、教主釋尊、慈父釋尊といつて居られる。されば事實に於いても、東西の有ゆる哲學者や、宗教家や、思想家が、種々と考へて

唯物論だ、唯心論だ、理想論だ、絶待論だ、一元論だ、多元論だ、自然主義だ、唯理主義だ、個人主義だ、國家主義だ、世界主義だなど、一人々々^{各々}威發明の説をする人々があるが、その古今東西幾千百の學者思想家が、各々一生かゝつてやつと成上げた學說そのもの、模型、みたやうなものは佛教と名づくる、唯一人の釋迦牟尼佛の説かれた教の何處かにある。また佛陀は其の滅後の變遷に對して豫言して置く。世の中はどういふものかその豫言のまゝになる。是においてか始めて釋迦牟尼佛陀は、吾等普通の人間からいへば、いかなる賢人聖人といふものでも、到底企て及ぶべからざる、正しき大悟大覺者大説法者、即ち全人類の師である。この師に就いて全人類は始めて眞に救はるべきであると悟るにいたる。すでに釋尊自らも、『今此三界皆是我有主徳、其中衆生悉是吾子親徳而今此處多諸患難唯我一人能爲救護師徳』とて、精神界の主師親三徳あることを明されてある。これが本佛の、主とし師とし父としての現れで、即ち思想の統一、宗教の統一をする唯一の根本人格たるものが、教主釋尊の立ち場である。

行者といふ立ち場はどうかといふと、其の教主が種々な教理思想を説き盡して置かれた、而して最後には其の發足點と歸着點を示されて置かれた。其の最後の歸着點であり發足點である處の最極奥底、最極無上の佛教佛意を實行し、一切衆生の爲めに、その實行の模範者となる。この眞理の實行によつて、どんな卑しい人間でも、最高最大最勝最秀の意義ある人生を味ひ得る。斯ういふことを示すのである。

佛種といふものは何だといふと、これは教主釋迦本佛の大覺大悟の内容であり、佛陀の胚種であり、釋尊最後説法の妙法蓮華經如來壽量品文底の意で、また末法五逆謗法といふ他の如何なる宗教道德でも救ふことの出来ない衆生を救ふべき、唯一の正法成佛の因種である。これを説かねば教主も教主でなく、これを行はねば行者も行者でないのである。

それ故に、釋迦牟尼佛の人間世界に出で給ふや、世界で尤も深遠幽遠な宗教及び哲學思想の熾な印度、それも六派哲學はじめ九十五種の外道のおの／＼鬱興した時、而もその印度の中央、迦毘羅衛といふ文化の最も勝れた都城、其の王家、しかも轉輪聖王家だと傳へられて居る釋迦種の王といふ、印度では無上尊貴な系統に生れられ、而も二男三男でない、父の淨飯王の五十近い時に生れた一人息男の太子として、人生無上の位たる王位に即くべき御身であつた。而も三十二相八十種好そろつたといふ好男子に生れ、聰明英智、文武の業一つとして達せざるはない、加ふるに當時有名な美人耶輸陀羅姫を妃としたといふのだから、人間としては申し分のない、榮華望むが儘である。若し政治に武威に五天竺の統一でも計つたならば、まことに轉輪聖王となり得られたのであらう。然るにこの人生の生老病死憂悲苦惱の根本を究め、これを解脱せんことを求め、斷然この無上の俗的地位を去つて一介の沙門となり、手に一鉢を持つてその日／＼の食物を乞食し、身に糞雜の衣とて

小布を集めて衣とし、自らの爲めには住むに家なく始終貯へておく食物もないといふ、國王の榮華からまるで反對な、浮世の一切を洗然去つて了つて、さうして此の生はさやうに貴ぶべきものではない。生以上に眞に頼むべきものは眞理であるといふことを標榜せらるゝ爲めに、さういふ極端な遁世の姿をお取りになつた。そして今度その遁世修行の結果、道：眞理と合一した時には、我れは是れ一切勝者、一切種智者、一切慈悲者なり、三界の苦界を解脱せしむる大導師大船師なり、人天一切衆生の父なりと、大權威あるものゝ如く唱へられた。その釋迦牟尼佛の有様は、實に教主として應はしい。人間の俗世界最高榮華の位を捨て、我は俗世界の王に非ず主にあらずと、俗方面には一番最低級の生活を採られて、更に精神上の最高最大最勝の権力者慈悲者指導者なることを顯はされたのである。

日蓮聖人はこの釋尊に對してどういふ對照をするかといふと、聖人のお生れになつた時は、佛滅後末法といふ最悪時、五逆謗法の人のみ多く、佛教の革新期であつた。東海の一孤島日本、そのまた東の涯の安房國、日本がすでに東夷といはれて居た、その日本の中でもまた東夷といはれる關東その中のまた邊國の安房、遠流の罪人の居る國、其處で現在の武士の家に生れず長者の家に生れず豪族の家に生れず自ら旃陀羅と稱せられた漁夫の家に生れ、それも四男五男に生れられた。これを中天竺迦毘羅衛の王の太子と生れられた釋尊と比べれば、實に正反對ではないか。この最低級の社會的地位

地から出て、この宇宙の根本眞理たる妙法蓮華經を實行し、法華經の活現たる行者となつた時に、教主本佛の大權威は其處に生ずる。聖人は自ら「日蓮は旃陀羅の家より出でたり」と稱はれながら、一面には、「日蓮は念佛者眞言師禪宗等の師範なり、當帝の父母、この關東御一門の棟梁、日本國の柱、末法の法華經の行者、世界第一の聖人智人なり」といはれた。眞理の實行は斯の如き大價值を生ずるものたることを示される、行者としての必要上から、最底の家にお生れなされたものであるとする。また聖人の種性を、聖武帝の裔であつてそれが漁父にまでなつて居られたといふ傳説に就いては、また従果向因などいふ法門を以てこれに充てることなどもあるが、さまでとはとて之を略して置く。

(二) 虚空藏菩薩への祈願に就いて

次には聖人が虚空藏菩薩に祈願を籠められて、それで明星のごとき智慧を授けられ給へりと、御自らも仰せられてある。然るに教義上からいふときは、聖人は本化の大菩薩だといふ。その本化菩薩が、迹化の菩薩から智慧を授けられたといふのは、少し變ではないかといふことである。

其處です！ およそ佛菩薩聖人が人間に生れられるのに、さまざまの生れ方があると教義上いふが、その最高の靈格が普通の人格となつて生れ來つたときは、決して不思議な奇蹟めいたことはせられない。變化めいたことはせられない。よくその凡夫世界の規則に應じて、あるべきまゝの活現

をして、而もその靈格の風光を遺憾なく示されるとしてある。それに就いて、天台大師が法華經の迹門の教理から十妙を詮し出した中に眷屬妙といふのを説かれ、五種眷屬といふものを釋せられた。

理性眷屬(佛性を持つるといふ點において、矢張本佛の子であるとする分際)

業生眷屬(業によつて生れた人間が信を起して本佛の子としての修行をする者)

願生眷屬(前に業生の眷屬であつて誓願を立てて、次に次生に生れて法を修行する者)

通生眷屬(既に靈格を持しながら衆生を救ふ爲めに神通をもつて人間に生れる者)

應生眷屬(法性の世界に靈格の本體はあり乍ら自然の妙用として人間に出て世を救ふ菩薩)

大聖人はこの中應生の菩薩であるから、すべて人間世界の法則に違つて而も遂に法性最奥の靈格を顯されるのである。仍で凡夫として生れられてから、この佛教と國家の亂れを救はむとし「日本第一の智者」たる必要をお認めになつたので、それを誓願せられると共に、一切衆生に智慧を授けむとの願のある虚空藏菩薩にいのられたといふことは、いかにも兩かあるべきことで、その念願の凝る所、斷食行の最後に、夢の如く、虚空藏から明星の如き智慧を授つたとの仰せも、現代の心理學上にも否定することは出来ないことである。けれどもこれは開宗前のことで、さてこの明星の如き智慧もて一切佛教を検討する内、遂に寂山十二年の修學の結果、本化菩薩の靈格を覺られたものである。本化の智慧功德をば、經は「如日月光明」とある。明星の如き智慧は、畢竟して聖人にあつ

ては、凡夫面から、靈性自覺の間の橋渡しをし、權述佛教を領解する智慧として用を爲したものにすぎない。されば聖人、上行自覺のことをいはれるときは、かならず「生知」とも「依經開解」ともいはれてある。この應生の聖者といふことは、聖人御一代の事蹟の教義的解釋において、一貫して用意せねばならぬところである。

(三) 諸宗遊學および其の開聖に就いて

また次に聖人が、有ゆる諸宗の教義學說を研究し盡されたことは法華經行者の當然の御化導で、法華經は、「於一佛乘分別說三」と説いて佛教全體を總合統一するのみでなく、「皆與實相不相違背」「皆順正法」と説いて、一切の人生の文明を總合開顯し、之を一大妙法に統一するのが、その理想である。恰もわが聖人が十二歳の御發心以來、當時の文明の一切を收容し、諸宗諸道の綱領を研鑽して、それに根本的解決を下されたことは、この法華經の教理的に、自分の思想の發展をせられて居るのである。聖人とおなじく八宗の教義を學び、一切經を五遍讀まれたと傳へられてゐる、智慧法然房といはれた源空上人の方では、八宗兼學と入藏五返は同じだが、その歸結が違ふ。法然上人の方では、八宗を八宗として學んだ。換言せば、八宗のいふ處をば、一々に理解して、いづれもその宗を立つるの義理は無理ならず、時に隨ひ世に隨ひて、八萬法藏の中から、其の特長くを出し

たものだから、萬差の機に對しておの／＼其必要がある。吾もまた未だ此の國に弘まらざる應時對機の一門を開かうぞとて、淨土の法門を開かれたのであるから、八宗の主張を是定して、其の宗々のいふがまゝを認容せられたものである。然るに日蓮聖人の違ふ。一往は八宗のいふがまゝ理解せられたが、モ一ツ根本に突き入つて、この八宗を機に對して開かれた根本の一大佛法とは何ぞ、一大佛意とは何ぞ、機に八あり十あるが故に八宗十宗と説きたりといふも、その機に對して八と説き十と説く所以の根本の法そのものは一か多か。唯一ならば何の一法ぞと。根本的に總合統一の方面から御覽になるのだから、八宗のいひ分をそのまゝには通過させられないのである。這の般の思召は「顯勝法抄」に委細に仰せられてある。

また叡山に修學開覺せられたのは、法華經の大統を傳教大師に一面お取りになつたからであるが、此の事は今は略しておく。

第三講 開覺立宗の聖者

(一)その御事蹟

前講をこゝで總括すると、わが日蓮聖人は十二歳にして志をお立てになつた。それは斯やうに日本國に佛法が弘まつて居て、なぜ斯やうに國が亂れて居るのであらう。また釋迦牟尼ほとけは、たゞ一人の佛陀でゐられるのに、なぜその教が斯の如く八つも十もあるものであらう。いかにも不思議！されど今日まで澤山の佛教の智者といはるゝ人も出で、また今も現在せられるが、一人としてこの二つに深い疑ひをなした人はないと聞く、さらばその疑ひを晴すには、日本第一の智者とならではかなはぬことであらう。されば「我れ願はくば日本第一の智者」となりて、この事を明めむ。傳へ聞く虚空藏菩薩は、一切衆生に智慧を授けたまふと。あはれこの藥王に第一の智慧を授けさせたまへと祈念せられた。かくて清澄寺の道善房の下で、十三、十四、十五、十六と御勉強になつて、十六七歳から二十一歳までの四五年間鎌倉へ出て、當時の新佛教たる念佛宗と禪宗と並に律宗とを研究せられ、一度安房へお歸りになつて書かれたのが「戒體即身成佛義」で、此の書には、既に聖人が後年御弘通なつたやうな、法華經の教義の大體をほゞお修めになつて居て、念佛宗の打撃をもして居られる。仍で二十一歳にしては、あまりまとまり過ぎてゐるといふので、この御書を建長三年だの(御年三十一)文永年中(御年四十四歳)などに持つて來やうとした人もあるが、敢てそんなことは珍とするに足り

ないので、こんな例は西洋の哲學者などにも澤山ある。シエリング、ライブニッツ、ハルトマンなどといふ大哲學者は、みな二十一から二十四五までに書いたものゝ中に、後年自分の大成する哲學の根本思想を出して居るし、ショーペンハウエルの如きは、二十四歳の時に、自己の哲學の根本著作を發表して居る。即ち通じて廿歳から二十六七位までの間に大體の基礎はすわつて居るのである。況して聖人の如きにあつて、之を怪しむのは、寧ろ怪しむのがおかしいやうなものである。それから更に叡山へ登られた。叡山は當時の佛教界における、まづは大學及び大學院である。鎌倉時代佛教の開創者は、法然上人でも道元禪師でも、親鸞聖人でも、みな此處から出た。榮西禪師はその隣(蘭城寺(三井寺))から出た。聖人は東國邊陲の寺から來た遊學僧であられたから、まづ私立學校の出の秀才が、帝大や大學院へ這入つたといつた風な格式である。そして當時の比叡三塔の總學頭として、名聲隆々たる、大和莊大僧都法印俊範の門に、靜明、經海、俊豪、政海等の英才と共に、天台の教觀を研かれ、東塔無動寺の圓頓房に住し、兼ねて横川の定光院を監せられた。この圓頓房は無動寺西方ヶ嶽六房の一で、創見のある學者が代々居た。慶深阿闍梨といふ慧心流傍若無人の學匠も、後に關東の天台宗の根本道場となつた武藏仙波喜多院の開山尊海法印(是は聖祖滅後の學者)なども、この坊に居たのである。聖人がこの坊へはいられたのは、その俊秀の才識を俊範に認められたので、やがて東福寺の圓爾なども交際して、「日蓮木」の話さへ残つた。さて稍此の山の學

説や祕書を探られて後は、隣りの三井寺へ行つて智證大師の流を研め、更に二十七歳の頃、南都にお出でになつた。南都の六宗——これは過去の宗旨で鎌倉時代には、その律宗が再興を目論んだ外には、全く實際に行はれて居なかつた宗教である。けれども併し嘗て日本國民を支配した宗教であり佛教弘通發展のみちゆきとなつた宗旨であるから、その内容を見て置かなければならぬとて、之をも概略御覽になつた。それから眞言——此の頃の眞言は、寧ろ東寺が本場で、高野山は、弘法大師の隠居所であるけれども、また學問所ともなつて居るから、其所にも何かあるかわからないからとてお登りになつた。それからまた佛法最初の寺たる攝津の四天王寺、この寺には何か古いものでもあるか知らぬとて探られた。新興の禪や念佛の法門は、鎌倉ですでに四五年もお修めになつたから叡山へお出になつてからは、主として八宗の肝要をお調べになつたのである。南都高野天王寺等の族の歸途、河内の科長なる、聖德太子の御廟へ七日參籠あらせられた。この事は聖人御傳記の中では、特に注意せねばならぬことで、聖德太子と日蓮聖人——この關係は最初の講話の時に一寸申して置いたやうに、日蓮聖人の思想系統から申すと、即ち「聖德太子——傳教大師——日蓮聖人」といふ傾向になるのである。これに對して一面に、眞宗の親鸞聖人の方でも、大分聖德太子に私淑する。それと共に「末法燈明記」を作られた傳教大師にも、その思想の系統をつけやうといふ所もある。親鸞聖人の方で聖德太子を私淑するのは何だといふと、それは在家佛法といふことにある。

聖德太子は御身太子でおはしましなから、勝鬘といふ法號を有せられ、袈裟を朝服の上に掛けられ、殿上で「法華」「勝鬘」「維摩」の三經を講じ、その「義疏」を造られた。即ち、聖德太子は、皇室側から出られ、在家であつて坊さんの眞似をせられた。之れ眞俗二諦の融合である。また親鸞聖人は坊さんで居て女房を持ち子を持ち、お寺を家庭にした。その點で眞俗二諦の融合である。傳教大師は「末法燈明記」に「末法には持戒は市の中の虎の如し」とて、末法は名字無戒の比丘を國寶とすべき時であると説てあるからだといふのである。併し聖德太子は、「我は後なからむを欲す」といはれ、御子の山城王の時に、全くその御血統がお絶えになつた。親鸞聖人が願る子孫繁榮であるのは大變異つて居るやうである。わが日蓮聖人と聖德太子との思想的關係は、そんなものではない。佛教の方の語でいへば法國冥合、今の思想でいへば第三帝國の意味においてある。聖德太子は、法華經勝鬘經維摩經といふ三經を講ぜられたが、まづその維摩經といふ經は、維摩居士といふ俗人が、釋尊の弟子の坊さん、阿羅漢といふやうな高位の人をやりこめて、却つて不思議法門といふものを説いて聽かして居る。即ち坊さんが俗人から教を受ける譯なのである。また勝鬘經といふものは、阿輸舍國友稱王の夫人に、勝鬘といふ人があつた。この人が女ながらに佛法の護持をして、國中を大乘を以て教化するのみならず、「攝受」「折伏」といふことを説いた。「攝受」とは一切衆生の善惡をわかつた悲愍して救ふことで、「折伏」とは惡念を以て、「一切衆生の惡を指彈して之を改めしめるこ

とである。さうして個人的利益を思ふのはいけない、個人的解脱、個人的安心の佛教は、眞の佛教でないといふことを説いたお経である。この經の中に「佛種を根敗するもの」即ち眞の佛教の精神——人類の眞の性質たる佛性の根本——を根から敗らすやうな人間。生存競争の爲めに佛性の根本を破壊してしまふ人間。さういふ人間には、最早普通の慈悲攝受といふことでは、到底その心を眞に甦らすことは出来ない。それを甦らすに就いては、最後のあるものが要る。それは何んだといへば即ち此經に、「王力及び天龍力を以てこれを強伏す」と説いてある。「王力」は之れ國家の力、天龍力とはこれ正法擁護の靈界の力で、この「幽顯の勢力」を以て、これを強く折伏するの外はない。即ち國家の力と眞理の力とを融一したもので、日蓮主義の本門戒壇の思想の傾向にあるもので、いはゆる第三帝國の思想と類系のそれで、太子のお思召のほどもわかるのである。また今一つは、本講話の始めに、太子の三道一貫の思想を書いて置いたが、太子はこの宇宙の大道といふものを一大植物に譬へられた。植物にはかならず根と枝葉と花實とがある。これが揃つて始めて一つの眞の植物であるが如く、この世界全體の文明も、その通りであつて、文明の根を持つて居る民族及び國家と、文明の枝葉を繁らせて居る民族及び國家と、また文明の花なり實なりを豊かに持つて居る民族及び國家がある。その中で、日本は、人の始めの道を説く、人道の根を持つて居る國である。支那儒道は人の生きて居る社會的關係の倫理道德及び政治の思想を説いた、いはゆる人の中道で、道の枝葉を説

いたものである。また印度の佛道は、人の死後、靈界のこと全宇宙に對する哲學的宗教的思想を整齊したもので、道の花なり實なりにあたる。而して儒佛兩道の枝葉花實は、日本國の根本に歸つて始めてますく、その枝葉たり花實たる所を繁榮することができる。若し枝葉は枝葉のまゝ、花實は花實のまゝ、根本にかへることをしらないときは、やがてそれ等文明は形ばかりとなつて精神生氣なく、枯死して畢うであらうといふので、一面からいへば、日本中心の文明統一の理想をあらはしたものである。これがまた日蓮聖人の王法佛法の冥合、戒壇の御理想と同系統に屬するものなのである。日蓮聖人は二十七歳のお歳に、この聖徳太子の御廟に参られたといふことは、推想し奉るに、聖人この時すでにその御開宗に就いての大體の御方針は既に付いてお居になつて居たらしく考へられるので、この御廟に参籠せられて、靈的にその志を告白せられたものであらうと考へられる。更に歸途男山八幡宮へ一晚御参籠になつた。この神さまも、應神帝にましますと普通にはいふ。この應神帝こそ、國體をよく體現あそばされ、我國の武と義と仁とを外國に示し、また外國の文明を吸収すべき門を始めて確實にお聞きになつた方である。聖人は一生の間に一切經に五度お這入になつたと傳へられて居るが、その中の三度は、この修學時代にお這入りになつたものであるから、すでに佛教においては讀むべきの書はなく、聞くべき法もない。是においてか三十歳の御時、京都で佛教以外の儒者の道を探られ、更に和歌——敷島の道をも究められた。和歌は、萬葉などには我

が古代の帝王および臣民が、おの／＼その衷誠を披露した種々な思想が出て居る。この古き言の葉の道によつて、日本民族の根本精神を知るといふことも、また一つの道であるといふので、時の歌の宗家である冷泉爲家卿——近古の歌聖たる藤原定家卿の息——の所でお修めになり、それから更に其の少し前、東寺や高野山の眞言宗から分れた所の覺鑊の新義眞言宗の道をも御研究になつて居る。彼の祕密相承を重んずる眞言宗、而かもその派祖覺鑊の歿後三十四年しか経つて居ない頃に、その重要な著述「九字祕釋」の書寫をまで許されるといふのは、聖人がいかに當時の佛教界に認識せられて居られたかゞわかる。又東寺の眞廣法印とも刎頸の交りがあつた。これが三十歳の御時でこの頃また何の思召しであるか佐女牛の八幡へ信宿あそばされた。斯様なことは傳説だけで何事も確證は残つて居らぬけれども、後の聖人の御思想や御行實から推し考へて見ると、これは日本國體と、法華經との關係について、何等かの神との精神的靈的交通があつたものであらうかと思ふ。およそ宗教の偉人は、みな大靈界の實在を、いかなる風にか確信して居らるゝもので、この確信の上には、人間に語るに足りない時に、人間にまだ發表出來ぬ時に、神にこれを語るといふ事をする。かくて御歳三十一の建長四年——開宗前——此の頃には最早佛教の經論釋は見はて見をはり、聴くべきものは既に聴きをはられた。その肝要は悉くこれを得られた。佛教以外の儒者の道も一わたり研究せられた。日本の國學たる歴史および和歌の道も又研修せられた。叡山に傳はれる一實神道も

眞言宗に傳はれる兩部神道も定めて各その本宗に附帶して研められたことであらう。即ちこの時はその當時の思想界、宗教界に細目のことは措き、肝要なる研究すべき何物もなくなつた。茲においでか、再び叡山へお歸りになつた。この叡山の最後の一年——愈開宗せられるために叡山をお去りになる前の最後の一年——この年こそは、専ら開覺立宗の聖者として發表せられむとする道についての、専門的思考をお練りになつたものであらうかと思はるゝのである。史傳の上には、たゞ叡山にお歸りになつたといふ事と、いよ／＼お覺りを開かれたといふ事と、三十番神があらはれたなどいふ事とがあるのみで、その外に何の事柄も書いてないのは、横川の幽栖で、おそらく一年間を深く堅き沈黙思想の窓に過されたのであらう。かの三十番神が現れたなどいふ傳説は、何等の價値のないことで、そんなものは聖人の御書のいづれにもなく、また本化弘通の大覺悟を得らるゝに當つて、三十番神といふやうな事は、餘りにその間が遠すぎるのである。聖人のこの一年間の御默想の結果の御格護は

詮ズル所ハ天モ捨テタマヘ、諸難ニモ遭ヘ、身命ヲ期トセン。身子ガ六十劫ノ菩薩ノ行ヲ退セシ
ハ、乞眼ノ婆羅門ノ責ヲタエザルユエ、久遠大通ノモノノ三五ノ座ヲ經ル、惡知識ニアフユエナリ。
善ニツケ惡ニツケ法華經ヲスツルハ地獄ノ業ナルベシ。本願ヲ立テン。日本國ノ位ヲユヅラン、
法華經ヲ捨テ、觀經等ニツイテ、後生ヲ期セヨ。父母ノ頸ヲ刎シ、念佛申サズバナンドノ種々ノ

大難出來ストモ、智者ニ我が義破ラレズバ用ヒジトナリ。其外ノ大難風ノ前ノ塵ナルベシ。我レ日本ノ柱トナラン、我レ日本ノ眼目トナラン、我レ日本ノ大船トナラン、等ト誓ヒシ願ヤブルベカラズ。

こある「開目抄」に明かで、この御文の「詮スル所」から「誓ヒシ願」までは、これ聖人が開宗の時立てられた本願で、即ちこの建長四年の叡山御黙想の間にかためられた格護であるから、その「天も捨てよ」と誓願を立てられる中に、三十番神が出るなどいふことは、相應しないことで、それでは圓宗守護の我々が護りまじやうと出て来たなどは、恐らく後世の附托であらうと思はれる。また聖人この時の御覺悟をば、後年に「報恩抄」「三澤抄」等にも仰せられてある。

而ルヲ華嚴宗ノ澄觀等、眞言宗ノ善無畏、金剛智、不空、弘法、慈覺、智證等ノ、大智ノ三藏大師等、華嚴經、大日經等ハ、法華經ニ勝レタリト立給ハ、我等ガ分齊ニハ及バヌ事ナレドモ、大道理ノサストコロハ、諸佛ノ大怨敵ニアラズヤ。提婆、瞿伽梨、モノナラズ。大天、大慢外ニモトムベカラズ。彼ノ人々ヲ信ズル輩ハオソロシク（コレ叡山遊學十有餘年）。問テ云ク、華嚴ノ澄觀三論ノ嘉祥、法相ノ慈恩、眞言ノ善無畏、乃至、弘法、慈覺、智證等ヲ、佛ノ敵トノ給フカ（コレ世間一般各宗信者ノ了簡ヲ示シテ下ノ大聖人ガ開覺ノ大決意ヲ顯ス地トナシ給フ）。答テ云ク、此レ大ナル難也。佛法ニ入テ第一ノ大事也。愚眼ヲモテ經文ヲミルニ、法華經ニ勝タル經アリトイハシ人ハ、設ヒイカナル人ナリトモ謗法ハ免レ

ジト見エテ候。而ルヲ經文ノ如ク申ナラバ、イカデカ此ノ諸人佛敵タラザ、ベキ。若又恐ヲナシテ指シ申サズバ、一切經ノ勝劣ムナシカルベシ。又此ノ人々ヲ恐レテ末ノ人々ヲ佛敵トイハントスレバ、彼ノ宗宗ノ末ノ人々ノ云ク、法華經ニ大日經ヲ勝リタリト申ハ、我が私ノ計ニハアラス、祖師ノ御義也。戒行ノ持破、智慧ノ勝劣、身ノ上下ハアリトモ、所學ノ法門ハタガフ事ナシト申セバ、彼ノ人々ニトガナシ（コレ諸宗ノ祖師ヲ破折セズバ佛敵ノ大義名分ノ明カナラザルヲ示サル）。又日蓮之ヲ知リナガラ人々ヲ恐レテ申サズバ、寧喪身命不墮教者ノ佛陀ノ諫曉ヲ用ヒヌ者トナリヌ。イハントスレバ世間ヲソロシ。止メントスレバ佛ノ諫曉ノガレガタシ。進退此レ谷レリ（諸宗祖ヲ破折セバ世間ノ罵詈不信迫害大難來ルコトヲ豫想シ之ヲ佛誠ニ比較シテ御自身ノ決意ヲ定メ）。ムベナルカナヤ、法華經ノ文ニ云ク、而此經者、如來現在、猶多怨嫉、況滅度後。給フヲ示サル。又云ク、一切世間、多怨難信等云云（サレバ佛滅後ノ法華經弘通ハ佛ノ受ケタマヘル迫害）。釋迦佛ヲ、摩耶夫人ハラマセタマヒタリケレバ、第六天ノ魔王、摩耶夫人ノ御腹ヲトホシ見テ、我等ガ大怨敵、法華經ト申ス利劍ヲハラミタリ。事ノ成セヌ先ニイカニシテカ失フベキ。第六天ノ魔王、大醫ト變ジテ、淨飯王宮ニ入り、御産安穩ノ良藥ヲ持候大醫アリトノシリテ、毒ヲ妃ニマイラセツ。初生ノ時ハ石ヲフラシ。乳ニ毒ヲマジヘ。城ヲ出デサセ給シニハ、黒キ毒蛇ト變シテ道ニフサガリ、乃至、提婆、瞿伽梨、波瑠璃王、阿闍世王等ノ身ニ入テ、或ハ大石ヲナゲテ佛ノ御身ヨリ血ヲ出シ、或ハ釋子ヲコロシ、或ハ御弟子等ヲ殺ス。此等ノ大難ハ、皆遠クハ法華經ヲ佛世尊

ニ説セマイラセジトタバカリシ如來現在猶多怨嫉ノ大難ソカシ。此等ハ遠キ難ナリ。(ニ御身)チカキ難ニハ、舍利弗、目連、諸大菩薩等モ、四十餘年ノ間ハ、法華經ノ大怨敵ノ内ソカシ。(コレハ釋尊ガ法華經ヲ説キタマフニツキテノ間接直接ノ大難ヲ擧ゲテ唯一正法ニ必迫害アルヲ示サル。)況滅度後ト申シテ未來ノ世ニ(法華經ニ)ハ、又此ノ大難ヨリモスグレテヲソロシキ大難アルベシト説レテ候。佛ダニモ忍ビガタカリケル大難ハ、凡夫ハイカデカ忍ベキ。イワンヤ在世ヨリモ大ナル大難ニテアルベカンナリ。(コレ佛滅後ノ法華經ノ行者ノ大忍力ヲ要スルヲ示シ給フ。)イカナル大難カ、提婆ガ長三丈廣一丈六尺ノ大石(ヲ投)阿闍世王ノ醉象(ニ踏マセ)ニハスグベキトハヲモヘドモ、(經文)彼ニハスグベク候(ト示サ)ナレバ、小失ナクトモ、大難ニ度々値フ人ヲコソ滅後ノ法華經ノ行者ト知り候ハメ(コレ折伏弘通世ノ機嫌ヲ厭ハズ大難ヲ凌ギテ法華經ヲ弘通スル是レ如説修行ノ行者ナリト決意シタマヘルヲ表セラル)

大聖人が建長四年から五年の叡山沈思は、第一法華經本門の法門の悟達、第二にはこの弘通後の覺悟をお練りになつたのである。この「報恩鈔」の御文はそれを示された。また

聖人ハ未萌ヲ知ルト申シテ、三世ノ中ニ未來ノコトヲ知ルヲバマコトノ聖人トハ申スナリ。而ニ日蓮ハ聖人ニアラザレドモ、日本國ノ今ノ代ニアタツテ此國亡國タルベキ事ヲカネテ知テ候シニ、此コソ佛ノトカセ給テ候況滅度後ノ經文ニアタリテ候ヘ。此ヲ申イダスナラバ佛ノ指セ給テ候未來ノ法華經ノ行者ナリ。知テ而モ申サズバ、世々生々ノ間、ヲヲシコトドモリト生レン上、教主釋尊ノ大怨敵、此國ノ國主ノ大驕敵、佗人ニアラズ。後生ハ又無間大城ノ人此レナリトカンガ

ヘミテ、(コレヲ言ヒ)或ハ衣食ニセメラレ、或ハ父母兄弟師匠同行ニモイサメラレ、或ハ國主萬民ニモヲドサレンニ、スコシモヒルム心アルナラバ、一度ニ申シ出サジト(定メ)トシゴロヒゴロ心ヲイマシメ候シガ(コレ聖人叡山修學最ノ頃ノ御用意ナリ)抑々過去遠々劫ヨリ定メテ法華經ニモ值奉リ菩提心モヲコシケン、ナレドモ設ヒ一難ニハ忍ビケレドモ、大難次第ニツヅキ來リケレバ退シケルニヤ。今度イカナル大難ニモ退セヌ心ナラバ申出スベシ。(コレ即チ叡山深恩ヨリ開宗ノ旅ニ向ヒタマフ迄決シ給ヘル御信念也)

との「三澤鈔」の御文もそれである。先にもいつたが「開目抄」の「本願ヲ立シ、日本國ノ位ヲユヅラン」等の御誓は、やはりこの叡山最後下山の頃の御誓ひであると見るが、聖人傳の事實に近いものである。

法華經の爲めに大難を忍ぶの御格護が確立あそばしただけでなく、その弘通せらるべき本門法華の宗旨の内容も、大體の御感得はあつたに相違ない。富士派に傳はつて居る「御本尊七箇相承」といふものがある。その中に「明星直見の曼荼羅」といふ項があつて、大聖人が叡山で、妙法曼荼羅を感得せられて、横川の倭範法印にはなされたといふことを傳へて居る。これは私共は事實として認めにくいやうにおもふけれども、叡山において本門法華、上行自覺の内容は、ほど大體を決せられたといふことを信じやうとするものである。若しさうでなければ、大聖人が彼の積極的に大難の度ごとにいよ／＼その宗旨の内容を發表して行くといふ風な秩序整然たる御弘通がお出來になる

はずがないのである。

かくて建長四年は、この格護の修練と、大法發表の形式とについての深思を傾けられ、翌建長五年の春に到りて、大聖人の御心中すでに弘通發表における整然たる御計畫はお出来になつた。その花の三月、大宮人は、あるひは嵯峨御空のあたり、或は交野カノ或は東山のあたりに遊び戯れて居る。その花の都の花曇りの空に、大聖人は一本の杖、一介の笠を手にして、孤影筑然として叡山をお退きになつた、傳説では、そのお退きになる前に、山門の學者の論議の席で、慈覺、智證の兩大師を攻撃し、傳教大師の古に復さむことを唱へられたけれども、諸學者等は、議論としては聖人にはかなはなかつたが、併し慈覺、智證兩大師は、また何か深いお思召のあることであらう。蓮長いかに秀才とはいへ末代の若輩僧、いかでその語に理あるが如しとて、遽にそれに従はるべきやとて、山門では聖人と同志のものは少かつたといふことである。されば大聖人も深くはそれを仰しやらなかつたらしい。ことに聖人の開覺立宗の發表は、決して叡山でなされるわけがない。それは發心の地、父母の地、師匠の地たる房州東條の郷清澄寺へお歸りになる思召であつた。

筑然として山門を退かれた大聖人は、まづ路を伊勢にお取りになり、伊勢大神宮に参拜せられ、參籠の爲めに外宮と内宮との間の丘たる、間の山なる天台宗の淨明寺といふ寺へ宿られ、仍で一晩こま／＼と何か神にお告げになつたと傳へられて居る。その奏上せられた内容は、恩師田中智學先生

が「旭の森」といふ新體詩の中に想像し表現せられてあるが、いかにもさうもあらうかと思はれるのである。この神宮奏上は傳説であつて、『御書』には根據がない。それゆゑこれを否定しやうとする説もある。それは強ひて日本國體と日蓮聖人とを結びつけやうとした傳説だと思へるためであるが、それについて一往會通をすれば、第一、大聖人がこの開覺立宗の聖者として、叡山をお下りになつた時の御誓ひは、「開目鈔」に「本願ヲ立ン……我レ日本ノ柱トナラン、我レ日本ノ眼目トナラン我レ日本ノ大船トナラン等ト誓ヒシ願」とあるその御願でありになる。これまた上の「三澤抄」にも明かなるが如く「コノ國亡國タルコトヲカネテ知テ候」ために、この國の柱となり眼目となり大船となりて、天祖建國の本願のごとく、本門戒壇の國、世界を王道もて化すべき國たらしめんとせられたものである。それだからその首途において、天祖の迹たれまじし伊勢におまゐりあそばすことは、もつとも應はしいことで、決してあり得ないことではない。のみならずまた後の富士あたりの三堂建立にも、天照大神を、本尊堂のそばへ祀つてある、それによつてそのおぼしめしのある處がうかゞはれるのである。

かくて聖人は伊勢の大廟で先づ神に訴へられて、さうして國の方へお歸りになつた。それはどの道を取られたか判明はせぬが、兎に角伊勢を経て、四月になつて安房へお歸りになつた。安房にお着になると、先づ清澄寺へ歸られて、師の道善坊に報告し、それから清澄山の麓の小港なる御兩親

に報告せられ、更に十有五年の研究の結果を發表せられるといふので、清澄寺の諸佛房——是は聖人の師の道善坊が居られた房であるが、其の傍に別に聖人がお好みになつたのであらうが、一庵をお設けになつて、四月二十二日から其の庵へお入りになつた。そして一週間一切他人をお遠ざけになつて、三昧に入られた。此三昧は所謂降魔で、凡そ非常な偉人が何か宗教上の大發表をする前に當つては、必ず自分の精神界に一つの非常な大戦闘が起るものと見える。大聖釋迦牟尼佛も悪魔の降伏をせられた。耶蘇も愈々基督教の宣傳をする前四十日、食はず飲まずして野に居つたと云ふ事が書れてゐる。マホメツトも矢張り愈々教を説く少し前は物を食はず、氣絶する様になつて居つたといふ話である。大聖人は丁度一週間——もう其の大體は既に叡山に於ける最後の一年間に決せられて居る、先に申した富士に傳つて居ると云ふ俊範にお話のあつたといふ様に、何等かのかたちで法華經の實在の風光を直接に感ぜられた事である。其の時略々成つて居る様であるけれども、併しそれは御自分の御格護だけである。之を愈々世間に發表しやうと云ふに就いては、精神に一つの健闘が起る——愈々之れをいひだせば兼て期したる大難の來るよとの意味での深い反省より起る健闘——其健闘は即ち之を靈的に云つたならば、悪魔との戦争である。精神に起り來る悪魔を降伏するのである。又此法界に最も正しい力が出やうとする時は、必ず其世界に存在して居る處の人間の精神の悪い心の積集した力が現はれる。私共凡夫でもさう考へる。此頃國柱會の講演がある

と乾度雨が降るか、雪が降るか、風が吹くか極つて居る。これは四五年前に恩師大先生が、大阪で國體宣揚の講演會を開かれた時に大雨に遭つた。それから以來國家諫曉か、若くは國體宣揚か、國柱會の講演などがあると、必ず天氣が悪い。是は偶然だらうが、偶然がどうも不思議で堪らない程だ。けれども私共はそれに對し宗教的には是は何か國體思想反抗の思想が、日本人の精神の根本に影響して居るので、それが惡魔的勢力になつてやつて來るのだらうと思つて、槍でも鐵砲でもどどん降つて來いと思つて居る。——兎に角宗教的偉人が其道を説く前には、必ず悪魔の障りとの間に精神界の健闘が起る。日蓮聖人は元と天台宗の學者なのである。それが諸宗外典一切經を研究して其研究の結果或るものを發表しやうとせられるのだ。自分だけがどうか成るのぢやない——自分だけがどうか成るのでも——迫害障^{しやうばい}がある、それが成就出來ないといふのが普通の人間である。況して自分だけがさう信するのでなくして、世界の全體を斯く信ぜしめんければ已まぬといふのであるから、世界中全體の人間の精神的責任は、今や開宗の宣示をせられんとする大聖人一人の人格の上に懸るのである。聖人が之れを發表せられる時には、世界中全體の人間の精神的責任をお負ひにならなければならぬのである。それを聖人が背負つた儘立ち、そして御自分の嘗て有つて居られた所の、有ゆる佛教諸宗の智慧、外典人道の智識、それ等を超越し越階してしまつて、如來滅後二千二百餘年いまだ無き新たなる宗教を創められるのであるから、其中に精神的煩悶が起らないわけ

には行かない。此に於てか禪定に入る、正しいものと悪しきものとを截然断つことの出来るあの禪定と云ふものに入るのである。そこで聖人は外部からの一切の刺戟を避けて、さうして一週間の禪定に入られた。此一週間の禪定の中、遂に聖人が降誕せられてから以後、末法萬年の一切衆生を支配する所の大なる道の光は、聖人の精神の全體を被うた。即ち建長五年四月廿八日、大聖釋迦牟尼佛御入寂の後二千二百〇一年を経た四月廿八日。夏の初め太陽が太陽としての熱を益々強くしやうとする初夏の、此日の拂曉を以て、聖人は新たに造られた諸佛房の傍らの小さな庵室を出られたのである。曙の明星が輝いて天は明けんとして未だ明けず、清澄山の道は悉く露を含んで居る。其道の露を踏みつゝ、庵室を出で、徐ろに歩を運ぶ六尺三寸の偉大なる一人の僧侶、是れ即ち日蓮聖人である。明星の更に消え行かんとして一際輝く姿を眺め、東を指して旭森、清澄山の絶頂へ登られた。清澄山は前に疊々たる山又山を控へて居る、遙か彼方には海、未だ夜の明けんとして明ざる前の海は、御存じの通り静かである。仁者山を愛するの山を控へ、智者水を愛するの水を控へ、しかも勇者の如き海を控へ、遙か先きに曉の女神摩利支天女を先立て、明星の光を破り、曙の光りは東の空を彩りわたる時、瞳々と海から昇る旭日に向つて、初めて末法萬年を救ふべき、一切の人間の眞の自己を發表し、眞の第三帝國の思想の力を世界に來らしめ、人天を一つにする唯一の眞理の叫び、南無妙法蓮華經の大本法をお唱へ始め遊ばされたのである。此の雄大莊嚴なる開宗の儀式は

聖人の宗教の如何に偉大であるかといふ事をば證明する象徴である。さうして先づ世界の一切の者をば光あらしめ、一切の者に熱を與へ、一切の悪い微菌を殺し、一切の物に生々發育の力を與へるあの太陽、所謂世界の代表者に南無妙法蓮華經を聽かしめたこと云ふ事は、一面から言つたならば、世界全體を妙法化してしまふことのシンボルである。

聖人は茲に目出度く開宗の儀式を終つて、諸佛房にお歸へりになると、其日——四月二十八日の午の時、日輪の中天に來るの時、此の午の時をば、佛教では諸佛の食時なりとする、朝の八時は諸天の食時、正午は佛の食をする時であるといふ、佛だの神だのといふ靈界の力は、若し食物があるとしたならば、何を食物にするだらう？ 佛法では、佛は妙法を食とする、諸佛は眞理を食すると云ふ。其の眞理を食とする所の諸佛の食時たる正午の時を以て、聖人は此の法華經の法門を説き始め出されたのである。其の事は「聖人御難事」と云ふ御書の中に書かれた。「日蓮が此の法門を始めたのは安房の國東條郡である。天照大神の御くりや、日本第二の御くりやがある所である」と仰せられた。是は何かと云ふと、伊勢の皇太神宮は朝廷か廟食し奉つたので、國を代表して祭られたのであるから、是は日本第一である。それから聖人の御生れになつた安房の東條の天照大神は、源頼朝が將軍として——實際の執政者たる將軍として——廟食し奉つたものである。だから是れは日本第二の御廟である。然るに承久の亂に依つて京都の御威光は全部無くなつてしまつて、日本全部

は鎌削の支配になつてしまつた。即ち其實際の執政者たる鎌倉殿が、日本の鎮護の神様なりとして祭つて居る天照大神であるから「昔は日本第二の御厨であるが、今は日本第一である。其郡の内清澄山の諸佛房の持佛堂の南面にして、午の時に此法門を申し始めた」と言れて居る。其の天照大神の御厨のある所の東條の郷の、清澄寺といふ事を、わざ／＼開宗の時に仰るのは、私共の考へて置かなければならぬ所である。開宗する前の月に一度伊勢へお詣りになつて、さうして天照大神に何か申上げられる所、訴へられる所があつて、而かも之を言ひ始められるのは清澄山——自分が發心出家した所へ歸つて之を唱へる。それに就て清澄山は何だといふ事こいふに、先づ天照大神の御厨があるといふ事を特に言はれた。是等の事蹟は畢竟聖人の宗教と日本國との契合がどんな所にあるかといふ事の一つの保證となるのである。で其の諸佛房の持佛堂の南面にして此の法門を申し始めた。其の時仰つた事は想像して見ると『如來滅後既に二千二百〇一年を経て居る。其の間印度、支那、日本を経て小乗大乘顯教密教八宗十宗の御教がひろまつて居る、然るに現在の日本はどうであるか、現在の日本が現在の狀態の佛教で、眞に佛の法が存在するといひ得られやうか。又日本としての佛教の効果を奏してゐると云ひ得られるであらうか。佛の豫言せられた處に依ると、小乗大乘等一切の普通佛教は是から以後世間を救ふべき教法ではない。佛既に「大集經」に於て、我が入滅の後、二千年経つたら、それから以後の世界は、最早や開闢堅固、白法隱没の世界である。評ひのみに人の

心が固つて、普通佛教の經典が役に立たぬ世界である。其の世界になつたならば、たゞ唯一の大法たる妙法蓮華經のみが光あるべき時であると説かれて居る』斯う云ふことのお話があつて、必ず妙法の叫びをなされ、それと共に現今ある所の佛教の根本改革の御意見たる、念佛は無間地獄の業なり、禪は天魔の法なり、律は國賊なり、眞言は亡國の法なりの四箇の格言をお叫びになつたのであらう。其時に聽いて居つたものは、師の道善坊、及び道善坊の兄に當る道義坊、或は聖人の兄弟子たる淨顯坊、義淨坊あるひは淨圓坊、圓頓房、圓密房、圓智房、實成房、及び其の他の大衆、並びに地頭東條左衛門尉景信等を主として、清澄山の師弟檀越等を集めて、聖人は此の大宣言をせられた。此に於てか東條左衛門尉景信は、念佛の信者であつたから大いに怒り、是は怪しからぬ坊主だ、十五年修行の結果は佛法を滅ぼす奴になつたと言ふので、直ちに聖人を殺さうとした。其の時に師の道善坊が、マア少しお待ち下さい、蓮長は餘り學問をやり過ぎて、チト慢心して氣狂になつたので御座るから……と様々に景信を宥めたので、景信は一時は漸く納まつたが、なか／＼根からとけたのではない。聖人を此の處へ置くことは景信のみならず、大衆達も肯はない。道善坊はさまざまに訓誡し、また勘當するとまでいつたが、聖人は十有五年待ちに待つて居た老たる師の期待にも背いて、勘當を受けた。到頭兄弟子の淨顯と義淨の二人が、聖人を裏から落した。かくて裏山から秘かに清澄山を下り、西條の華房と云ふ處へお出でになつた聖人は、其の華房の阿彌陀堂の開眼供養

にあたり、斯の如き阿彌陀佛はこの娑婆世界の主師親でない、大聖釋尊を捨て、我が主師親ならぬ阿彌陀佛を専ら頼むは、自らの主師親を捨つる咎により、極樂へ行くことの出来ぬのみでなく、無間地獄に墮つるであらうと誡められた。すると又殺さうと云ふ者が出て來たので、又これを避けられたが、かくの如くして聖人は故郷でなさんと欲する事は爲し遂げられたのである。何となれば、聖人は故郷に於て此の法を弘める事が主眼ではなくして、發心の地、父母の地、天照太神の御廟の地、その故郷は唯此の法を發表するに必要な所だつたのである。これ聖人の一生を貫ける報恩の觀念より發する擬宜であつた。之を弘むべき地は當時の政權の源たり。亦教權の源たる鎌倉であると云ふので、其の年の五月大法廣布の旅に登らるゝ道途に、先づ小港に行きて、父上母上を教化せられた。聖父母も、傍若無人ともいふべき聖人の説法を聞いて、深く歎き悲しむで居られたのだから聖人の歸り來らるゝを見ると、手を摺つて左様な新義を始めないで、天台宗の名沙門であれとかきくどかれた。けれども聖人は儼として之を斥け、その新義開宣の止みがたきこと、これ却つて天台傳教の正意なることを諭され、聖父母遂に歸伏して、妙日妙蓮の法號を受け、聖人自ら日蓮と名乗られた。かくて此のお二人がお弟子の一番最初である。御自身の發心せられた處で開宗を發表し御自分の肉體をお産み下された父母を先づ教へて、さうして飄然として鎌倉へお出でになつた。此に於てか鎌倉で愈々聖人の宗教弘通が創まるのである。(御事廣篇 二〇八へ)

(二) その御人格

(一) 絶大にして堅固深遠なる包量

出家修學の條で、聖人の夙成型と晩成型とを兼ね、天才型と修養型を兼ねられた御人格なることをいつたが、この「開覺立宗の聖者」の條においても、この二つが仰がるゝのみでなく、更に聖人の御人格が、非常に絶大なる包容を持たれて居ると共に深遠堅固なところが有りになることが證せられる。佛教の譬に「師子の乳は瑠璃瓶でなければ蓄へることが出来ない。瑠璃瓶でなければ破れて了ふ」といふことがある、これは如來の智慧はよほど堅固な人格と信念がなければ身にうつすことの出来ないことをいはれたものである。恰も聖人の御人格は、この瑠璃瓶であるといふ事を感じるのである。——世界の宗教と文明とに根本的統一を與へる根本人格としての聖人は、實に非常な大包容と堅固な御人格を持つておいでにならねばならぬ——。聖人は彼の西洋の多くの宗教的天才のやうに、多少精神病的のやうな傾向はありにならなかつたやうである。西洋の宗教的天才は、往々一面に病的のやうな性格があつたやうに思はれる。ロンブローゾの「天才論」を見ると、基督敎の大成者、異邦人の使徒たるパウロの如きも、また回々敎の開祖マホメットの如きも、癲癩のやう

な病をもつて居たさうである。マホメットは愈彼れの宗教の宣布をする前には、眞蒼の顔になつてブルブル顛へ出し、顛り倒つて暫くは氣絶したといふことである。ポーロの持病も癲癇ださうで彼は基督教徒を迫害に行つた途中で、絶大なる光に打たれて彼は驚倒した、其の時、復活のキリストを見て、遽に基督教徒になつたといふことである。その宗教的經驗はなか／＼貴いものだが、而もさやうなことは彼の病氣と全く無關係であつたであらうか。また宗教改革の偉人マルチンルツテルが、彼の宗教心を眞に起したのは、ある時友人とともに散歩して居つた。處が突然の落雷に二人とも驚いた、が友人は感電して死んだ。彼は辛うじて脱れた。共に歩いて居た友人が死んで自らのみ生き残つた、これには何か神の攝理があらう。また人はいつ如何なる事で死ぬかもわからぬとて、いよ／＼眞の宗教心を起したといふことである。然るに東洋の眞の聖人になるとさういふ病的なのは少く、また一時的のことで宗教心を急に起したなどいふのも少いやうである。釋尊が癲癇的病氣のおありにならなかつたことはもとより、孔子の如きもそんな病氣はなかつたやうである。而してともに徐々として道をもとめた方で、その大研究の結果出来上つた聖人である。釋尊は婆羅門教の各派や、當時の數論、勝論等の哲學を研究せられた結果、彼等の教理の眞理ならざることを覺られると共に、諸の苦行を捨て、御自らの思惟に入られ、樂行の結果、彼の大覺を得られたといふことである。孔子でも周公文王の道の大成者として尊信せられて居られるが『十五にして學に志し、三

十にして立つ』とあつて、十五の志學から當時のあらゆる學問をした、その中には虛無論者たる老子に禮を問ふた事もある。かく『學に常の師なし』といふやうな研究の結果、三十歳の頃ほひ、漸く文王周公の道を以て世を救はむの志を立てられたので、多年修養の結果として作り上げられた大人格である。したがつてその出處進退にも非常な理義が含まれて居る次第なのである。わが大聖人もまたそのごとく、十二歳にして『日本第一の智者』となしたまへと念願し、修養の結果二十一歳の時には、すでに大體の御思想はほゞ形づくられて居たにかゝはらず、當時のあらゆる宗教や道德のみならず政治や思想に屬するものまでを、なほ十有餘年精思研鑽の後、その大蓄積は、建長四年の頃ほひ、ほゞ一定の形となつた。然るになほ建長四年から五年の春にかけて、一年有餘の最後の考究に、唱へ出さむとする正義のみでなく、その正義と現在の世間思潮との關係その兩者の衝突、それより起る迫害艱難、それに對する捨身忍難の覺悟、救國護法濟世度生の不朽の誓願等を、十分に周到に詮量せられ、心中に幾十百回の智と情との衝突の大激動大風雨を起して、その後にして始めて世に發表せられた。當時のあらゆるものを吸収せられた研鑽徹底の御精神は、實にこれその包容の絶大なるにより、而してこの包容の絶大は、もとそれらの一切の智慧は、佛陀の大智に如法に信順するにおいてその生命ありとの大信念から出たものであり、いよ／＼佛陀の大智慧に契合せられてから後も、これを發表するまでに、あまたたびの反省覺悟を徹底せられてあるのは、その御性格

が堅固眞摯に深遠透明なるのいたすところ、またこれ佛陀の豫言を信するの深く親切なると、國をおもひ人をおもひ世をおもひたまふ忠誠大慈の究竟せるのいたすところである。

(二) 道徳的に徹底せる整然たる秩序

さらに著るしくこの「開覺立宗の聖者」としての御事蹟に學ぶべきことは、いかにもその出處進退の秩序の整然として、根本道徳的に徹底せられて居る所である。聖人の御發心は、唯一釋尊の宗旨に何ゆゑに八宗十宗の異りありやといふことと、救世度生の佛教および外典かくの如く盛に行はれて、而も我が國なにゆゑに斯の如く亂るゝや、天照太神以來萬世一系なるべき皇統のなにゆゑに陪臣の爲に遠流となり、あるひは海中の藻屑となり給ひしぞや。といふ日本國と佛法との疑問を決せむとしたまふが動機であつた。而して釋尊の眞實の宗旨を知り、この國の亂るゝ所以を知つたならば、命を捨てゝその佛の眞宗旨をひろめて國家の根本大平を確立し、それを以て父母師匠國王一切衆生三寶の大神を報すべきことを以て、その目的とせられた。この動機のこととは「光日房御書斷片」や「報恩抄」や、および「神國王書」等に明かで、すでに先に引用した。又その目的に就ては、「報恩抄」の劈頭に、

夫老狐ハ塚ヲアトニセズ、白龜ハ毛寶ガ恩ヲ報ズ、畜生スラカクノゴトシ。況ヤ人倫ヲヤ。サレ

メ古ノ賢者豫讓トイヒシ者ハ、劍ヲノミテ智伯ガ恩ニアテ、弘演ト申セシ臣下ハ、腹ヲサヒテ衛ノ懿公カ肝ヲ入タリ。何ニ況ヤ佛教ヲ習ハン者、父母師匠國ノ恩ヲ忘ルベシヤ。此大神ヲ報ゼンニハ、必佛法ヲ習キハメ、智者トナラデ叶ベキカ。

とも、「佐渡御掛氣抄」には、

本ヨリ學文シ候ヒシ事ハ、佛教ヲキハメテ佛ニナリ、恩アル人ヲモクスケント思フ。

「開目抄」には

佛弟子ハ、必ズ四恩ヲ知テ知恩報恩ヲ致スベシ。

とも仰せられ、また「一昨日御書」には、

世ヲ安ンジ國ヲ安ンズルヲ、忠ト爲シ孝ト爲ス。

とも仰せられたのによつて、聖人の御思召を拜することができぬ。

建長四年から五年にかけて堅實深遠なる考察禪思の結果、最初研鑽發意の動機たりし、如來出世一大事の因縁たる釋尊の宗旨も、この日本國の大法に對する特別の因縁も、佛法是の如く弘まりて而も國いよ／＼亂るゝ所以も、明かにわかつてお了ひになつた。その御目的たる遠大深高なる知恩報恩の道も、御得意になつてしまつた。またその實行の上に来たるあらゆる困難迫害に對する御覺悟も、最早十分にお定まりになつた。そこで悠然として叡山をお下りになつたのである。

而して第一に伊勢神宮に參籠して志をのべられた。所化の國の御先祖といふのみでなく、本國土妙國體建設の本法身にも約したる天照大神に對して、前に「日本の柱」とならむとの御誓願を樹てられたことを、まづ走つてこの大神の御前に之を奏された。これ「國土の恩、國王の恩」に報じたまふ所以の御志であつて、更に安房の清澄山に歸りて立宗を發表せられたのは、最初發心の時に、虚空藏菩薩に、日本第一の智者となしたまへと願せられた、今や日本第一の智者たる願を充たされたのであるから、その智者の所見の最初發表は、發心祈願の清澄山にせられ、一はもつて虚空藏菩薩の御恩に答へ、一はもつて師匠の恩に報ぜられたのである。されば「清澄寺大衆中御書」には、

此ヲ申サバ、必日蓮命ヲ斷ツベシト存知セシカドモ、虚空藏菩薩ノ御恩ヲ報ゼンガ爲ニ、建長五年四月二十八日、安房國東條郷清澄寺道善之房持佛堂ノ南面ニシテ、淨圓房ト申ス者、並ニ少々ノ大衆ニ是ヲ申シ始メ。

と仰せられてある。而もその法門開唱の前、旭の森に日輪にむかつて玄題十唱せられたのは、宇宙全體、この世界全體に妙法の灌頂を下されたやうなもので、また一には一切衆生全體に對する報恩救済を象徴せられたものである、さらに轉じて第一番に父母を大法の因縁にお入れになつたのは、申す迄もなく父母孝養——即ち父母の恩に答へられたものなることは明了で、かくの如く根本の報恩のこゝろをまづ整然とおすませになつて、さて後に命がけの鎌倉弘通、安世安民爲忠爲孝の舞臺へお

登りになつたのである。絶大なる包容と、堅固深遠なる性格、それに知恩報恩の根本道徳的發動が、整然たる秩序の上に、順次に一毫も紊れず踏みだされて行く。包容性、堅固性、道徳性、秩序性を、もつとも偉大深刻に示されてあるのが、この御事蹟においてあらはれたる聖人の御人格である。

(三) その教義面

自他を一貫せる三證圓具の批評より成立せる開宗

聖人の最初御出家の清澄寺は、叡山の末寺で天台宗ではあるが、慈覺大師の流で、ひんれつみつしやうり顯劣密勝理同事勝といつて、法華經と大日經とは理は同じであるけれども、大日經等の眞言の三部經の方が、印と眞言といふ即身成佛の作法、所願成就の無等等呪があるゆゑに、それだけ眞言の方がすぐれて居ると説くのであるから、聖人もお若い時代にはやはりこの眞言經の方が法華經よりも勝れて居るといふ御意見であつたことは、現存の「戒體即身成佛義」にも明かにせられてあるが如くである。それのみならず、この眞言宗には、法華經壽量品の佛をも、阿彌陀佛とするし、五方五佛の時でも、阿彌陀は西方證菩提の教主となり、また佛に約して彌陀、法に約して法華經、僧に約して觀世音などいふ密教の説もあるから、自然念佛をも獎勵する邊もある。聖人の師であつた道善坊のときも、念

佛を自行として居た。それは天台宗そのものでも、「止觀」の四種三昧の中、常行常座の二種三昧は、念佛であるから、この頃の天台眞言のおしなべての法師のごとく、道善房が念佛を常の行として居たことは、聖人の「善無畏三藏抄」でわかる。又御両親も天台宗の念佛であつたらう。随つて聖人も幼少の頃から、念佛を修行とせられて居たことは「妙法尼御返事」のごとくであるが、幾くもなく疑ひはじめられて最初の御念願のごとく、専ら釋尊の御本懐いづれにあるやを究めむとせられた。斯くて十七八歳の御時には、專修念佛の法門と禪宗の法門を御研究の上、法然上人等の念佛の正路ならざることを觀破せられ、法華開會の法門に夙くも深き造詣をせられたが、矢張慈覺大師の流だけに、法華の理に眞言の事を以てして、はじめて究竟の佛法たるべしとお思召であつたことが、「戒體即身成佛義」に明かになつてゐる。けれども「日本第一の智者」とならむとの念願は、聖人を驅て、當時の佛教大學たり大學院たる叡山、さては南都高野天王寺三井寺等に、笈を負はざるを得ざらしめた。こゝに廣く經論釋疏、諸宗の所立を研鑽せられた。その旺盛なる自由討究の御精神には、深刻なる批評的詮量が溢れてゐた。諸の經論の所説、諸宗の所立、それ自身の所説所論のみにして、よく八宗十宗を出せし一切の經論、一代の佛教のすべてを正當に統一的に解釋し盡し得たる經論宗見ありや否や。その所説所論に矛盾なきや否や。一切經論一代佛教の何物かに對しては、取りのけを要することなきや否や。斯の如く詮量攻究せられたのは、一切の諸經論諸宗の章疏に對する内面的批評

で、即ち道理……理證……比量……理論的證明を徹底して求められたものである。つぎにまたたへ辛うじてその經論の所説と、その宗師の章疏とを以て、よく一切經論一代佛教を矛盾少く取のけ少くなく解釋し得たりとしても、果して其の經を以て宗主とし、一切經論一代佛教を統一的に解釋し盡すことが、釋迦牟尼佛の御精神なりや否や。釋尊の勅宣なりや否や。斯くの如く詮量攻究せられたのは、諸經論および諸宗の章疏に對する超越的批評で、即ち佛説の證據……經證……聖教量……聖權的證明を徹底して求められたものである。次にはたとへ辛うじて經論の所説と宗師の章疏と釋尊の勅宣とは似たものがあつても、その經教宗旨を提唱した古來三國の論師人師が、果して其を以て自らの眞實を披瀝したるものなりや、時の衆機に如同して方便唱導したるものに非ざるなきや否や。またたとへ其の論師人師は、それを以て眞實本意とするも、その人の出處進退はよく萬人の標準たり、釋教の理想となり得るや否や、その教の盛んに弘通せられたる世は、果して世間が佛法的に眞に治まり居たるや否や。たとへ少しく治まりたりとするも、その中に非常なる惡弊、次代の亂世を醸すべき萌芽なきや否や。斯の如く詮量攻究せられたのは、諸論師諸人師及びその所立に對する現實的批評、文化史的批評で、即ち現前の事實……現證……現量……事實的證明……文化史的證明を徹底して求められたものである。これを總概すると、聖人は實に各面に徹底した批評的批判的精神を以て、全佛教そのものに對せられたもので、即ち左のとほり。

道 (理論的證明) …… 内在的批評
 佛說ニ證據(經證) …… 超越的批評
 佛說分明ニ(聖樞的證明) ……
 現 (現證) …… 現實的批評
 前 (事實的證明) …… 文化史的批評

實にその御用意の周到なることは現在の學問旺盛の世の研究法としても、ほとんどもなきばかりである。かゝる精透緻密公平無私なるレンズの下へ、あらゆる諸經論や諸宗の章疏を持來つて試験せられた。その結果は、畢に一代佛經においては妙法華經、一切諸宗においては天台法華宗、その天台法華宗も、天台妙樂傳教義眞等を正師とし、日本に於ては此の以後の慈覺智證等の眞言かぶれに依らず。支那に於ては、道遠行滿以後、宗頌等の眞言かぶれ山家山外の閑葛藤に依らず。而もこの天台妙樂傳教も、なほその時機將護の方便説を含むことを、理經現の三證によりて覺られ、更に三證具備し徹底せる、最後の宗教を建設せられたもので、これ實に吾が日蓮聖人の、生知安行、獨創建設の宗教で、諸宗の中、天台のみは認せられることは、先きに引いた「寺泊御書」に明瞭で、また自らの御建設には「曾谷入道殿許御書」に

迦葉阿難等、龍樹天親等、天台傳教等ノ諸大聖人、知ツテ而モ未ダ弘宣セザル所ノ肝要ノ秘法ハ法華經ノ文赫々タリ、論釋等ニ載セザルコト明々ナリ、生知ハ自ラ之ヲ知ルベシ。賢人ハ明師ニ値遇シテ之ヲ信ゼヨ。罪根深重ノ輩ハ、邪推ヲ以テ人ヲ輕ンジ、之ヲ信ゼズ、且ラク耳ニ停メ、

本意ニ付カバ之ヲ諭サン。

と仰せられ、「妙密上人御消息」には、

外典ニ云ク、生レナガラニシテ之ヲ知ルモノハ上也 人ノ名也。學ンデ之ヲ知ル者ハ次也 人ノ名也。内典ニ云ク、我が行ハ師ノ保ケ無シ等 云。夫、教主釋尊ハ娑婆世界第一ノ聖人也。天台傳教ノ二人ハ、聖(ト)賢(ト)ニ通ズベシ。馬鳴、龍樹、無著、天親、等、老子、孔子、等ハ、或ハ小乘、或ハ權大乘、或ハ外典ノ聖賢也。法華經ノ聖賢ニハ非ズ。今日蓮ハ聖ニモ賢ニモ非ズ、持戒ニモ無戒ニモ有智ニモ無智ニモ當ラズ。然レドモ法華經ノ題目ノ流布スベキ、後五百歳二千二百二十餘年ノ時ニ生レテ、近クハ日本國、遠クハ月氏漢土ノ諸宗ノ人々、唱ヘ始メザル先ニ、南無妙法蓮華經ト高聲ニ喚ブ。日蓮日本國ニ生ゼズンバ、但佛ノ御言ノミ有テ其義空シカルベシ。譬ヘバ花サキテ果ナラズ、雷ナリテ雨ノフラザルガ如シ。佛ノ金言ムナシクシテ、正直ノ御經ニ大妄語ヲ雜ヘタルナルベシ。此等ヲ以テ思フニ、恐クバ天台傳教ノ聖人ニモ及ブベシ。又老子孔子ヲモ下シヌベシ。とも仰せられてある。この御悟りは、實に叡山最後の一年にあるので、即ち上行菩薩の自覺は、すでにこの開覺立宗の聖者としての時に定まつて居るのである。然らずむば經證理證現證を重するこゝと聖人のごとくにして、南無妙法蓮華經の題目修行と、念佛無間等の三國未曾有の清新超越せる大宣言を、經釋の根據なく唱へ出さるゝわけがなく、またその所唱に命を賭け、「智者に我義破られず

ば用ひじ」と叫び、天下を敵として立たるゝことは想像の出来ぬことである。若し經釋等に根據の御確信が立つてあつたとすれば、その御確信は、上行自覺、三大祕法、五義宏判の外はないといふことは申すまでもなきことで、斯く解しなければ、決して聖人の立宗を矛盾なく解釋することは出来ないのである。而もその内容發表を佐渡流罪まで御待ちになつたのは、それこそ聖人の御人格が徹底的に統一せられてゐる所以であつて、聖人は決して他を批評する眼光のみ鋭くて、自ら省みる眼光の鈍い人ではなかつた。他を批評する眼光は、また自らをも批評する眼光であつた。それゆゑ聖人は、各宗をその教義の内在的批評と、佛説より見る超越的批評と、現前の事實および史的事實よりする現實的文化史的批評とを以て批評せられたが如く、聖人自身の宗教をも、この三の批評に遺憾なく堪へ得るやうの建設法をお探りになつたので、佐渡流罪までの身行、即ち現實的證明を以て佛説の豫言的確實を證して、聖權的證明を確實にし、この現實と聖權との二證明を背後にし、教義の具體的内容を發表して、理論的證明をもいよ／＼確實にせられたもので、此の如きはこれ實に聖人一家の批評法たる「道理は文證に若かず、文證は現證に若かず」を活現し、理經現の三證を離すべからず、如すべからざるものとして、堅實無比の宗教建設を試みられたもので、何人もこれを容易に打ち毀すことの出来ないものである。而して其の現證を自身に來らしむるの豫定は、この立宗の時から確實なる成算であるから、つねに「本より存知の旨也」と仰せられたのである。

若し然らば經文の豫言、即ち「法華經」の勸持品の二十行の偈、寶塔品の六難九易の如き、末法法華經の行者たる、上行菩薩の受くべき種々の迫害等に、未だ遭ひたまはざる時、清澄山の開宗最初の第一聲、さし昇る朝日に向ひて唱へられた南無妙法蓮華經の五字七字は、いかなる法であつたであらうか。御自身に上行菩薩の自覺を發表せられざる以前、それは無論「法華經」神力品で、佛から上行菩薩へ授けて末法に弘通せしめられた五字七字だといふことは出来ない。それは果していかなる法であつたらうか。

教義的解釋としては、之を外用と内證とに分つて説明する。即ち内證においては、聖人に上行の自覺が叡山の最後にお有りになつたがごとく、此の題目が如來壽量品の三大祕法の一つであり、また如來神力品で、佛から上行菩薩に授けられた法體であることはいふまでもない。けれども外用においては、聖人が上行菩薩の垂迹なりとすべき現證がないから、その自覺を發表することは出来ない——のみならず豫言を實驗したといふ事實がなければ、その自覺も不拔の根柢が定まらない——随つてその唱へられる題目も、三大祕法の一としての題目だと説き示すことは出来ない。するとそれはいかなる法體であるかといふ時、これ天台大師、妙樂大師、傳教大師等の、法華經の正統解釋者の傳統的に承繼して來た題目であるとす。すなはち旭の森で始めて唱へ出された題目の梵音は聖人自覺の直接發表としては、三大祕法中の本門の題目であつて、之を説明する場合に、佐渡以前

にありては、しばらく天台以來の傳統秘藏の法門としての南無妙法蓮華經なりとせられたのである。それゆゑに「十如是鈔」や「一念三千法門」や「一生成佛鈔」や「總在一念鈔」等には、題目をば、一言の一念三千、一心三觀なり。或は教門得道の最上法門なりとせられ、殊に「一念三千法門」には、心地の觀念の一念三千と、信心口唱の妙法五字との功德齊しきことを反覆説明せられて居る。而して一念三千と妙法五字の口稱とは、是等天台妙樂等の傳統たるばかりでなく、龍樹、天親等の菩薩方もとより、總じていへば、

阿彌陀、釋迦等ノ諸佛モ、因位(菩薩なりし時のこと)ノ時ハ、必ズ止觀(一念三千の觀心を目指す)ナリキ。ロズサミハ必ズ南無妙法蓮華經ナリ。(十章鈔)

である。これは聖人が叡山で傳へられたまうた慧心流の「修禪寺決」等の七箇相承、檀那流の五箇相承等を究極的に解釋せられたものである。佐渡において聖人みづから上行菩薩の自覺を發表したまふと共に、此の題目を其等の傳統とせず、久遠實成の本佛の因行と果徳を、具體的に包藏したる、本佛大智大慈の結晶體として、上行菩薩に授けて、末法の衆生に賜へる如意寶珠なりと開顯したまうたのである。(なほ第四講の教義面で講ずる)

第四講 豫言の奇禍

教法と國家との疑問の解決と、徹底せる四恩報謝の道念とに燃えて居た善日鷹が二十年の刻苦精進、蓮長法師が十有六年東請南詢の修學は、大聖釋尊正統の佛教、天台傳教等の弘通の直系發展として、末法相應の大法、法華題目の妙宗を開覺し、これを父母が我を生みたまひし生誕の地(父母の恩)發心感應の虚空藏菩薩鎮護の地、剃頭の恩師住持の地(三寶の恩)、國祖天照太神垂迹奉祀の地(國王の恩)に歸り、まづ全世界の一切衆生の代表として、日天子に對つて新福音を唱へはじめ、故山有縁の衆生(衆生の恩)を集めて、最初の折伏説法を爲したまひしことは、是れ即ち教法と國家との根本的疑問を解決して、徹底せる四恩報謝の象徴としたまひしものである。それゆゑに聖人、後年身延に法華經講演の時、經の方便品の「如我昔所願、今者已満足」の文を講じ、「日蓮が今者已満足とは、建長五年四月二十八日の朝に在り」(日向の記)と仰せられたのである。

併しながら清澄山附近房總の地を教化せらるゝことが聖人の目的なのではない。聖人の目的は、日本一同に新宗教に覺めしめ、やがては世界全體を妙法化するに在る。日本國一同の覺醒は、政教いまだ分離せざる封建時代にありては、まづ時の政府の所在地、政權教權の中樞たる鎌倉の地に寫進せねばならない。故郷に開覺立宗した聖人は、「豫言者納れられざる」通義に漏れず、僅に父母を感化したるのみで、師匠の勘當と地頭の刀杖とに送られて、鎌倉へ遷られた。

聖人の鎌倉弘通は、之を二期に分たねばならぬ。前期は最初の鎌倉時代より伊豆流罪に終り、後期は伊豆赦免後より龍口法難に終る。その前期の中心は「立正安國論」であつて、その弘通の結果が伊豆流罪である。而してその「立正安國論」は豫言の書、此の豫言の罪禍として聖人は流罪せられたまうたのであるから、前期鎌倉弘通時代をこゝに「豫言の奇禍」と題して講ずることにする。

(一) その御事蹟

清澄寺を脱れ出で、華房から避けた聖人は、小港に兩親を教化して、建長五年の五月、安房の西海岸なる泉澤村の、今は南無谷妙福寺(六老僧の日頂尊者の弟子日念の開基)といふ寺のある處、そのの權頭太郎及び次郎三郎兄弟の家に一宿し、それから相模の米ヶ濱(今の橋)へ渡り、とある岩窟に數日誦經して、後に三浦街道を鎌倉へ入られた。夏の半ば炎暑は人を熱殺するばかりであつた。一介の笠一本の杖、經王法華經を護持した聖人も、鎌倉の東南口なる名越へ這入つて來られた時、非常な渴を覺えて、念誦しつゝあたりに清水(しみづ)もがなと求められると、路傍に濕り(ぬれ)を帯びて居る土がある。そこを杖でつかれたら、清水が湧涌して出て來た。それに渴を醫されて、これ我が因縁の地なりとて、居を名越に占め、松葉ヶ谷と名けらるゝ地に、一の小き庵室を構へて、誦經唱題にしばし行ひすまされるに至つたと傳へて居る。その米ヶ濱には後に龍本寺が建ち、清水の出た處は後世鎌倉十名水の一として日蓮水と名けられ、現に故蹟として保存せられて居る。

玉澤の日宗日通二師が研究した傳説によれば、聖人が名越に庵室を營まれたのは、決して偶然のことではない。それは北條義時の子の朝時が、名越に居たから名越殿と名けられて居る。彼れは和田合戦の勇將として、足利義氏と共に、朝夷義秀に太刀打した唯二人の武將のその一人である。戦後その功により、和田領であつた安房の莊園領家の一となり、彼の死後は、その妻室が、それを領して居た。東條郷もその領地の内であつて、聖人が「領家の尼御前」とも「名越の大尼御前」ともいはるゝのは此の人で、聖人の御兩親にも一方ならず好意を寄せ、聖人遊學の資縁をもしたから、名越の御庵室も、此の尼御前の緣故で此の地に止まらせらるゝやうになつたものだとして居る。今においては此の傳説の眞偽、即ち領家の尼と名越の尼との同異を確定すべき材料がないが、考究の價值ある一説として掲げる。

その庵室の地は果して何れであつたらうか？ 現在はその庵室跡として、鎌倉松葉ヶ谷に、安國論窟寺、妙法寺、長勝寺といふ三寺があり、おの／＼我地こそその靈跡だといつて居る。それと同時に亦三寺とも京都の大本山本國寺の遺跡だとも主張する。それは松葉ヶ谷の庵室跡へ、妙法寺が建てられ、それが京都へ遷つて本國寺となつた。本國寺の本であつた妙法寺は、なか／＼の大寺であつたから、今の三寺ともに實際本國寺址であるかも知れない。御庵室は安國論寺に日朗尊者の茶毘所などのある處から見ると、此のあたりであつたかと思はれるが、また地勢から見ると妙法寺の場

處も、或はとおもはるゝ邊もある。近時長勝寺こそその址だと主張する人もあるが、要するに未だ確定すべき材料はいづれにも具備せぬし、必ず研究を要すべきほどの大問題でもないと思はれる。

聖人はその松葉ヶ谷の庵室に、はじめの頃は、専ら法華經を讀誦し、題目を唱へ、觀念を凝して何等の活動もせられなかつた。世間では暫くは、一人の旅僧が來て庵室を構へ、専ら法華經を讀誦し、南無妙法蓮華經を唱へ、止觀の觀念に住して居る。定めて天台宗の隱遁者でもあるか位に尊して居たことであらう。

するとその十一月に、叡山から假名を辨公といふ一人の學僧が尋ねて來て、聖人の御弟子になつた。聖人は爲めに日昭といふ法諱を授けられた。これ聖人第一の御弟子である。この人は下總國能手郷の産れで、印東次郎左衛門尉藤原祐照の子、母は伊東大和守祐時の姉で京都の人だつたから、その所縁によつて左大臣近衛兼經の猶子となつて叡山に修學し、權律師成辨といはれて居た。聖人より二歳の兄で、叡山では同學であつたらうが、かねてから聖人の學識人格に推服して居て、聖人鎌倉に出でたまひ、新宗教を宣傳したまふと聞いて、直ちに來りて聖人の化導を扶けることになつたといふ玉澤傳が、私は事實に近いものと思ふ。他の傳説では、此の人はこの時十八であつて、尊海の弟子で叡山に在る時、慈覺智證兩大師の眞言中心の法義に疑を挿み、傳教大師の法華經中心の精神に戻れりと論じたので、尊海が之を誨諭したけれども聽かない。仍で「お前は蓮長の一昧でない

か」といはれ「その蓮長とは何人ぞ」と尋ねたら「それは慈覺智證兩大師の所立を誹議し、下山して關東に趣き、今は鎌倉へ出て居るさうだ」と聽いて、さらばその人に遭うて我が疑ひをはらさむと、遠く尋ね來り、聖人の教を請うてその弟子となつたといふのである。小説としては此方が面白いが、併しながら日昭尊者の「法華本門圓頓戒血脈相承譜」には「權律師日昭」と記されてある。日昭尊者が、大聖人御滅後になつてから叡山の戒壇を踏み、權律師の僧官を得たといふことは考へられぬことで、若し事實さやうな事があれば、富士日興尊者の門下の人が「五人所破抄」などの中へ攻撃の材料にしない筈はない(日蓮聖人の門下の人は聖人の門下になつてから後に更に叡山などで受戒する筈のないことは法義上重大な禁制問題になつて居るからである)。とするとその僧官は必ず日蓮聖人の御弟子となる前のものとせねばならぬ。するといかなる秀才でも攝關大臣などの實子で、もない限り、十八歳で僧官を得る筈もなく、まづ玉澤傳の三十四とする説の方に従はねばならず、その年輩とする時は、聖人が圓頓房蓮長たりし時の同學にして、一種の默契は、山門在學中既に互に成立して居たものとするを自然に近いとすべく、また聖人の御消息類を拜しても、日昭尊者に對しては、聖人の口調差排ともに、日昭尊者以下に對する時とは、おのづからに異つて居る。それにも昔の同學今の弟子といふ説を裏書する幾分の理由をも見られ得る。ゆゑに私共は日昭尊者は、叡山における默契者で、いよ／＼聖人起ちたまふと聽いて、たゞちに馳せ参じた人だと見るものである。

此の大なる與同者、繼承者を得た聖人は、その歳の十一月から翌建長六年の春までは、おそろしく成辨律師の爲に傳法し、且つ向後の宣教に就いての打合せをせられたに相違ない。傳説に依れば、聖人は、御自身の新宗教を宣傳せらるゝ時は、かならず聖人に打破せらるゝ念佛眞言禪律等各宗の僧俗、政府も民衆もひとしく聖人を迫害するであらう、刀杖瓦石、流罪死罪に當てらるゝ事は格護せねばならぬ。いはゆる「身命もとより期したる」事でなければならぬ。「開目鈔」に、聖人弘教の最初の時の心地をば、

此ヲ一言モ申シ出スナラバ、父母兄弟師匠國主ノ王難必ズ來ルベシ。イハズベ慈悲ナキニ似タリト思惟スルニ、法華經涅槃經等ニ、此ノ二邊ヲ合セ見ルニ、イハズベ今生ニ事ナクトモ、後生ハ必ズ無間地獄ニ墮ツベシ。イフナラバ三障四魔必ズ起ルベシト知リヌ。二邊ノ中ニハイフベシ。王難等出來ノ時退轉スベクバ、(今)一度ニ思ヒ止ムベシ。且ラクヤスラヒシ程ニ、寶塔品ノ六難九易コレナリ。我等程ノ小力ノ者、須彌山ハナグトモ、我等程ノ無通ノ者、乾草ヲ負ウテ却火ニハ燒ケズトモ、我等程ノ無智ノ者、恒沙ノ經々ハヨミヲボフトモ、法華經ハ一偈一句モ、末代ニ持チガタシト説カル、ハコレナルベシ。今度強盛ノ菩提心オコシテ退轉セジト願シヌ。

といはれてある。父母兄弟師匠の難はもとより、王難の一分ともいふべき東條景信の刀杖をば、清澄の開宗ですでお感じになつたのであるから、況して鎌倉での弘教には、王難の大なる流罪死罪

存知の旨である。刀杖瓦石流罪死罪を受くるものとすれば、身命もとより思ひ切らねばならぬ。折角新福音を開覺し宣傳しても、後繼者なしに殉教して了つては、その道は斷絶して、開覺弘教も無益に歸してしまふ。仍で聖人は鎌倉に入られてからも、繼承者のあるまでは、外面的活動をせられなかつた。爾るに今や成辨律師日昭が御弟子となつた。聖人は此の人に御自身の今弘通せむとする宗旨を傳へると共に「我れは今より諸宗折伏の陣頭に立つて刀杖瓦石、流罪死罪の的となるべし。おん身は宜しく内に在つて我が法義を傳承し、弟子檀那を整へ、若し日蓮が法敵の迫害に死することにてあらば、宜しく我が弟子檀那を率ゐて、我が跡を繼いで法華折伏の陣頭に立たれよ。日蓮が身命かくてあらむほどは、おん身ふかく内に蘊みて迫害を避け、決して日蓮と同罪になるなどの事なきやう要慎したまへかし。攻るも守るも、共にたゞ大法の御爲め、釋迦佛の御爲め、一切衆生の爲め、此の國の爲めである。おん身その任務に當りたまはゞ、我れ快く後顧の憂ひを慮らず、況滅度後の大難の鋒先をおかして、末法相應の大法を弘むべし」と、成辨律師に謀られた。律師もまた始めより聖人の御化導を扶け參らることが本意であつたから、欣然として「不肖ながら日昭、師の御房萬が一の後は、亦芳躰を繼いで軀命を惜まず大法に殉じまゐらすべし。御心おきなく御思召のまゝに弘通したまへかし」と御受けをした。

最早や後顧の憂はなくなつた。是に於て乎聖人は、鎌倉幕府の御所の表門の通りなる小町、それ

は大名小名の多くの通行する路である。その町の一つの辻に、夷堂がある。その傍に負笈をおろし法華經十卷を置き、六尺三寸の堂々たる御軀、生々潑潑たる三十三歳の壯年の、識見一世に超越し信念直ちに本佛釋尊に接して、救世護國の大抱負に、敢然身命を擲つて五濁の衆生、謗法の國家を救ふべく、烈々たる菩提心の燃ゆる火のごとき心胸から、叫び出ださるゝ焰なす破邪折伏の辻説法は、行き交ふ僧俗男女の頭に、雷の如く轟ろきわたつた。法華經を讀誦し、題目を唱へ、觀念の床に止觀の心月を澄まして居る旅の隱遁者、松葉ヶ谷の法華聖とおもつて居た鎌倉中の上下の人々は目をみはり胸を躍らしてその説法を聞いた。武士も、百姓も、商人も、工人も、僧も、尼も、入道も、修驗者も、いまだ我が國には前例稀れなる辻説法に集まつて耳を側てた。

壯烈にして清秀なる眉目、堂々たる容姿、剛柔かね具へたる朗々たる音聲と、整然たる釋尊一代經法の解説、巧妙なる因縁譬論とは、群れ立つ衆の眼と耳とをひきよせた。けれどもその説き出すところは、たゞ有りがたい法華經の功德の讚歎のみではなくて、辛辣をぐるが如き念佛宗、禪宗等の破折であつた。はじめ熱心に聴き惚れて居たものも、其の破邪折伏の提唱「念佛は無間地獄の業因なり」「禪宗は天魔波旬の法なり」を聴くと、今さら興さめ顔に、或は驚き呆れ、或は怒り嘲り、或は罵り騒ぎ、或は顔を撃め、或は唾を吐き、或は哄と晒ひ、或は念佛を唱へ、或は咒を誦し、或は喝と叫びなどして、避くるが如く、遁ぐるが如くして行き過ぎる。甚しいのは或は砂を擲げ、石

を投げ、瓦を飛ばす。けれども聖人は平然として知らざるが如く、いよ／＼益その無礎縦横の辯才のまゝに破邪顯正の舌鋒するどく、傍若無人の概である。かくて一日二日三日……十日、一月二月三月……と、春去り夏を過ぎ……秋を迎へ冬になつても、風雨の日を除いて、此の聖人の説法姿を見ぬ日はなかつた。中には禪宗、念佛者の僧俗の、小賢しいものが、質疑難問を試みることはあるが、一言二言乃至十言と續くものはなく、口は鼻のごとく、大風の前の落葉のやうに逃げ散つて行くのみである。瓦石の雨は日に日にはげしく、刀杖を擬して聖人の身に迫らうと念ふものはあつても、溢れいづる満身の精氣と、爛々たる眼光の威嚴に壓せられて、容易く御身に近づくことは出来ぬ。その中には此の辻説法を聴いてから、従來の信仰に疑ひを生じ、わざ／＼松葉ヶ谷の庵室に尋ね來つて、舊宗を捨て、新に聖人の新福音に歸するものもおひ／＼に出て來る。これ等の人は、かはり／＼辻説法の聖人を擁護する任にあたる。聖人は群衆の罵詈雑言を浴びつゝ、ます／＼其の聲を大にして、生疵の絶ゆる間なき御身を聊かも厭はれなかつた。

此の弘通はじめの頃に、聖人の檀越として資縁して居た人々は、古傳説に依ると、遊學以來の資縁者であつて、聖人母方の親戚にあたる下總若宮の富木五郎左衛門尉胤繼、同國の曾谷次郎左衛門尉教信、太田五郎左衛門尉乘明の三人、及び安房の領家の尼御前等だとなつて居るが、此の建長六年十月に、下總平賀郷の平賀次郎有國といふ人の男子、吉祥庵といふのが十二歳で聖人の御弟子となつた。これ後に大國阿闍梨日朗といはれた人で、母は成辨律師日昭の同胞であるところから見ると、日昭尊者の關係でか、平賀氏も聖人の檀越となつて居たものと察せられる。

聖人の辻説法！ 而も折伏弘通といふやうな、他宗排斥の宣教を、なぜ道路などでせられたものだらうか？ 陋劣なる心情を持てるものは、日蓮は新宗を開かうとしたが、各宗おの／＼繁昌して居て開くべき餘地がない。それで恰度、新店を設けた商人が、同業者の缺點を數へて、そして自家店頭の特徴を誇張して廣告すると同じやうなものだなどいふのさへある！。あるひはまた、日蓮は日本天台宗の保守黨であつて、新興の念佛、禪宗等に對する、反抗的對抗思想から、あのやうな極端な弘通を取つたものであらうなどいふものもある！。ともに笑ふに堪へざる愚論であるが、世間往々惑ふものもあるから、少々此についておかう。聖人はなぜ彼のやうな弘通をせられたものだらうかといふと、これに教義的、内面的の理由と、實際的、外面的の事情とがある。その教義的内面的のものは、教義の處で話すから、今は先づ實際的外面的のものからいはう。

前三講においてほどお話したやうに、聖人出現の時は、平安朝の天台宗(實はやは)と眞言宗等の祈禱佛教が、その權威を失墜して、皇室の政權失墜とともに、人生の有爲轉變は、如何ともすべからざるものであるといふことが、一世の人々の心の奥底に刻み込まれた。そこで此の塵垢の娑婆世界を罪惡の世界、絶待的に眞善美なき世界なりとし、遙かの理想世界を死後の未來に求める厭世教

の念佛と、いかなる有爲轉變にも心を動かさない、法界はこれ一切空、本來無一物といふ、執着を離れた精神力に活きやうとする禪宗とに、一齊に集つて行つた。これ客觀的（または主觀的）厭世教と、主觀的差別超越教（または内觀的平等教）とに歸してしまつたのである。

ところが聖人がその開覺からいふと、本來平安朝の祈禱佛教そのものが、既に佛教の本旨を失つたものであつた。聖人は後に承久の變等を以て、天台眞言の祕密佛教の積弊の潰裂であるとして居らるゝが、此の點からいふと、念佛、禪宗が起り來つた所以の背景、基調そのものからは認せられないのである。謬れる佛教が、謬れる時勢の状態を惹き起し、その謬れる時勢が生むだ宗教であるから、やはり謬れる要素を持てる宗教なりとせられた。聖人の開覺は法華經である。法華經を以て釋尊の根本本懷の宗旨なりとし、佛教の大統こゝに究れりとせられるにある。眞言、念佛、禪、律宗等の諸宗の教義も、その善きところはみなこれ法華經の一部分の眞理である。しかしながらそれ等の一々の經に、法華經の全體の眞理はふくんで居ない。法華經と比較すれば、彼等の經々は、眞理の各一部份、即ち相対的の偏理である。法華經が絶對的の圓理である。大乘經は小乘經に對すれば圓理を含むで居るが、法華經に對すれば、みな偏理を含むだ圓理、相対的の圓理……即ち偏理……で、絶對的の圓理でない。たゞ法華經の絶對的の圓理を豫想して、當分相對の眞理として用ふる時にのみ、諸の經教の利益もある。言ひ換れば釋尊中心法華經中心の佛教！、これ聖人開覺の佛教

である。この佛教本來の眞理を忘れた謬れる佛教が、佛教それ自身の大統を混亂し、その大統混亂の佛教を信じた人心が、また國家社會を混亂せしめたのである。平安朝の祈禱佛教が大統混亂の佛教で、それより生じた國家社會の混亂を果敢なんだ厭世佛教も、それを一空視する空觀佛教も、ともに一部分の眞理を全體の眞理なりとして、却て全體の眞理を排斥せむとする大統混亂の佛教である。而して一世の人心は、その保守派は依然としてなほ天台眞言の祈禱佛教に、その改進黨は念佛禪の厭世空觀の佛教に歸して了つて居る。こゝに於てか聖人がその開覺せられた眞理を唱へ出す場合には、どうしても佛教の大統を明にして、法華經、釋尊中心の崇敬を高く掲げて、從來の佛教の謬れることを説かねばならない。即ち破邪顯正を同時にせられねばならないのである。

それも念佛、禪等の各宗が、單に自己の依れる經々を尊崇するといふに止つて居ればよいけれども、各宗にはみな判教といふものがあつて、一代佛教の經々の位置を定める。念佛宗でいへば、法然上人の如きは、八宗を學問的には兼學して、釋迦佛の教にありては法華經の明す眞理が第一、大日法身の教では、大日經等の三部經の明す眞理が第一などいふことを承認して居るが、それ等の經教を修行し、その眞理を自心に證り得ることは、上代清世の人のことであつて、今日の如き末世濁濁の人にあつては、例令之を修行しても、到底何等の證をも得らるべきでない。證り得られぬとすればその修行は無用の勞苦を求めると過ぎない。況して佛教には、自力聖道とて、此の世にありて

眞理を自身に證つて聖人となるべき修行と、他力往生とて、他の淨土の佛の願力に乗じて、死後彼の土に生れ安らかに聖人の位に入る修行との二つがある。印度の龍樹、天親の二菩薩、支那の天台慈恩等の大師、近くは日本の慧心僧都等すら、南無阿彌陀佛と唱へて他力往生を願はれた。況して慧心僧都以下の我等は、たゞ一心に往生淨土を願ひ、他の一切の修行を放擲すべし。法華經等を修行して此の娑婆世界で聖人とならむとするは絶待不能の事、又法華經等を修行しその功德を回向して極樂淨土に往生することも、殆んど不可能の事、千人の中に往生のもの一人二人も稀なるべし。たゞ一切の修行を止めて念佛を修せよ。諸の修行は時を失ひ機を失ふ。念佛往生は時を得て機に適へり。百人は百人ながら往生することを得べしと。かやうに教へたのであるから、その弟子の聖光房辨長(續四派祖)は、現代に法華經等を修行するは、祖父の大なる履を、孫の小なる足にはかせむとするに似たり、本師上人の教への如く、教は高く機は低し、機教相違して分毫の得益なきのみならず却つて惡道に墮つべしなどいひ、孫弟子の南無房智慶は、父母の菩提の爲めに法華經を讀む等は何等の菩提心なき衆生の、命日に管絃を楽しむものよりも劣る。何となれば法華經等を讀むものは自力回向の執情ありて、他力の道に入りがたし。然るに管絃を楽しむものは、一朝無常を感じて後世菩提の心に向はゞ、他力往生の道に入り易し、ゆゑに管絃等に耽るは、法華經等を讀むものよりも、他力往生の道には勝れたりなどとまでいつた。それだから其の教化に歸したものは、釋迦佛の像

を小兒の玩弄物にさせたり、佛像の頭でクデを摺つてすり減らしたり、法華經を以て童子のつぎはりをしたり。それは言語に絶したことをして顧みなかつたのである。また禪宗はどうだといふと、彼の宗では、釋尊の方便眞實の判教では法華經第一、大日如來の顯教密教の判教では大日經第一彌陀如來の此土入聖と往生淨土の判教では彌陀三部經第一などいふことは、畢竟して、釋迦、大日、彌陀等の佛の説教を主として見たる、教相即ち經教の説相に過ぎない。その教を説いた釋迦、大日、彌陀を佛陀なりとするのは、所詮己が心の本性を覺つたからである。經教の説相は方便で、眞實にはそれを手寄りとして、我が心の本性を證るに在る。我が心を悟らすして教相に依るのは、他人の實を數へても我において半錢の價のないやうなものである。法華經等は月を標すところの指である。指をもつて月とおもつてはならぬ。月とは我が心である。ゆゑに眞實の佛教は、心を悟るにある。即ち教外別傳不立文字で、教相の外に別に心から心に傳へる。直指人心見性成佛、直に心を指し本性を自ら見せしめて成佛せしめる。然るに心は我がもので他人のものでない。悟るといふことも我がことで他人のことでない。それゆゑに眞實の佛教は、向上一路先聖不傳で、結局他から傳へることは出来ない。直ちに自ら毗盧の頂上を踏むの心でなくてはならぬなどいふ。それゆゑに支那の丹霞和尚は、佛像を焼いて尻をあぶつた。法華經等は畢竟すれば紙屑も同じものであるなどいふ。これまた紙屑同様に扱ひ得るものを悟つたのだといつて居た。これ此の二教が當時の新興佛

教であつた。聖人の大統の佛教から見れば、念佛宗は機根といふものの現實當相を徹底的に考へたが、教相の權實（釋尊一代の教に方便と）、教觀の相資（教相と觀心とは常に相資くべ）といふことを忘れ、權教の偏理によつて他力偏倚の宗教となり、禪宗は機根の本性本質を徹底的に考へたが、やはり教相の權實、教觀の相資を忘れ、權教の偏理によつて自力偏倚の宗教となつたもので、若し法華經の教理からいへば、末法の衆生の機根は、從來の大小乗の佛教によれる修行得益に堪へぬ、又堪へても利益がないといふのは真相であるけれども、それを救ふものが彌陀の一教だといふことが誤りで淨土三部經並びに法華經の經文によれば、却て法華經本門の妙教でなければならぬ。然るに念佛宗の弘通によつて、法華經は復古視せられ、釋尊は木偶視せられて居る。甚しいのは法華經の修行は惡道に墮るなどいはれて居る。また經教の本は佛陀の自覺にある、眞實の大覺は自ら覺るにある。けれどもいかなるものも自ら覺り得るといふのは、事實を藐視した惡平等の見解である。若し徹底していへば、眞に自ら覺り得るものは、たゞ唯一の大覺世尊のみである。それ以下のものは畢竟して世尊の經教を大縁として、その固有の心性を悟るのである。釋尊五十年の教説の中、その最善を盡したものは法華經で此の法華經によつて修行してこそ、心性の覺月を見ることができるのである。即ち法華經は正確に滿々たる心性の覺月を指し、その盈尺をも指し示すものである。それ以外の經教はその盈尺の一時／＼を指し示したものである。然るに佛の經説に依らず、これを藐視して凡夫

の語録を重むるのは、大人の標し示す指を用ゐずして、小兒の標し示す指を尊ぶやうなもので、その指されたものは眞の心性の覺月でなくて、幻覺妄覺の月影に過ぎない。然るに禪宗の流通によつて、凡夫上慢して己れ佛に均しと思ひ、經教を賤しみて語録を崇める、釋迦は乾屎橛、法華經等は敗紙故屑などといつて悦んで居る時、一個の天台僧たる聖人が、單にいか法華經の尊貴を説いたところで、彼は天台の舊思想によりて法華經を有りがたがるのだ。われ等は法然上人の仰せの如く法華經の有がたいのは知つては居るが、祖父の履ははけない、聞くも無益よと敬遠する。或は法華經は月を標す指、我等は直に月を見むとする敗紙故屑何物ぞと蔑視する。此場合いかに法華經によつて彼等の宗教の誤謬を正さうとしても彼等は見むかない、テンデ受け付けない。是においてか彼等が否でも應でも此方を振り向かねばならぬやうにする必要がある。注意轉換を行はねばならぬ必要がある。念佛は極樂に往生すと信ずる世俗に對して「法然所立の念佛は無間地獄の業因なり」禪宗は佛の心印を傳ふと信ずる緇素に向つて「達磨の祖師禪は天魔波旬の法なり」といふ二大標語は彼等の注意轉換の爲めの激語である。激語であるが、無根據の激語でない、法華經大統の宗教よりして、彼等の極端の所立なる、法華經等の修行は千中無一、惡道の業因。經文は月を標す指、敗紙故屑などいふものに對しての、正當なる判定であつて、之を呵責謗法といふのである。この事を聖人のちに「諫曉八幡鈔」に、

我が弟子等が愚案ニ、我が師ハ法華經ヲ弘通シタマヘドモ弘マラズ、(却リテ)大難ノ來ルハ、眞言ハ國ヲ亡ス、念佛ハ無間地獄、禪ハ天魔ノ所爲、律僧ハ國賊トノタマフ故也。例セバ道理アル問註ニ惡口ヲ交ルガゴトシ云云。日蓮反詰シテ云ク、汝若シ爾カラバ我が問ヲ答ヘヨ。一切ノ眞言師、一切ノ念佛者、一切ノ禪宗等ニ向ヒテ、南無妙法蓮華經ト唱ヘ給ヘト勸進セバ、彼等ガ云ク、我が弘法大師ハ法華經ト釋迦佛トヲ、戲論、無明ノ邊域。(覺錢上人ハ、大日如來ノ)力者、履物取ニモ及ズト書カセ給ヒテ候、物ノ用ニ合ハヌ法華經ヲ讀誦センヨリハ、其ノロニテ我が小呪ヲ一反モ誦フベシ。一切ノ在家ノ者ノ云ク、善導和尚ハ、法華經ヲ千中無一、法然上人ハ、捨閉闍地、道綽禪師ハ、未有一人得者ト定メサセタマヘリ。汝ガ勸ムル南無妙法蓮華經ハ我が念佛ノ障リ也。我等タトヒ惡ヲ造ルトモヨモ唱ヘジ。一切ノ禪宗ノ云ク、我が宗ハ教外別傳ト申シテ一切經ノ外ニ傳ヘタル法門也。一切經ハ指ノ如シ、禪ハ月ノ如シ。天台等ノ愚人ハ、指ヲ守リテ月ヲ亡ヒタリ。法華經ハ指也、禪ハ月也。月ヲ見テ後ハ指ハ何ノ詮カアルベキナンド申ス。此ノ如ク申サン時ハ、何トシテカ南無妙法蓮華經ノ良藥ヲ彼等ノ口ニハ入ルベキヤ。

といはれ、その南無妙法蓮華經と唱へさせむとせらるゝ心地をば、同鈔に、

今日蓮ハ、去ヌル建長五年^{癸丑}四月二十八日ヨリ、今年弘安三年^{太歲庚辰}十二月ニ至ルマデ、二十八年之間、又他事モナク、タマ妙法蓮華經ノ五字七字ヲ、日本國ノ一切衆生ノ口ニ入レントハゲム計

也。此レ即チ母ノ、赤子ノ口ニ乳ヲ入レントハゲム慈悲也。

といはれてある。即ち折伏弘通は、それより來る大難を豫期しながら、正法に注意せしめ正法に隨順せしむべきための、大慈悲の注意轉換的標語であつた。ゆゑに之を大慈折伏といふ。

つぎになぜそれを道路で叫ばれたか? 鎌倉時代は今のやうな印刷廣布の時代でない。傳道弘通は辯論説明を主たるものとせねばならぬ。ところが聖人の宗教は、一世の信仰と正反對なる叫びである。松葉ヶ谷の庵室で説いて居られたのでは、誰れもそれを聴きに來るものはない。假りにあつたにしたところが、二人三人乃至八人十人、そんなことで如何して一世に汎濫せる謬れる佛教に對する革新が出來やう?。こゝにおいてか來り聴くことを待たずして、進むで一世の僧俗の頭上に、注意轉換の一大標語を冠せ、ついで甘露の大雨を降さねばならぬ。それには聴くまいとしても聴かざるを得ない道路でこれを説く! それも辻! 辻も辻、小町夷堂といふ一番繁華な處を選むで之を敢てせられた。

かゝる實際的外面的の必要、内觀的教義的の發想から、聖人は辻説法、折伏弘通の途に出でられたのである。

この折伏弘通の中に、建長七年には、「註法華經」十卷、「諸宗問答鈔」「禪宗問答鈔」「蓮盛鈔」「念佛無間地獄鈔」各一卷等の著述があつたと傳へられる。

さて此の頃の鎌倉の政界を見ると將軍宗尊親王の下に、執權は相模守北條時頼で、連署は陸奥守北條重時である。その時頼は宋僧道隆を請じて、山の内に建長寺を建て、禪宗専門の道場とした。それまでは榮西でも、圓爾でも、みな天台僧籍で、眞言、禪宗等の兼學の道場として、建仁寺や東福寺は建てられたのであつた。また重時は法然上人の高弟善慧房證空(西山派祖)の弟子の宗觀(又修觀とも書く打宮入道)を師とした念佛者で、極樂寺を建立した。執權と連署は、禪、念佛の信者として、京都の舊佛教に對して、新佛教の寺塔の大檀那であつた。またその下の評定衆、引付衆等も、北條一門では、常盤政村、大佛朝直、名越時章、金澤實時等、二階堂、太田、後藤、安達、宇都宮等の名族はみな念佛、禪。或は天台、眞言を宗旨として居ても、その修行は多く念佛であつた。念佛でなければ坐禪であつた。

教界はと見ると、道隆禪師は建長寺に居る。故執權武藏守經時(時頼の兄)の歸依僧であつた然阿彌陀佛(又念阿彌陀佛とも通じ用ふ)良忠が光明寺に居る。この人は法然上人の孫弟子で聖光房辨長の嫡弟である。名越朝時(泰時弟)の建立なる新善光寺の別當には道阿彌陀佛道教が居る。これも法然上人には孫弟子で覺明房長西の高弟である。鶴岡八幡宮寺の別當としては、大納言僧正隆辨が居る。この人は天台宗園城寺の圓意僧正灌頂の弟子で、後に三井の長吏、大僧正まで進んだ。台密祈禱の名人である。大藏阿彌陀堂の別當には、加賀法印定清(ちやうけい)が居る。この人は眞言宗廣澤流の忍辱山流定豪方の開祖定豪の

高弟で、小野三寶院流の金剛王院實賢から灌頂を重受した野澤兩流の達者、後に定善方(談の横)といふ一流の開祖となつた。これ等を筆頭として、天台、眞言、念佛、禪のいはゆる名僧智識といはるゝものは、星の如く世に輝き、そして天台、眞言のものは、官寺の別當檢校となり、念佛、禪宗のものは、多く北條一門の歸依僧として、その建立の寺主となつて居た。ところへ一介の叡山天台宗の旅僧が、松葉ヶ谷に庵室を構へて、一年ほどは讀誦觀念して居たのに、突然晴天の霹靂のごとく、小町の辻に立ち、念佛、禪宗を破折して、法華經一乘の妙宗をひろめるといふことを傳へ聽いた。或はひそかにそれを見た。

彼等の中の禪、念佛のものは思つた。なに法華經に依つて、念佛、禪宗を破斥する。今時分になつて何といふマア舊思想だ！。そんなことは榮西禪師の時や、法然上人の時や、それ以後にも、叡山や三井から度々やつたことだ。それ等の彈劾はみな效を奏せずして、今は朝廷でも幕府でも、何のお咎めのないのみでなく、歸依渴仰せられてゐる。山門三井南都高野にも、專修念佛を讚歎する聲の喧しく、禪法を崇敬する徒も多いに、數十年の昔の夢を蒸し返して何だ！。念佛は無間地獄の業！。禪は天魔波旨の法！。だと。臆面もなく時代錯誤の戸惑ひをするだけあつて、今までの山門三井の徒よりは、いふことが凄まじい！。口巧者に何をいへばとて、勢至菩薩の再來智慧法然房に及ぶべきか。萬里の波濤を渡つて入唐求法(にっぽん)した榮西葉上房に較ぶべきか。さやうな高慢の狂僧はその

爲すがまゝに捨て置き、その内にどうかなつてしまふであらう!!! 彼等の頭領達は、おそらく斯くその配下の僧俗に告げたであらう。けれども小町の辻の聖人の激烈なる破折の雷震に接しては、頭領達の誠めをも忘れて、彼の宗々の僧俗男女は、或は憤り、罵り、唾きし、砂を飛ばし、石瓦を擲けて、胸に込みあげる怒りを僅に散らすものもあれば、或は二三問答めいたことを言ひ出して、一言の下に赤面して引込むものもあると共に、眞摯に聖人の所説を聴き、怒りを抑へて質疑し、念佛、禪宗の先達に、屢聖人の所説を問ひ試み、彼等が論ずるに足らずと、言を左右にして言ひ遁るゝに遭ひ、遂に再三聖人を庵室に尋ね、重々の疑問を呈露し、明快金石を斷つ識見と、諄々誨へて倦まざる慈念に、遂に迷夢を覺し、念佛、禪宗を捨て、聖人の御弟子となるといふやうなものも、追々出來て來た。それ等の歸伏者の中に、名越光時(朝時の子)の老臣四條左衛門尉頼基、進士太郎善春、安房天津の領主工藤左近將監吉隆、幕府の工事奉行池上右衛門太夫志宗仲、武藏の豪族荏原左衛門尉義宗等は建長八年に、翌康元二年には、甲斐波木井の地頭波木井六郎實長などの人々がある。此れみな鎌倉武士中の錚々の名あるものであつた。

その建長八年には、春二月に暴雨洪水、秋八月に風雨大害、赤痢瘡流行などがあつて、十月五日に改元して康元元年となつた。その三月に、陸奥守重時は連署を辭して出家し、宗觀の弟子として觀覺と名乗つた。五十九歳である。十一月には相模守時頼が執權を辭して出家し、道隆の弟子とし

て道崇と法名した、三十歳である。仍で重時の子の武藏守長時が執權となり、義時の四男(重時の子)の政村が連署になり、翌年すぐ相模守に遷つた。これからは重時を極樂寺殿、時頼を最明寺殿と呼ぶ。しかし大事はなほ時頼入道が決する。チョット院政の形式を折衷したやうな風であつた。

翌康元二年は二月早々大政官の火災などがあり、正嘉と改元せられた。此の夏の最中五月十八日の子刻である。關東一帯殊に鎌倉に大地震があつて、六月七月には早魃はげしく、日蝕月蝕がつゞき、人心何となく安からぬ八月の朝日、戌刻の頃また大地震があつた。いよ／＼何事のしらせかと胸擾ぎの中に、同月廿三日の戌亥の時、關東全帯、殊に鎌倉には、全く前代未聞の大地震が起つた。まこと天柱拆け地維缺くとの形容は此の事かとばかり、「吾妻鏡」に依ると、神社佛閣の如き大なる建物も、一として顛覆倒壊または破損しないものはないとあるから、普通の民家は大方おし壊された。山岳は崩れ井水は涸れ、大地の裂け目から水が噴き出る、數尺數間の深く破壊した穴からは、青い凄じい焰がその舌を吐く。梁に推しつぶされ、屋根に敷かれ、石瓦に傷き、道路の裂け目に陥り、岩石に碎かれ死する者傷つく者の、泣き叫びうめく聲物凄く、眞夜中の事で、闇さは闇き中に、處々に火災は起る。父母を喪ひ、姉妹兄弟を殺され、妻子をいたはる暇もなく、無意識にみな我身を助からうとする。たゞこれ阿鼻叫喚の地獄の活畫であつた。鎌倉だけの死者一萬人といふ記録によりても、その慘憺たる當時を想像することが出来る。その後の數日間は微動止まず、廿五日

には雨ふると共に大震動四五回、生き残つたものも復かと色を失ふ。九月から十一月に至るまで、強震微震連々で、十一月八日には復た大震動があつた。一時は八月の災禍を繰返すことかと恟々騒ぎ、上下ひとしく顔色を喪つた。

鎌倉時代には、今日の地質學はなかつた、地文學も、天文學も、物理學も、統計學も、氣象學もなかつた。電信電話も勿論ない。況してそれ等の應用學たる地震學のありやうがない。かゝる災變に對する解釋は、陰陽道や、儒道や、佛敎がするのである。けれどもそれ等の博士達や高僧達も、如何とも詮方もなかつた。たゞ罹災民を救恤し、死亡者を弔ひ、神佛に加護をいのり、一時も早くその災害の鎮まらむことを念ずるの外はなかつたのである。

松葉ヶ谷に坐ました聖人は、此のいたましい現前の地獄の災禍を何と視られたらうか。「立正安國論奥書」及び「下山抄」に依ると、聖人は前年以來の天變地天、就中此の大地震に就いて、これ正しき佛法を亡ひ、邪の教法が一國の人心を迷惑せしむるの致す所なりとの佛説に依つて、國の謗法を止めずむば、たゞに天變地天、飢饉疫癘、のみならず、當に内亂外寇を起すべしとの直覺を得られたのである。故に「安國論奥書」には、

去ヌル文應元年太歲丁巳八月廿三日戌亥ノ尅ノ大地震ヲ見テ之ヲ對フ。

とも、「下山抄」には、

先ヅ大地震ニ付イテ、去ヌル正嘉元年ニ、書ヲ一卷註シタリシヲ、故最明寺入道殿ニ奉ル。

ともあつて、「安國論」に明された豫言は、此の大地震の時に、聖人の直覺として感ぜられたところなることを示されてある。けれどもたゞ自分の直覺のまゝを、すぐ安價な自己肯定によつて言行に現はされることは、聖人の爲したまはざる所である。道理、文證、現證の三證が具はらねば、容易に斷定を發表せられない聖人一家の範疇法は、聖人をしてこの直覺が、果して道理に違ふことなきや否や、佛敎徒の最後の歸依處たる佛陀の經敎、即ち一切經の明す所に乖くことなきや否やを確むべく、一切經藏に入らるゝやうに導いたのである。

傳説によれば、恟々たる人心の悸えの止らざる正嘉元年を送り、翌二年の正月六日、聖人は鎌倉を立ち、途中沼津に一泊して、齋藤彌三郎利安(此の人の邸址は)、山本彌三郎重安(此の人の邸址は)を立ち、途中沼津に一泊して、齋藤彌三郎利安(此の人の邸址は)、山本彌三郎重安(此の人の邸址は)の二人を偶然に教化し、翌々八日に駿州富士川の側なる蒲原莊岩本實相寺に抵り、その一切經藏に入られた。此の寺は鳥羽天皇の勅願寺で、智證大師將來の唐版の一切經をそなへたる、叡山横川に隸屬する一名刹である。聖人の修學中には、安房清澄寺にも一切經があつた、鎌倉では鶴岡の經藏にも閉せられた、南都にも、叡山にも(傳説では土橋、さだめて入藏せられたことだらう。今や當面の必要として五びの入藏せらるゝに就いて、なぜ近き鶴岡の經藏に入られなかつたらう。なぜ故郷の清澄には求められなかつたらう。いふまでもなく清澄は師の母當中である。また東條左衛門尉

景信の爲めに、東條郷を構へられたまうた聖人は、彼處にはお出でになれない。鶴岡はといふと、別當隆辨僧正は三井の學派で、聖人は山門の學派である。遊學僧としては曾てその便を得られても、今や既に聖人は堂々たる山門成學の學匠で、而も諸宗折伏をして居らるゝ。將來彼れ隆辨を對手の一人として公場討論の時もあるかも知れない。三井山門の確執と、此の豫想とは、聖人をして鶴岡の經藏に再び入らしめることを許さなかつたらう。それにまた一つは暫時鎌倉からその雷震を隠されることも、時に取つての方便であつたかも知れない。此等の種々の事由は、此の岩本を撰ばれたのだらう。仍で此の實相寺は同じ山門、而も聖人が學頭たりしと思はれる華光房と、同じ横川の流を汲む寺院である。聖人はかならず此の寺の人々から好遇せられたに相違ない。現在の實相寺には、聖人米洗の井といふ故址が残つて居るが、おそらく後世好事の者の無稽の想像から、苦學僧とも思つて造り出したものだらう。若し自炊せられたとすれば、吉祥齋か誰かの弟子が洗米したに相違ない。誤解してはならぬ。此の頃の聖人は、成辨律師をも弟子に持つほどの、巨然たる天台宗の一明星である。隨て學頭智海の請によつて、閑藏の餘暇に、時々、法華經文句、玄義、止觀等の節々を講ぜられ、智海はじめ大衆は法喜に潤ひ、就中伯耆公といふ少年が、深く聖人の高き識見に推服し崇敬したとの傳説こそ、眞を得たものとせねばならない。

この閑藏中の二月十四日に、安州なる聖人の父君貫名重忠殿が病歿せられた。急使は鎌倉を経て

悲報を此に齎らした。孝心ことに深い聖人の御歎きはいかばかりだつたらう。けれども御身は東條郷をせかれて居られる。遙かに哀傷の中に大法を回向し、悲母に弔慰の誠を展べて、閑藏を續けられた。そして去今兩年の間に、「三八教」「三種教相」「一代大意」「一念三千法門」などいふ天台の教學に關する著作をせられた。

この正嘉二年は、春に大雨が続いて苗を腐らし、夏は大旱魃で草木五穀を枯らし、秋八月朔日には大暴風があつて僅に残つた果實が悉く失はれる。熒惑星が南斗を犯した、大流星が乾の方より巽に流れた。何といふ不祥の相だらうと人々が憂ひて居ると、十月十六日には洪水屋宇を流し、人畜を溺死せしめること夥しく、その後疫癘が流行し、翌正嘉三年に至つても治らない。暴雨暴風と洪水の結果はひどい飢饉となつた。日蝕月蝕等の天變もあつた。仍で三月廿六日に正元元年と改號せられたが、飢饉と疫癘はますます熾である。朝廷でも幕府でも、一方には徳政を施行し救恤免租などの方を講じ、一面には諸寺諸山諸社に祈禱を命じ、上下ともに肝膽を摧いたけれども、著しい効驗とも見えなかつた。

かゝる間に閑藏中の聖人は、いよ／＼その直覺の誤らないことを確信せらるゝ外なきに至つた。一代藏經の何なる經にも、聖人の直覺を裏切るものはない。彼々の經教は、こと／＼一齊に、天變地天、飢饉疫癘、乃至内亂外訌等の原因を種々に明してあるが、その最も重いものとしては、其の國

土の衆生が、邪よこしまの教法を奉じて、正しき教法を崇重せず、之を誹謗し排斥するならば、その國に飢饉、疫癘、兵亂の三災、之に加ふるに種々の天變地天等の七難さかむに起るべしと記されてある。つらく世間を見るに、今の日本國の大地震並びに累年の災禍は、地獄、餓鬼、畜生の三惡道の相(大地震は地獄の相、飢饉は餓鬼の相、疫癘は畜生の相)を現前して居る。而も佛法は旺りて、朝廷も幕府も徳政につとめて居る。經文の豫證に照せば、定めて此の國の佛法に誤謬あり、邪見謗法に陷つて居るに相違ないと、聖人のこの直覺が、一切經全部の裏書きを得て、信仰の光りに充ち満ちた時、決然筆を援いて、「守護國家論」一卷と、「念佛者追放宣狀鈔」一卷とを著された。「國家論」は、その當時の公家武家、及び一般人民のほとんど總ての間に流布して居た專修念佛の法門、即ち法然上人の「選擇集」の宗義の謗法を明にせられたる、聖人の護教的豫言的の熱血を湛へた、最初の學說的成文發表で、「宣狀鈔」は、歴史的に念佛宗禁斷の先例としての公文書をお蒐めになつたものである。これより先に、三井の公胤僧正や、山門の定眞堅者(或は定照とも傳ふ)や、梅尾うめのおしの明慧上人みやうゑやが、やはり「選擇集」を謗法の書なりとして、論破の著書を出したけれども、聖人はそれ等は未だ根本的評破となつて居ないものとして、自ら「國家論」を著された。此の書は、よく此等三人の老功の學匠と、青年の聖人との識見が、いかに淺深相違して居たか、また法然上人の考察法と、聖人の考察法とが、ともに徹底的でありながら、而もいかに其の方向を異にして居たかを明白に語るものである。此の年ことに、聖

人の主張せらるゝ法華折伏諸經無得道といふ教義が、天台學上の鞏固なる根據あるを示すために「十法界鈔」及び「爾前二乘菩薩不作佛鈔」等の著述をせられた。

明くる正元二年も、去年からの疫癘の流行すこしも輟むことなく、鎌倉などでは、下々のものは、昨日は彼家、今日は此家と、一日として寧き日はなく、ほとんど軒なみに死んで行つて、住民の半ばを減じたほどにおもはれた。土葬も火葬も間に合はない。尸屍しかばねはそこらこゝらに横はつて居る。中には夜の間に犬の類が噛み喰ひ、鳥などが夜明けに啄く。實に慘憺たる状態である。親りに此の光景を見つゝある聖人は、その二月に、

國土こくど起おこ大地震非時、大風大飢饉大疫癘大兵亂等、種々ノ災難、知し根源げんげん可か加か對治たいぢ勸文

後世略して「災難對治鈔」と名けらるゝ一卷の書を著された。本書はいよゝ幕府にその意見を上書すべき準備として、立論の骨子を草稿的に書き記されたものであらうとおもはれる。ついで其の四月に「十法界明因果鈔」一卷の著がある。これは熾むに念佛無間地獄法華經成佛を唱へらるゝ、その主張の理由をば十界(地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上、聲聞、緣覺、菩薩、佛陀)因果の業報を示すに寄せて説かれた書で、またその五月に「唱法華題目鈔」一卷を著された。此の書は、法然上人の念佛宗及び禪宗を謗法として排斥し、それに對し、法華經ならびに天台妙樂兩大師の義に基き、南無妙法蓮華經の題目を唱ふることによつて、法華經が末代の易行として、成佛往生ともに叶ふべき義理、および謗法の罪が國

土に及ぼす災禍、末法時代には、法華經及びその行者に三類の怨敵(俗人、高僧)あるべきことを示し、聖人が天台宗の學者として、特別に法華以外の經の成佛を許さざる所以の識見、並びに聖人所立の、法華經題目の修行の、本尊、修行、信念を明にせられたもので、文體は元來鎌倉初期の優雅なるものであつたのを、後の流布本には、大分書き改められた。即ち本書は佐渡前における聖人の宗義の大意を概説したもので、一卷の中に、ほど教判、宗旨、信行、安心が含まれて居る。法然上人の「淨土大意鈔」に相對すべきものかとおもはれる。この中に、

此ノ七八年前マデ(建長四五 年頃まで)ハ、諸行(口稱念佛以 外の諸の行)ハ永ク往生スベカラズ。善導和尚ノ千中無一ト定メサセタマヒタル上、選擇ニハ、諸行ヲ抛テヨ、行ズル者ハ群賊ト見エタリナンド放語申シ立テシガ、又此ノ四五年ノ後(建長七八 年より後)ハ、選擇集ノ如ク人ヲ勸メン者ハ、謗法ノ罪ニヨテ、師檀トモニ、無間地獄ニ墮ツベシト經ニ見エタリト申ス法門、出來シタリゲニアリシヲ、始メニハ念佛者コソリテ不思議(奇怪の 意味)ノ思ヒヲナスウヘ、念佛ヲ申ス者ハ無間地獄ニ墮ツベシト申ス惡人外道アリナンド詈リ候ヒシガ(ヤガテ ノ程ニ)念佛者無間地獄ニ墮ツベシト申ス語ニ智慧ツキテ、各選擇集ヲ披見スルニ、ゲニモ謗法ノ書トヤ見ナシケン、千中無一ノ惡義ヲトドメテ、諸行往生ノ由ヲ、念佛者(念佛の法 師先達等)ゴトニ之ヲ立ツ。シカリトイヘドモ、タマロ(タマロニ)ノミ(諸行往生ヲ)ユルシテ、心ノ中ハナホ本ノ千中無一ナリ。在家ノ愚人ハ、(彼等ガ)内心ノ謗法ナルヲバ知ラズシテ、諸行

往生ノ口ニバカサレテ、念佛者ハ法華經ヲバ讀ゼザリケルヲ、法華經ヲ讀ズル由ヲ、聖道門ノ人

(日蓮聖 人等)ノ申サレシハ僻事ナリト思ヘルニヤ。

とあるによつて、聖人の「念佛無間」の辻説法が、いかに彼等に影響したかを知ることができる。法然上人に廿餘年隨從して居た善慧房證空(西山 派)は、主として京都に弘通して居たが、諸行往生を許さず。法然門の同じ高弟聖光房辨長の鎮西派は、聖人の頃に鎌倉に居た然阿良忠によつて大成せられたものだが、此の流で諸行往生を許すのは、正に注目すべきことである。また此書の終に、慈恩大師は十一面觀音の化身、牙より光を放つ、善導和尚は彌陀の化身、口より佛を出す等の例を以て、法然上人は勢至の化身、頭より光を放つたなどといふ世俗に對して、佛法は通力に依つて邪正を決すべからざること説き、

但ダ法門ヲ以テ邪正ヲ糾スベシ。利根ト通力トニハ依ルベカラズ。

との結語は、聖人の徹頭徹尾合理的正教的の態度、迷信奇蹟を本とせざる卓識を明示せられた。正しき佛教の信念より發生したる豫言的直覺を、一切經によつて證せられ、まさに之を政治宗教兩權の實際的勢力である所の幕府の中心に獻言しやうとする前に、自の宗義を整然と調ととのへられた聖人は、やがて崑玉の心腑、錦繡の情趣を傾けて、「立正安國論」二卷を脱稿し、その七月十六日(正元二年 三月に改元せられ 文應元年となつた)の朝辰の刻、淨書したる論篇を携へ悠揚として、當時、最明寺時頼入道の近臣の

隨一なる、宿谷左衛門入道最信に面し、之を最明寺入道殿に奉るべく取次がしめたのである。この時からおよそ十年ほど後に書かれた「法門可申鈔」に、

但日本國ニハ日蓮一人許バカコソ、世間出世(間)正直ノ者ニテハ候ヘ。其ノ故ハ故最明寺入道ニ向テ、禪宗ハ天魔ノソイナルベシ。ノチニ勘文モテコレヲツゲシラシム。

とある。この「後に勘文もて之を告げ知らしむ」とある勘文は、「立正安國論」の外にないのであるから、此の文によると論の進獻以前に、聖人は時頼入道に面謁し、禪天魔の法門を以て直諫せられたことがあつたのだらうといふ先哲の推測は、私も之を是認せむとするものである。その時期が何時のほどであつたらうかは、之を攷ふる材料の何ものもないが、「唱法華題目鈔」を、傳説のごとく駿河上野郷なる南條七郎に與へられたものとすれば、此の南條氏は、宿谷入道とおなじく時頼入道の近臣だから、あるひは最明寺が豫て此の人から聖人のことを聴いて居たか、あるひは此の「唱題鈔」(唱題鈔は若し之を見れば、最明寺ほどの人ならば恐らく會見を望みさうに想はれる御書である)を見たかして、遂に聖人を招き對面した事でもあるのかも知れない。するとその時に禪天魔の強言に不快を感じて居るから、「安國論」進獻の時にも引見しなかつたものだらう?

聖人が論を奉る時に、宿谷入道に、論披露の後の副言そばことを乞うたものかと思はるゝことが、「撰時鈔」に書かれてある。

去シ文應元年太歲庚申七月十六日、立正安國論ヲ最明寺殿ニ奏シタマツリシ時、宿谷ノ入道ニ向テ云ク、禪宗ト念佛宗トヲ失ヒ給フベシト申サセタマヘ。此ノコトヲ御用ヒナキナラバ、此ノ一門(北條一門)ヨリ事ヲコリテ、他國ニセメラレサセ給フベシ。

かく最明寺入道にむかつては、念佛宗と共に禪宗をも、謗法の所立、内亂外寇の根本であると豫言し諫曉せられながら、進獻の「安國論」の本文には、主として念佛宗の破折はじやくのみ書しよされてある。之に就ての理由は、御人格と教義面を講ずる時にゆづる。

「立正安國論」は、聖人一期の著述中に、尤も修辭に意を用ひられたもので、正確なる唐宋の漢文ではなく。「吾妻鏡」などの彼の時代の特有の文體ではあるが、而もそれを嚴密なる四六駢儷體に擬し、特に音韻の流暢にして錯落せる點は、深い御用意が示されてある。これはおそらく公文として朗讀披露せらるゝ時の必要に因つたものであらう。

一篇の主意は、康元以來五ヶ年に亙りての天變地天飢饉疫癘が、今なほ息むことなく、人民は大牛死亡し、牛馬まで巷に斃るゝに至り、人畜の骸骨地上に彌る。醫道、陰陽家、儒家、佛法の各宗、おのゝ肝膽を推いて治法を講ずるけれども更に驗がない。これ何の因縁何の過失に由るものだらうと、時勢を歎く旅客と、同じ歎を懷き、而もその因縁過失を明にして、早く禍を轉じて福となさむことを希へる主人との問答に擬し。對問答釋十番の間に、種々の法門が寓托せられてあるが、所

詮文上では、災禍の起因を明すに、「仁王經」「大集經」「金光明經」「藥師經」の四經に因れば、若し國に正法あるに之を喪ひ、専ら邪法を崇重する時は、守護の善神、正法の法味を食はずして、威光勢力なきが故に、此の國を護ること能はず、國土の聖人もまた之を去る。邪法によりて人心亂るゝが故に、惡鬼邪魔勢力を得て、種々の災禍連々として生ず、四經各その相を明すことつまびらかなり。即ち「大集經」の三災(穀貴、兵、疫病)、「藥師經」の七難(人衆疾疫難、他國侵逼難、自界叛逆難、星宿變、惟難、日月薄蝕難、非時風雨難、過時不雨難)、「仁王經」の七難(日月失度難、星宿變現難、大火變惟難、大水、變化難、大風變惟難、國土亢旱難、内外賊起難)。「金光明經」「大集經」の種々難等ことごとく源と謗法の咎に因る。現代もまた正しく謗法の因縁なるべし。いはゆる法然上人の「選擇集」是なり。宜しく彼れ等念佛の寺塔僧尼の布施を絶ちて、謗法の歸依を止め、しかる後に佛教の淺深を研鑽し、眞實歸依處たる正法を詮し出して之を崇重せば、眼前の災禍を息め、國安く民豊なるに至らむ。若し此の言を用ひず、なほ謗法の宗を崇めば、現在起れる「大集經」の三災の中の二災、「藥師經」七難の中の五難のみならず、残れる一災(革)二難(自界叛逆難、他國侵逼難)必らずまさに來るべし。たゞ現世に此の難あるのみならず、死後まさに無間地獄に墮つべし。されば速に邪法を止めて正法を建立し、以て國家永久の安寧、王臣二世(現世、後世)の幸福を計るべしとの義が説かれてある。即ち一言にいへば、天變地天、飢饉疫癘は、法然上人所立の念佛宗の謗法に因るのだから、一國に之が布施を止めて正法を立つれば國は治まる。でなければ他國侵逼難の外寇、自界叛逆難の内亂競ひ起りて國危く、

死して地獄に墮つるぞ。此のこと不審と思しめさば日蓮に御尋ねあれ、或は念佛禪等の諸宗の僧と召合せ對論せしめられよとの意である。ちよつと見ると、何だ！ 天變地天が念佛宗の爲だと！

馬鹿々々しい。念佛宗のない前からそんな事はあるじやアないか。捨て置くと内亂外寇がある！ヘン法螺を吹くにも程がある。妄言妄書取るに足りない!!。などと慌てた者は言つたに相違ない。

聖人も「中興入道御書」に、

此ノ事ヲ、諸道ノ者、オコツキワラヒシ程ニ、九ケ年スギテ、去ル文永五年ニ大蒙古國ヨリ、日本國ヲオソウベキヨシ牒狀渡リヌ。

とて、佛道、儒道、陰陽道の者まで嘲笑したといはれてある。所が後にその豫言が中つた時に彼等は興さめた。また此の論には、文上には、法華眞言をば念佛に對して、ともに正法の中に數へられてある。聖人の主張だといふ眞言亡國とは相違する。その事をば「阿佛房尼御前御返事」に

イツハリ愚ニシテセメザル時モアルベシ。眞言天台(慈覺智證の天台宗)等ハ法華(經)誹謗ノ者、イタウ呵責スベシ。然レドモ大智慧ノ者ナラデハ、日蓮ガ弘通(眞言天台をも破折する程の)法門分別シガタシ。然ル間、マツ(初の程は)サク事モアルナリ。立正安國論ノ如シ。

といはれてある。それでは此の書の中には、いはゆる聖人の自ら大智慧といはるゝ法門はないのか？ 方便淺薄な法門ばかりなのか？ それにしては何故一生の間に度々御自身でもお寫しになつた

り、また講談せられたりなされたものだらう？ 不審！ それともまた此の論を書かれた時分は、まだ天台眞言ともに正法だとおもはれて居たが、それから後に段々其等の謗法をも覺つて、まけおしみに「いつはり愚にしてまづ／＼さし置くこともあるなり」などといったものじやないか、などといふものがあるかも知れぬ。ところが、それはみな大違ひ!!! 上ツつらの文字こそは單なる念佛破折であるけれども、若し深く全篇の文意と、句々の玄意とを搜つて見ると、立派に念佛だけでなく、禪宗も律宗も、眞言も慈覺智證の偽天台も、悉く破折し盡されてある。故に清澄山の淨顯と義淨に與へられた「本尊問答鈔」には、俱舍、成實、律、法相、三論、華嚴、淨土、禪の八宗を評隲し給ひて後、

眞言宗ト申スハ、一向ニ大妄語ニテ候ガ、深ク其ノ根源ヲ隠シテ候ヘバ、淺機ノ人顯シ難シ。一向ニ誑惑セラレテ數年ヲ經テ候。……漢土ニモ知ル人ナク、日本ニモアヤシメズシテ、既ニ四百餘年ヲクレリ。是ノ如ク佛法ノ邪正亂レシカバ、王法モ漸ク盡キヌ。結句ハ此ノ國他國ニ破ラレテ亡國ト成ルベキナリ。此ノ事日蓮獨リ勘ヘ知ル故ニ、佛法ノ爲メ王法ノ爲メ、諸經ノ要文ヲ集メテ、一卷ノ書ヲ造ル。仍テ故最明寺入道殿ニ奉ル。立正安國論ト名ケキ。其ノ書ニ委シク申シタレトモ、愚人ハ知り難シ。

といはれた。「其の書に委しく申したれども」とある。即ち文底の義意には「委しく申」されたが、

文字の上、語の末では「まづ／＼さしおくこともあるなり」と隠されてある。聖人の四種釋例（顯文例、顯義隱文例、文義共顯例、文義共隱例）にあてれば、本論は、禪、眞言、天台等の謗法に對しては顯義隱文例を、念佛宗の謗法に對してだけ文義共顯例を取られたもので、實に不思議な組織の御書である。何故に聖人がこの書に、念佛宗のみの謗法を呵責せられたか、また法華眞言の正法といはれたかといふと、大體は聖人は此の時、天台宗叡山の學匠として鎌倉に居られたのだから、上書の論文の初には「天沙門日蓮勘之」と書かれてあつた。それゆゑ法華眞言の正法といはれ、又禪念佛ともに謗法ではあるが、禪の方はその弘通の範圍がまだ甚だ狭く、國土の謗法といふほどでない、念佛は日本國中いたらぬ限なく、王臣萬民一同に普及して居るし、法華經等を捨閉開拋する謗法の相貌が分明であつたから、當時の謗法の代表として、之を破折の目標とせられたのである。（なほ人格教義の項に委悉）私がかつて「類纂高祖遺文録」の略解題に、左のとほり本書に就いて書いて置いた。

其の主意は、國家の根本に正法を立て、邪法の流布を廢し、以て民人を精神的に安穩不動の境地に住せしめ、延いて國土の災害をも消除せむとする大主張を開闡せられた御書である。御文は十段に分れ、主客對問の體に擬して、雅妙絢爛の文辭の裡に、深遠なる宗教哲學と、經世愛人の宗教的熱血とが洋溢して居る。殊に注意を要するは、本書がもと上書の爲にお書きになつたもので、音韻の連続にも御意を注がれたものと見え、一氣呵成の氣力に充ち満ちた中に、朗々たる自

然の調節が含まれて居る。仍で遂にウカ／＼読み込まれて、其の深遠な義理の潜伏に心づかぬ人が往々にある。それは本書の十大段は、一段ごとに非常な名文句が諸處に織込まれて居るが、その中にみな或物が包まれて居るので、恰度帝網の珠々相照して無盡の光を發するがごとく、これ等の名文首尾一貫して、想ひもよらぬ一大宗教哲學の材料となるので、本書と「觀心本尊鈔」と「開目鈔」と、三つ一具して、聖人宗教の主要面は彷彿し得られるのである。されば聖人自らも、

本書をば文相の外面からは、未だ本意を顯はさずとして、
イツハリ愚ニシテマヅ／＼サシオク事モアルナリ。立正安國論ノ如シ。

と仰せられたと共に、その文義文意の深味からは、
立正安國論ノ如シ、彼ノ書ニ詳シク述タレドモ、愚者ハ見難シ。

と仰せられてある。また御一代の間に、度々御自身でも講ぜられ、また内訌外患の大豫言書として、自ら未萌を知るは聖人の一分也と公唱せられた程であるから、研鑽者は輕々に拜讀することなく、深く思を潜めて妙義を掬すべきである。また本書において最も大切なことは、「國」(家)と「法」(眞)、「法」(眞)と「人」(類)、「人」(類)と「國」(家)といふ三者の緊密な關係と、「物心」(物質と)の一如、「神人」(神靈と)の一如、「現未」(現在と)の一如「政教」(政治と)の一如「等を示されたことで、是れ佐渡前の御書たるに係らず、宗義上重要な御妙判として、永久に光を放つ所以である。また一代の

御事業からいつても、本書は伊豆流罪、龍口死刑、佐渡遠流、此の三大法難の基因で、聖人の上行垂迹の自覺發表をなされた素地ともなり、自界叛逆難、他國侵逼難の二難の豫言となりしのみならず、未來において此の書の理想は「本尊鈔」「撰時鈔」「三大祕法鈔」を徹して、此の世界に必ず實現せられねばならぬ人類終局の大理想とまで擴大せらるべきものである。

さて此の上書を得た最明寺入道はどうしたか。傳説の(別頭統)に依れば、七月二十四日、時頼入道が聖人を引見したといふことがあるが、これは諸御書にその證を得がたいやうだし、「下山鈔」には、

先ヅ大地震ニツイテ、去ル文應元年ニ書ヲ一卷註シタリシヲ、故最明寺入道殿ニ奉ル。御尋モナク御用ヒモナカリシカバ、

とあるに反するから取らない。

憂國愛民の血を瀝いだ献言も、何の反響も聞くことが出来なかつたから、聖人は、更に小町街頭にこれを鼓らされた。募々たる毒鼓は、諸人の肝を寒からしめるばかりであつた。諸經の明文を擧げて之を現在の災禍に引當て、謗法を改めざれば、現世には此の上なほ修羅鬪諍の難を受け、後生には無間地獄に墮つべし。これ乃ち三世了達の世尊の金識なりと、歴々掌を指すがごとく説かれる。聞くものは肌に粟して、何といふ國を咀ふ法師かと、避け走るもあり、怨み憎むもある、冒り喚ぶ

もある、例の瓦石を投ずるものもある。中には驚き疑ひやがて仰いで教に服するものもある。然るにその八月の廿七日の夜、傳説によれば聖人は、夕の讀經の後、庵室の庭に空にむかひて經を誦して居らるゝ時、數疋の猿が来て、しきりに御法衣の袖を啣へて、山手の方へ促す。いかにするも纏はつて離さない。何事であらう暫く爲すがまゝにしやうとて、それに従つて行かれたら、十數町の山の奥なる山王の社の岩窟へ案内した。(此の處をお猿島といひ今猿島山法性寺といふ寺がある)

御庵室には、聖人が俄かにお坐まさぬとて訝かる中、時ならぬ數百千の群衆の音けたゝましく、刻々にその數は増して、此の庵室をかこむよと見るまに、関を哄とあげ、おのゝ手にゝ松火を投げ入れゝ、火を庵室にかけた。聖人はおはしまさぬが、日昭尊者はじめの僧衆は居られたらう。参り會した武士等は、僧衆を擁護して脱れしめやうとする。群衆は餘人には目なかけそ、日蓮はいづくぞゝと搜しまはる。御弟子達はそのため被害を蒙らなかつたらしい。たゞ昭師等を守護した進士太郎善春と、御弟子の能登房等は、奮闘しておのゝ手傷を負うた。群衆は日蓮出づれば逃さじと四方を包むだが、遂に聖人の御貌は見えなかつた。大方あの強情漢だから、敵の手に死なうよりはと、自ら焼け死にでもしたものだらうかと、庵室の焼け落ちる頃には群衆の多くは引あげた。焼跡まで残つたものどもは、たゞ彼の巨軀の日蓮の死骸がないのは、さても不思議やと訝つた。若し聖人が庵室にお在でであつたなら、必定この暴舉に御身を引いたまうたに相違ない。ゆゑに之を御命

にかゝはる「大事の難四度」の第一とする傳説もある。聖人この事をば「下山鈔」に

國主ノ御用ヒナキ法師ナレバ、アヤマチ(害)タリトモ科アラジトヤ思ヒケン、念佛者并ニ檀那等、又サルベキ人人モ同意シケルトゾ聞エシ、夜中ニ日蓮ガ小庵ニ數千人押寄セテ、殺害セントセシカドモ、イカマシタリケン、其夜ノ害モノガレヌ。然レドモ心ヲ合セタル事ナレバ、寄セタル者モ科ナクテ、大事ノ政道ヲ破ル。

と幕府を責められてある。此の御文によれば、焼打の群衆は、念佛宗の法師及びその檀那で、「さるべき人々」すなはち社會上歴々の人達も同意して、彼の悪き坊主、殺してしまへと群衆を煽動した。その同意煽動したものは、どんな歴々の人か。「心を合せたる事なれば、寄せたる者も科なくて」とあるから、當時の政法上重要な地位にある者であることは勿論だ。また身延山録外の「光日房鈔斷篇」にも、

キリモノドモ、ヨリアヒテ、マチウド等ヲカタラヒテ、數萬人ノ者ヲモンテ、夜中ニオシヨセ失ハントセシホドニ、十羅刹ノ御計ニテヤアリケン、日蓮其ノ難ヲノガレシカバ、

とあるから、權人すなはち政治上の要路に當つて居るもの、および幕府の直接當路者でなくとも、當路者をも動すほどの權勢あるものである。執權、連署、評定衆、引付衆、并にこれ等をも動かす權人である。それは誰々だらう。後の伊豆流罪の時の事實に對照すると、この焼打の根本煽動者、使

喉者の筆頭ともいふべきは、おそらく前の連署、陸奥入道重時、即ち極樂寺入道殿であらうとの推測を有^{ちうと}理とする。

彼はさきに書いた通り、法然上人の孫弟子打宮入道修観の一字を貰つて、観覺とさへいつて居る念佛者である。そして權勢翹望家であり、權略家であり、出色の政治家である。聖人の念佛無間に業を煮やして居るところへ、別に安房の東條郷の領家の尼と地頭の東條左衛門尉景信(極樂寺重時の家人でてもあつた)の間で、所領の争ひをして居たところ、聖人が領家の方かたもととなつて、極樂寺家や東條方はうの方を不利に陥れた。其處で極樂寺殿は東條景信をして聖人が東條郷に入ることを塞がしめ、此の房主奴と愈にくむで目の敵にして居ると、今度は天變地天、飢饉疫癘はみな念佛宗の爲めだ、その儘にして置くと、他國から攻めに來る！ 此の國に同士討がおこる！ などと最明寺入道殿へ進言した!! ナニ出家沙門の分際で、政治向や、訴訟事まで嘴を入れる。奇怪至極、此の上何をするか知れぬ！ 愈打捨て置けぬ奴。可^{よし}矣、俺が承知だ、殺^やつて了^{しま}へ!!! 彼の性格としてはさういふ事もありさうな事だ。

執權は、彼の子の武藏守長時、連署は、弟の相模守政村、評定の筆頭は彼の從弟の武藏前司朝直、これは隆寛律師(法然上人の高弟)の受法、次席は彼の甥の尾張前司時章で、これも道阿彌(法然上人の孫弟子)の弟子で、みなバリバリの念佛者だ。日蓮を殺^やてしまへとの聲は、揃へられるに不思議はない。濃厚で念佛

者でなかつたらしい政村でも、敢て反対はしなかつたに相違ない。或は矢張同意だつたらう。政治の中心がこれだ。ともく、「心を合せた」ことだから、寄せた者を科^かするわけがない。そして遂に「貞永式目」の、夜打放火は死罪か流罪かに行ふべき政道をみづから破つて、後に聖人につよく呵責せられることになつたのである。

山王の岩窟にあつて、猿どもの供養する果實を召上つて居た聖人は、その夜の狼籍を知られると共に、これは一時彼等を油断せしめる方がよからうと、ひそかに下總なる富木殿の第^{やしほ}へ隠れられた。傳説によると富木殿は聖人の爲めに小き法華堂を造つて、厚く供養した。此の時に聖人みづから、小き一尊四士(釋迦牟尼佛と、上行、無邊淨行、安立行の四菩薩)と鬼子母神とを彫刻せられた。それが今の中山法華經寺の寶藏に存在するものだといふ。又聖人は富木殿の請のまゝに、こゝで一百日の御說法があつた。曾谷、太田が來り聴いたのみでなく、下總白井莊の秋元太郎兵衛尉勝光も、此の時に檀方になつたと傳へる(曾谷、太田も此の時との説もある。)吉祥庵も此の年に剃髮して、筑後公日朗となつた。駿州岩本實相寺の伯耆公は、聖人が慕はしくつて堪へられないからと、遂に來つて御弟子となつた。聖人ために日興とを賜はる。また淨土宗の鐘阿彌陀佛が聖人の教化に歸して、名を首題房日唱と改め、是れまでの伏鐘のかはりに何をたゞいて調聲とすべきかと問うた時、聖人をしへて鐘は退嬰しりやまの響である。我が法は折伏逆化、進みて敵を責るに在る。よろしく進擧の聲たる太鼓を以てせよといはれ、初めて太鼓

を用ふるやうになつたと傳説する。

翌文應二年の二月二十日に弘長元年と改元せられた。その中春、聖人は武藏恩田の吉田益行を訪ひ、その紹介を得て、京都なる吉田兼益を訊ねて、神道の秘奥を傳へられたまうたと傳へる。その夏の中ばに、再び鎌倉へ歸つた聖人は、またもや松葉谷に庵し小町街頭に立ちて、炎を吐く折伏の舌鋒は、いよ／＼前年に勝つた。あゝ日蓮はまだ死ななかつたのかと、他宗の僧侶は驚き騒いだ。いかにすべきと彼等は集會した。門下の人々は齊しく聖人を守護して、その警戒を嚴にした。

豫言の奇禍は熟した。其の五月十二日、執權武藏守長時は、聖人を突然逮捕せしめて、伊豆國伊東莊へ流罪した。眞蹟存在の「神國王御書」には、

此ハ教主釋尊、多寶、十方ノ諸佛ノ御使トシテ、世間ニハ一分ノ失ナキ者ヲ、一國ノ諸人ニ怨マ
スルノミナラス。兩度ノ流罪ニアテ、日中ニ鎌倉ノ小路ヲ渡スコト朝敵ノゴトシ。

とあるから、その頃の慣例として普通の罪人は、夕刻から夜の中に刑場又は配處へ引き行く筈のを、謀叛人か朝敵などにのみ行ふやうな、日中に鎌倉の小路を渡し、強か辱しめて流罪した。聖人にあつては、其の方が寧ろより多くその偉大を増したらうが、これによつていかに幕府が、聖人の惡さにその政法的常識を失つて居たか々わかる。そして鎌倉中の念佛者禪宗等の僧侶は、手を打ち聲を合して、この聖人の配流の姿を嘲けり嗤つたことだらう。

傳説によると、此の時は船が亂橋から出た。弟子檀越がいたましい聖人を見送る中に、十九歳の日朗師は、是非とも聖人のお供がしたいと願つて船に取りついた。役人どもは之を遮り、遂に櫂を以てその腕を打つた。朗師はために右の腕を折かれて地にのめつた。聖人船中からこの痛しい姿を見て朗師を慰め、「月西山に入る時は日蓮伊東にありと思へ、日東天に上る時は、日朗鎌倉に在りと想はむ」と宣ひ、日朗師は痛みも忘れて感泣し、一門の老若みな袂をしぼつたといふことである。

さて幕府は、聖人をいかなる罪人として、伊豆配流と斷じたものだらう。「下山鈔」には、上に擧げた「寄セタル者モ科ナクテ、大事ノ政道ヲ破ル」の次下に、

日蓮ガ生キタル不思議(不都)ナリトテ、伊豆國へ流シヌ。

といはれ、「光日房鈔斷片(身延)」には、前記の「日蓮其ノ難ヲ脱レシカバ」の次ぎに、

兩國吏(兩國ノ吏)と傍點する時は意味不明恐くは兩國司のことなるべし吏は(彼の頃史の字と混用の例多し即ち兩國史にして兩國司の普通ならむ)心ヲ合セタル事ナレバ、殺サレヌヲトガニシテ、伊豆國へ流シヌ。

とある。すなはち伊豆流罪は、松葉ヶ谷焼打ちに殺され損つて、そして性懲りもなく又再び其の暴言を道路に吐くからといふのが實際の理由で、鎌倉からその折伏逆化の辛辣なる語。物騒なる他國侵逼、自界叛逆の豫言を聞えなくするのが目的であつたらしい。兩國吏(兩國司)とは、おそらく執權武藏守(長時)、連署相模守(村政)で、武藏守、相模守と、この兩名の判さへあれば、何ごとでも出

來るのであるから、兩名心を合して此の處置を取つたものだらう。(嘗て私は兩名の内政村は温厚の長
者だから寧ろ重時だらうかと思つ

たが吏を史の通用で司の普通と見周圍の状態を) 而して「妙法比丘尼御返事」に、
去ヌル文應ノ比、故最明寺入道殿ニ申シ上ゲヌ。サレドモ用フル事ナカリシカバ、念佛者等、此
ノ由ヲ聞キテ、上下ノ諸人ヲ語ラヒ、打殺サントセシ程ニ、叶ハザリシカバ、長時武藏守殿ハ、
極樂寺殿ノ御子ナリシ故ニ、親ノ御心ヲ知リテ、理不盡ニ伊豆國ニ流シタマヒヌ。

とあるによつて、其の根源は極樂寺入道重時にあることがわかる。重時の意志を受けた子の長時が、
流罪の案を以て政村に譲り、温厚な政村も之を賛し、評定衆等にも異議なく、この判決が下された。
そして此等の人々は、みな去年の松葉ヶ谷焼打を、大抵内面に承知し合意して居たのだから譯はな
5。

併しいくら執權連署でも、罪名なしには流罪に處し得られまい。聖人は「世間ニハ一分ノ失ナキ
モノヲ」と度々いはれ「理不盡」ともいはれた。いかなる罪名を具して、彼等は聖人を流罪と決し
たものだらうか。

嘗て重野文學博士は、日蓮は「立正安國論」によりて、妖言妖書の律條に觸れ、初犯伊豆、再犯
佐波に流されたものとしたが、私は鎌倉幕府は、いはゆる朝廷の律條によつて治罰したのでなく、
「貞永式目」によつて罰したのではないかとおもふ。それは彼の式目の惡口の條に、「惡口ハ闕殺ノ

基、其ノ重キモノハ流罪ニ處ス」といふことがある。即ち去年の松葉ヶ谷の徒黨、闕殺、放火の騷
擾は、まツたく日蓮が、念佛は無間禪は天魔にして、天變地天飢饉疫癘の根源、自界叛逆他國侵逼
の張本なり。今生には國を亡ひ、後生には無間地獄に墮つる惡法なりなどいふ、前代未聞の惡口に
因る、彼が惡口これ闕殺騷擾の基なり。宜しく之を伊豆に流して懲罰すべし。これがその時の罪案
だつたらうとおもはれる。放火殺傷等は流罪死罪だが、百千萬と集つた群衆の中、誰が放火の正犯
人だか、殺傷の當人だか、全くわからぬ。しかし此の如き事を起したのは日蓮にその罪があるのは
勿論だ。その騷擾の責任を考へて謹慎することか、歸つて來ると、相かはらず再び騷擾を引き起す
やうな惡口をする。宜しく之を治罰すべしといふのである。一往ちよつと譯がわかつたやうに聞え
る。おそらく此が事實の真相でないかとおもふ。

かく解すると、聖人の「寄タル者モ科ナクテ、大事ノ政道ヲ破ル、日蓮ガ生タル(再び以前の言
論を恣にする)
不思議ナリトテ伊豆國ヘ流シヌ」(下山)との御語が、いかにも躍々として來る。然るに幕府の擬律
は、聖人の激語が惡口と定まつての後、その理由ははじめて立つのだが、聖人の主張は惡口ではな
い。經論に基き、一々その文證を出して論議せられる堂々たる法門である。そして若し此の事不審
なれば、禪念佛の高僧等に召合せよとすらいはれて居る。辻説法にも質疑難問すこしも避けられな
い。公明なる立場にある呵責謗法、折伏の法門である。幕府にして公正ならば、聖人の希望の如く

念佛、禪及び諸宗の高僧等に對論せしめ、そして果して正理に立つた折伏法門か、我田引水の誹謗惡口かを確め、愈よ惡口と極つてから流罪したのならわかつて居る。佛法に折伏法門ある仔細を知らず、たゞ他宗を惡くいふから惡口だ！とは何といふ短見荒量だ。けれどもたゞ北條幕府だけではない。佛法の仔細も辨へぬ世俗、世學者、通佛敎家等は、七百年來、やはり「日蓮は諸宗を誹謗し」とか「諸宗を罵詈訛」などいつて居る。此等の人が、若し當時に居たら、同じく伊豆流罪を至當とする人々かも知れない。

若し幕府が、聖人の請のごとく、聖人と諸宗の高僧とを召合し對論せしめて居たなら、一國諸人が聖人に對する誤解怨嫉は一時に雲消霧散して居やう。それをしないから聖人は止むを得ず常に折伏逆化の激語を放ち、一國諸人は聖人を怨む。そして燒打などした。幕府はそれを罪に聖人を流した。ゆゑに「世間ニハ一分ノ失ナキモノヲ、一國ノ諸人ニ怨マスルノミナラス(怨まするは幕府が公故で)。兩度ノ流罪ニアテ」と仰せられた。所詮は、憂世愛民、護國殉敎の聖人をして、公場に其の言論を盡さしむることをせず、淺慮にも直ちに斷獄し流罪して、その口を銷しやうとし、その聲を遠ざけやうとしたのが、幕府の大過である。「理不盡」とは實に幕府の處置を、徹底して批評せられた語だ。全く「理不盡」である。されば聖人は、「下山鈔」の「伊豆國へ流シヌ」の次下に、
サレバ人ノ餘リニ惡キニハ、我ガ滅ブベキ過ヲモ顧リミザル歟。御式目ヲモ破ラル、歟(徒黨、闖

の者を罪せざ。御起請文ヲ見ルニ、此ノ式目ノ條文ノ如ク政ヲ執リテ私ヲ存セザル旨、梵釋四天
の者を罪せざ。御起請文ヲ見ルニ、此ノ式目ノ條文ノ如ク政ヲ執リテ私ヲ存セザル旨、梵釋四天
天照太神正八幡等(ノ神々ノ御名)ヲ書キ載セ奉ル。(若シ)予(聖)存外ノ法門(安國論等の破)ヲ
申サバ、仔細ヲ辨ヘラズバ、日本國ノ御歸依ノ僧等ニ召シ合ハサレテ、其ニ(テ)尙ホ事ユカ
ズバ(理非正邪が)漢土月氏マデモ(對論)尋ネラルベシ。其(對論)ニ叶ハズバ、仔細アリナント、暫ク
(豫言ノ實不實ヲ)待タルベシ。仔細(法門の)モ辨ヘヌ人々ガ、我ガ身ノ滅ブベキヲサシオイテ、
大事ノ起請ヲ破ラル、事、意得ラズ。(政道は此の條文に依るとの起請を破るは神
々々への誓を破りて身を滅すことなるを宣ふ)
といはれてある。

傳説に依ると、聖人を載せた船は、伊東庄へ着けないで、彼處から海上ほど一里餘ある、篠海浦といふ荒磯に、其の日の薄暮(くらくた)に着けて、とある岩角に聖人を追ひあげた。「此の磯傳ひで伊東の町へ行ける」と。聖人は薄暗い岩角から、あちらこちらと進まれたが、孰れもみな波濤である。近く磊磊たる屏風の如き岩の崎が魔のやうに黒く見えて居るが、激浪怒濤近づくべくもない。聖人は止を得ず、天を仰いで法華經を誦して居られた。あゝ此の國この民を救はむとする我を、夜打ちにせむとしてかなはず、また斯のごとく激浪中の岩礁に棄つ。あはれなる迷妄の衆よと。末法法華經行者の值難の實現が、いかに慘憺たるものなるかを痛感せられたらう。若し之を事實とせば、聖人の心中、たゞ法華經と釋尊に對する絶待信賴の御祈りであつたらう。それは扶けたまへの祈りでなく、

若し我れ末法法華經の行者たること眞ならば、法華經、釋尊、多寶、十方の諸佛、一切の菩薩聲聞諸大善神、かならず我を護らむ。我は末法流布の大法を自解佛乘せり。此の法の世に要あらば、我れまた必らず一切衆生の爲めに要あらむと。孔子の『匡人それ我を如何せむ』の大信念、『丘が禱るや久し矣』の絶待の禱りと同致のものでおはしたらう。それは安心不動の自然の聲としての、自受法樂としての朗々たる唱題讀經であつたらう。それに磯も近い、夜も明ければ何とかならう！

すると其處へ一艘の漁船が、鰯を急がせてこいで通つた、船頭は岩の上の人影に驚いて、直ちに船をこぎよせ、その出家の人なるを見て益あわて、すぐ聖人を我が船に扶け載せた。船頭の話によれば、それは俎岩といふ有名な岩礁で、満潮には潮に隠れ、干潮には海面に出る。十二日の夕刻は干潮に向つて居たが、夜中には通る船もない、若し此の漁船に助けられずば、聖人は深夜の満潮に海底の藻屑となられねばならなかつたのである。船頭は深く官人の仕打を憤慨した。そして聖人をその隣村の川奈なる我が家に、しばしお養ひすることに意を決した。その船頭は、川奈の浦名主をして居る、上原彌三郎といふ人であつた。

彌三郎が家へ歸つた時、女房は立迎へて、船に出家の人の居るのを怪しんだ。それは日蓮聖人だと聞いた時、女房は駭然とした。『日蓮を蔽ふな』といふ地頭からの達しがあつたからである。併し聖人の大人格は彼の女を感激せしめ、遂に夫婦心を同うし、身を忘れて聖人を密かに供養した。聖

人もふかく兩人の赤誠を賞で、『日蓮の父母の、伊豆の川奈に生れて、日蓮を育みたまふか』とまでいはれ、船守といふ氏までたまうた。その時聖人をお慰まひして居た岩窟が、今もなほ存して居るといふ。此の傳説を、詩化し法門化して、恩師智學先生は、『船守』といふ常盤津に作られ、故岸澤仲助が作曲した。その縁因佛性開會の法門を織込まれた處にいたると、およそ誠心ある人ならば、誰れでも泣かないで居られない。實に美しい傳説である。

しかしこの俎岩のことは、『註畫讃』(聖人滅後百八十年)にもまだ見えない。彼の書には『船守彌三郎許御書』によりて、たゞ御文を漢文に書き直したまでに過ぎぬ。其の『船守鈔』といふ、聖人が伊東へ行かれてから、彌三郎へたまはつた御消息には、

日蓮去ル五月十二日流罪ノ時、ソノ津ニツキテ候ヒシニ、イマダ名ヲモキキオヨビマイラセズ候處、船ヨリアガリクルシニ候ヒキトコロニ、懇ロニアタラセ給ヒ候ヒシ事、イカナル宿習ナルラシ。過去ニ法華經ノ行者ニテワタラセ給ヘルガ、今末法ニ船守ノ彌三郎ト生レカハリテ、日蓮ヲアハレミ給フ歟。タトヒ男ハサモアルベキニ、女房ノ身トシテ、食ヲアタヘ、洗足、テウヅ、其外サモ事懇ロナル事、日蓮ハシラズ、不思議トモ申スパカリナシ。殊ニ三十日餘リアリテ、内心ニ法華經ヲ信ジ、日蓮ヲ供養シタマフ事、イカナルヨシナルヤ。カ、ル地頭萬民日蓮ヲニクミネタム事、鎌倉ヨリモスギタリ。見ルモノハ目ヲヒキ、聞ク人ハアダム(中ニ)。殊ニ五月ノ頃ナレ

ベ、米モトボシカルランニ、日蓮ヲ内ニテハグクミ給ヒシ事ハ、日蓮ガ父母ノ、伊豆ノ伊東、カワナト云フ所ニ生レカハリ給フ歟。

とある。御文によると、「其ノ津」とあるから、川奈へお着きになつたやうである。が次に船からあがつて苦しまれたとある。これが問題だ。普通の川奈の湊だとすると、聖人は十二歳までは、小湊の海邊に育たれ、漁人の長者の子であつた。わづか鎌倉から伊東への船にお疊ひになつたといふのは、六尺三寸の聖人には少し變なやうである。この御文の中に、川奈をも矢張伊東の庄の川奈といふ様に書かれてあるから、或は俎岩のある篠海の浦も、伊東の庄の内、川奈の津の一部とせられて居たかも知れない。それから今一つは船守とは船にての守護の意のやうだから、これが聖人から給はつた苗字とすれば、此の傳説を是認する方がいゝやうにおもはれる。或はまた船守といふ本からの氏だつたので、むしろ傳説はその氏から成形せられたか、いまだ何れとも確定しがたい。たゞ私は「船守鈔」の「其ノ津」とのみの文字によつて、直に俎岩の美譚を否定しやうとするのに賛同できない。なぜならば聖人に對する極樂寺重時のやり方は、さやうな事をも敢て爲すことを憚らない程度にまでなつて居たことは、松葉ヶ谷の事件で想像できるからである。

同じ「船守鈔」に依ると、聖人は其の六月、これまで怨嫉者の一人であつた、伊東の庄の地頭から、病惱の平癒祈念をば懇願せられ、一たびは之を斷られたが、重ねての丁寧なる願に、いまだ法華

經は信じずとも、われ日蓮を一分信すればこそ斯くはたのみ來るのであらう。さらば平癒せば法華經を信ぜらるゝか。必らず信じ參らすることは申すまでもムらぬといふ答だつたから、仍で聖人は伊東に徙つて地頭の爲めに祈念し教誨し、遂に彼の病惱を治癒せしめられた。地頭は悦びのあまりに、曾てみづから海中に網して得たる、金色立像の釋尊の、威容尊特なのをば聖人に奉り、聖人これを受けて隨身佛とせられた。仍で聖人が彌三郎に、「彼の地頭の病惱は法華經守護の十羅刹の責であつたらう。此の病惱によりて地頭が法華經に救はれ、その法悦の爲めに、海中出現の釋尊を奉つた。げに我等無始以來、生死の海中に沈みしが、今度法華經の行者となりて、無始の生死煩惱の色心を、直ちにこれ妙境妙智金剛不壞の佛身と顯し、釋迦佛と同じき佛とならむ事、あたかも此の海中出現の佛像の金色なるが如くである」との旨を教へられてある。御文に

コトニ當地頭ノ病惱ニツイテ、祈禱申スベキヨシ仰セ候シ間、案ニアツカヒテ候。然レドモ一分信仰ノ心ヲ日蓮ニ出シ給ヘバ、法華經ヘソセウトコソ思ヒ候ヘ。此時ハ十羅刹女モ争デカ力ヲ合セ給ハザルベキト思ヒ候テ、法華經、釋迦、多寶、十方ノ諸佛、並ニ天照八幡大小ノ神祇等ニ申シテ候。定メテ評議アリテゾ、シルシヲバ顯シ給ハン。ヨモ日蓮ヲバ捨テサセ給ハジ。イタキトカユキトノ如クアテガハセ給ハント思候ヒシニ、ツキニ病惱ナリ、海中ウロクヅノ中ヨリ出現ノ佛體ヲ、日蓮ニ給ハル事、此ノ病惱ノ故也。サダメテ十羅刹ノセメナリ。此ノ功德モ夫婦二人

ノ功德トナルベシ(此の御文によると船守夫婦なくば聖人の御身の危きほどの事)。我等衆生、無始ヨリ以來、生死海ノ中ニアリシガ、法華經ノ行者トナリテ、無始色心本是理性妙境妙智金剛不壞ノ佛身トナラン事、アニカノ佛ニカハルベキヤ。

とあるのがそれだ。此の以下に事觀の妙法、即身成佛の法門をほゞお説きになつて居ることに就いては第六講の教義の時にゆづる。

つぎに御書にはたゞ「地頭」とあつて名はない。傳説ではその地頭を伊東八郎左衛門尉朝高だと、「註畫讀」以來傳へて居るが、「辨殿御消息(後の建治二年の御書)」に左の御文がある。

伊東ノ八郎左衛門、今ハ信濃守ハ、ゲンニ死ニタリシヲ、イノリイケテ、念佛者等ニナルマジキヨシ、明性房ニヲクリタリシガ、カヘリテ念佛者眞言師ニナリテ、無間地獄ニ墮テヌ。

此の御書の内容が、「船守鈔」の内容の、祈念蘇生のことと似て居るから、多分は同じであらうとおもはれる。若し同じだとすると、此の伊東八郎左衛門尉は、工藤祐經の孫、大和守祐時の子で、伊東庄の地頭であり、後に信濃守となり、日向に下つて、金剛密山祐光寺(眞言)といふ寺を立て、彼の地で卒して居るのを見ると、いよ／＼此の御書と一致する。さうして此の信濃守は名を祐光といひ、朝高とはいはない。祐光は阿彌陀堂加賀法印(眞言)の姪の三川内侍といふのを後妻にもらつたから、それ等の姻戚關係から、信仰を動搖して念佛者眞言師になつたかとおもはれる。若し

た成辨律師日昭尊者の母君は、大和守祐時の姉であるとの説に従へば、祐光は昭師の従弟である。とすれば彼がはじめは聖人を怨みながら、重病になつて聖人にお願ひしたのも、昭師の關係があるだらうし、聖人が昭師に祐光墮獄の事を仰せあるのも、その邊の隠れた消息があらうも知れぬ。それをなぜ宗門の傳説では朝高としたものだらうか。ことに伊豆菫山本立寺に住したことのある日澄師の「註畫讀」に、さうなつて居るのは、此も何か據があることであらう。それは「吾妻鏡」の康元元年其他數ヶ處に、工藤八郎四郎朝高といふ人がある。しば／＼平左衛門尉頼綱等と、的始めの射手などになつて居る。或はこの人が後に左衛門尉となり、伊東へ住してもして伊東八郎左衛門尉朝高といつたため、祐光は後年日向へ行つたから、伊豆の傳説で、兩人相混淆したものでないかとおもはれる。宗門傳説では朝高の方は退轉せず後まで聖人の門下であり、後に遠州へ徙つたなどいつて居る。

さて地頭は歸伏した。住民もその大人格に接して自然に崇敬する。聖人は和田といふ地の新に設けられた房室にあつて、靜かに此の豫言の奇禍の中で、そが獨特の教義發表前の禪思に入られた。

鎌倉ではこの年(弘長元年)の六月一日に、極樂寺の重時が厠(かば)に入つて怪異を見た。どんな怪異だつたか不明だが、それから毎晩瘧のやうに戦ひ出して、心神惘々として悩む。鶴岡の隆辨僧正の祈禱で、三七日すぎて漸くに治まつたけれど、それからは兎角身心勝れず、十一月三日に遂に卒した。宗門

の傳説では、重時の臨終は甚だ悪相であつたといふ。その文籍の徴すべきものはないが、或は然かあつたらうかと想はるゝのは、後に重時の爲め、夢告に依つて五部の大乘經を轉讀して居ることがある。臨終正念極樂往生の念佛者の爲めに、五部大乘經を轉讀して追福をするなどいふことは、あるべからぬことだからである。また此の六月二十二日には、三浦泰村の遺子なる太夫律師良賢が、謀叛を企てつゝあることが發覺し、平左衛門尉盛時、諏訪入道蓮佛が兵を率ゐて、龜ヶ谷で之を召取つた。その時鎌倉は可なり騷擾したとの事である。

翌れば弘長二年、聖人まさに四十一歳、齡不惑を超されたその正月十六日、半年に垂むたる禪思の妙觀は、まづ安房天津なる、工藤左近將監吉隆への消息にあらはれはじめた。それは「四恩鈔」といふ名によつて、有名である。この書は、劈頭まづ「抑モ此ノ流罪ノ身ニ成リテ候ニ付テハ、二ツノ大事アリ」と破題して、一は自身に約して、現實的に末法の法華經の行者となれる大なる悦び。一は他に約して、法華經の行者たる自分を迫害して、謗法の罰を受くる日本國の衆生を慍む大なる歎きを明され、四恩に約しては、菩薩に留難を爲す惡人等は功德を増長せしむる恩人、況して善人をや、これ一切衆生の恩。我を生みて法華經を信する身となしたまへるは、今生の父母の恩。我を迫害して流罪し、法華經を身讀せしむるは、これ今生の國王の恩。末法に法華經を胎して我等を成佛せしむるは、即ち三寶の恩なりとて、徹上徹下、法悦と感恩と悲愍とを以て、一切を淨化したま

へる、聖人體験の告白録である。彼の法然上人や、親鸞聖人が、流罪によつて邊地の衆生に、彌陀の音を聴かしむることを悦ぶといつたやうなのは、はるかに選を異にした深刻徹底せる菩薩行の實感である。また「船守鈔」を皮切りとして、此書には尙に「法華經の行者」を以て許された。

ついでその二月十日、「教機時國鈔」の著述があつた。これ正しく聖人の前期鎌倉時代、即ち天台傳教の正系傳統者、天台沙門、法華經の持者としての資格から蟬脱し、後期鎌倉時代、乃至は佐渡時代の、日本第一の法華經の行者、日本の柱、八十萬億那由他の菩薩の代官、不輕菩薩、上行菩薩の自覺を闡明し、天台傳教に超過せる、獨創建設者としての資格を顯さるゝ前提の御書である。此の伊豆以前の聖人は、その各宗折伏の根據としては、常に天台傳教の判釋たる、權實の二教、一代五時の大判を以て主とし、たまゞ機や時や國のことをいはれても、それは斷片的であつて、堂々たる一家の判教標準としての組織發表をせられたことはない。しかるに今や身みづから末法の法華經の行者が、まさに受くべしと記されたる「法華經」の豫言を、一分實驗したるによりて、即ち天台傳教の惡口怨嫉ばかりを受けたるに異り、杖木瓦石の上、更に一國を代表せる政權によつて流罪擯出せられたといふ、彼等兩聖に例なき豫言の身讀によりて、當然の結果天台傳教に未だ例なき一大判教を示して、聖人自心證悟の大法の初聲を放たれたものである。それゆゑ本書には、彼の佐渡の時

行菩薩の末法弘通の時の化導標準、批判標準を、正確に示されてある。すなはち佛の滅後において佛教を弘通するものは、教法の淺深勝劣、即ち宗教哲學的研究。機根(人の宗)の清濁利鈍——即ち宗教心理學的研究。時代の清濁單複——即ち宗教社會學的研究。國民の習風民性の差異——即ち宗教民俗學的研究。教法流布の前後、言ひ換ると前四者を總合せる次第變化の適不適——即ち宗教進化學的研究。この五つの範疇を具備して、愆(おと)らず弘通するのたけければ、正しき佛教弘通とはならぬ。末法以前においては、此の五義は、弘通者のみが内心に心得て、謂ゆる時機國土に相應する教法を弘通すればよいのであるが、末法の時代は、正像二時代に、各々その時機相應に弘通せられたる、多くの宗旨教法が、混然として存在し、いづれがいづれと見分けのつかない状態であるから、是等の各宗の所立の正邪得失を批判する標準として、自らの宗旨を宣布する前、周到なる此の五義を以て、末法弘通の大法の判教とせねばならない。例せば過去の何々の宗は、宗教哲學(教)に得て居るが宗教心理(機)を失つて居る。何の宗は宗教心理(機)と社會狀態(時)とを能く研めて居るが、宗教哲學(教)に疎かだとか、それ等は相當に研めて居るが、民俗國性(國)の研鑽を忘れたとか、或はその當時にあつては、何れもよく充たされて五義に適つて居るとかと批判斷定するのである。言ひ換れば此の宗教の五義は、最後の末法に出て、前代の宗教を批判解決し、更に新に最後の統一的宗教を建設すべき法華經本門弘通の判教法なので、その根據は上行菩薩の末法弘通を豫言せる神力品である。

此の年、なほ「上行菩薩結要付屬口傳」と「顯謗法鈔」とをお著はしになつた。「結要付屬口傳」は、「法華經」の豫言、並びに天台妙樂等の釋、佛教史の實蹟等に徴して、末法の始の五百年には、上行菩薩出現して、法華經本門の正法を弘めざるべからざることを示された。是即ち「教機時國鈔」の判教を發表せられたについて、御自身の内面の自覺を暗示せられたものと見るべきであらう。

「顯謗法鈔」は、普通に佛教の教學上の著述として見ても、これによつて聖人の學問的識見が、群を抜いた異采ある精透さ徹底さを示すものである。佛教諸宗の學者は多いけれども、何ゆゑか、經論にかなり強く誠めてある謗法といふものについて、特別の研究をして居る人師(にんし)はない。近く日本(にほん)の弘法大師でも、謗人謗法の重罪をいひながら、謗法の何ものたるやの研究はしてない。法然上人の如きも、檀越が謗法とは如何と問へるに對してすら、「これは人の餘りせぬ事にて候」などいつて居る。親鸞聖人でも、やはり謗法とは、外道が佛教を誹り、小乗が大乗を誹るのをいふものだとやうに認めて居る。すると日本の彼の時代には、外道も小乗もないから、人の餘りせぬ事だといふのは尤もの事になる。然るに聖人は、此の御書において、各宗の人師の所立が、謗法に墮つる所以をば、分明に示されてある。親鸞聖人の觀た末法の機は、愚痴の惡人であるが、聖人の觀た末法の機は、愚痴惡見のものと共に、邪智謗法の執見即ち邪智の惡人がある。謗法の闡明はこの必要によ

るのである。又此の書は一面より見れば、末法の法華經の行者、尅實すれば上行菩薩の自覺ある聖人が、五義に依つて從來の宗教を批判せらるゝ時、他人の夢にも想はざる法華經中心の徹底義を以て、各宗の宗義の根本に、深刻なる解剖を加へ、其の根本的誤謬を剔抉せられたもの。此の誤謬は、上行の自覺ある聖人ならねば、誰人も發見し能はざる底のもので、後に聖人が法華經講談の際、神力品の上行の歎徳の文の「斯ノ人人間ニ行ジテ、能ク衆生ノ闇ヲ滅ス」とある下の句を、「衆生ノ闇トハ、謗法ノ大重病ナリ」と仰せられたのも此の故である。これを以ても聖人の上行自覺が、内觀的には決して佐渡を待たないことの一證ともなる。

明けて弘長の三年、傳説によれば、聖人はその毎日の例の如く、海に向つて法華經の自我偈を誦して居られた仲春の一日、突如と異相の人が來て恭しく、「一七日を過ぎれば、御赦免になられまじやう」と申し上げた。するとその二十三日に、最明寺入道の發意として、兩執權等と議り、聖人赦免の牒を下した。仍で御弟子の但馬公日乗が、日昭尊者の命を受け、悦び勇んで立文を携へ、伊東へ報せに來た。聖人は滿一ヶ年七ヶ月の流罪を終へ、復び名越の庵室へ歸られた。

伊豆の流罪は、畢竟たゞ、聖人に末法の法華經の行者たる實蹟と體驗を與へ、豫言に適應せし法悦に潤はせ、いよ／＼聖人の大を増したに過ぎなかつた。

聖人が伊豆流罪中に、鎌倉には、一の新しい宗教上の力が加はつた。それは最明寺入道が、弘長

元年に、當時常陸の三村寺に居た良觀房忍性といふ眞言律宗の僧を迎へて、光泉寺を開かせたことで、また恐らくはその翌弘長二年(?)に、良觀房の師、南都西大寺の和上、思圓房叡尊(眞正)が、鎌倉に迎へられ、當時幕府の要路にある殆んど總てが、叡尊から菩薩戒又は八齋戒をさづかり、めつたに自分から出ない最明寺入道まで、叡尊が、召しに應ぜぬものだから、彼の宿房を訪ねて受戒し、その後は叡尊からも往き、その外將軍家及び執權并に北條一家の、閨房の權女房も大抵受戒し、建長寺の坊さんも多く受戒した。叡尊は半年以上も居てやがて歸つたが、良觀房忍性は、その後、武藏守長時が極樂寺の長老に任じ、寺を眞言律宗にして、念佛持戒を弘めさせたやうである。

最明寺入道は、聖人にいかなる感想を以て居たか、明瞭にはわからぬが、元來聰明にして公平な人であつたやうだから、重時、長時等の積極的日蓮ざらひのやうではなかつたらうとおもはれる。

伊豆赦免が此の人の意志に出たことは、「光日房鈔斷片」の

最明寺殿計コソ、仔細アルカトオモハレテ、イツギユルサレヌ。

とあるのに明で、それは「式目」に違へる理不盡の所罰だつたことを悟つたものらしく、「下山鈔」に、「科ナキ(モノヲ罪セル)事ハ、恥カシキカノ故ニ、ホドナク召返サレシ」といはれてある。前非をさとつた事は、進歩の過程である。然るに其の年の十一月廿二日、時頼入道は、三十七歳を以て、最明寺の別業に卒した。

「安國論」上書の前に聖人の對面せられた時、并に上書の後も、何等の反響を示さなかつた入道が、後に自の發意で流罪赦免せしめるに至つたのは、何かの動機がその間にあつたものだらうと思はれる。日蓮が主張にも深き佛教の義理法門のあるものと見える。即ち「仔細アルカ」と覺つた最明寺の卒去に對し、聖人は可なり残り惜しく考へられた。

サアリン程ニ最明寺入道殿、隠レサセタマヒシカバ、イカニモ此事(立正安國論の主張)アシクナリナンツ。

イソギ隠ルベキ世(通世す)ナリトハオモヒシカドモ。(光日房鈔斷片)

伊豆から歸つた聖人は、最早たゞの天台沙門、傳教大師門人のみではなかつた。獨創建設の時代は、この後一歩／＼に開き出され、踏み固められて行くやうになつた。(御事蹟篇 三二六へ)

(二) その御人格

此の前期鎌倉時代の御事蹟に就いて、私共が聖人の御人格を拜するに、左の如き御特質が明かに顯はれて居るとおもふ。

- (一) 不惜身命の殉教的人格
- (二) 思慮周密の發動的人格
- (三) 直觀感應の豫言的人格

(四) 深智卓識の思索的人格

(五) 温情慈愛の同化的人格

(六) 感謝報恩の内省的人格

(七) 上行自覺の信念的人格

もつとも是等の特質は、聖人の一生を通じて顯はされて居るものであるが、今や二十餘年の修學の結果、三十二歳の壯年で、開覺立宗せし聖者が、一世を救済すべく動きはじめられた約十年間の生活に、かゝる諸ろの御特色が顯はれて居ることは、私共の人格修養の上に、ふかき反省を與へらるるものであると信ずる。

(一) 不惜身命の殉教的人格

日蓮聖人が、不惜身命の殉教的熱血に富むで居られたことは、いかなる人も直に氣づく所である。前講にも申し述べた通り、聖人の開教前の格護は「開目鈔」に示されてある。自ら覺れる所を今の世に布かむとせば、父母兄弟師匠國主の王難必らず來るであらう。一世の人々は惡口罵詈訶杖瓦石を加へるであらう、また流罪死罪に行ふであらうことは、清澄山で最初の宣教の時から、豫じめ承知して居られたのである。それにもかゝはらず敢然として之を申出されたのは、全く「守護國家論」に

宣へるがやうに、「我れ身命を惜まず、但だ無上道を惜む」の文を瞻る間、雪山常啼の心を起して、經文のまゝに、無上正法たる法華經をば、日本國の一切衆生の爲めに擁護し愛惜して、自身の命をなげ出されて居たからである。いはゆる俗衆(一般世間)道門(一般僧衆)僭聖(聖賢的僭)の三類の強敵必ず起るべしといふことも、もとより御承知であつたことは、いまだ彼等が熾ならざる「唱法華題目鈔」にも仰せられてあるのによつて明である。この不惜身命の殉教の格護は、幼時いかにも物やさしく慈悲深かつた聖人を、非常なる勇者にした。清澄で受けた満山衆徒の罵言憤怒、道善房の人情にからまつた訓誡とその勘當、地頭景信の修羅の如き忿りの刃をも、平然として後にし、僅かに身を以て西條華房に遁れて來ると、直ちにまた阿彌陀堂の開堂供養の場で、念佛無間を説く。超然迫害死生を度外にしたやり方で、鎌倉でも日昭尊者を得ると、すぐに單身小町の辻に立つて折伏せられる。悪口罵詈雑言と杖木瓦石は、歸依渴仰の聲、甘露珠玉の供養の如く受けられた。生疵の絶え間がなければ、これ菩薩行の印文なりと悦ばれたであらう。朝廷さへ憚られる最明寺入道に會はれると、すぐ入道殿の御信仰ある禪宗は天魔の所爲でござるから、早くお止めあれと諫める。ついでまた最明寺その人さへが、少しは憚つて居る極樂寺入道はじめ、北條一門にさしも歸依多き念佛宗を、天變地天飢饉疫癘の根元、内亂外訌のみなもと、死後無間地獄の業因であるから、速に御歸依をお止めあれと、進言せられる。その結果、焼打暗殺の騒擾も、それを通れられると、少時は遅けられたが、やがて

また突如歸り來つて、復び小町の辻で、今度は法門のみでなく、政治上に焼打裁判の不法まで折伏せられる。仍で伊豆流罪を受けられても、愈よます／＼その殉教的宣教が、佛の豫言を身讀したことを悦ばれて、その態度を強盛にせられるといふことは、「開目鈔」の「詮する所は天も捨てたまへ、諸難にも遭へ身命を期とせん」の本誓願、根本格護の躍動で、「我不愛身命、但惜無上道」の經文の人間化といつてもよい、模範的なる殉教的人格である。

(二) 思慮周密の發動的人格

しかしながら聖人は、すべての時と場處にかまはず、たゞ無暗に熱狂的に怒號を續けるやうな無思慮の殉教者でない。實に思慮周密な御人格である。彼の勇猛精進、不惜身命は、單なる經文崇拜や佛神崇拜の感情から生れて居るのでなく、たゞおのれの所信に強情我慢な、盲滅法な意志から出て居るのではない。「智者に我が義破られずば用ひじ」、智者があつて我が主張を破つた時のみ、我が初めて我が主張を止むべし。然らずば父母の頸を切らむといふほどの迫害も、日本國の王位を讓らむといふ誘惑も、なほ我において用ふる所なし、況むや我が身命を害せむ、或は僧正探題に任せむなどの迫害誘惑は風の前の塵のごとくであるとの仰せに、徹底した深き智慧を含むで居る。智解開覺を中心とし、それに熱情と堅實な意志とを加へた信念から出た、勇猛精進であり、不惜身命で

ある。それゆゑその出處進退にも、常に周到精密なる思慮が、自然に行互つてをられるのである。

聖人が鎌倉へお出でになつたのは、其處が政治宗教の實勢力の中心であるから、此で折伏逆化の大師子吼を爲されやうが爲めであつた。然るにはじめは松葉ヶ谷の天台僧、法華經の持者、一種の隱遁者、修行者のやうに見える位、何等の活動をせられず、成辨律師が來つて、その行化を助け奉らうとするに及むで、律師に萬一の後の格護を授け、それが畢ると、猛然として單軀、衆迷の中に毒鼓を鳴らされたのである。たゞの熱狂的殉教家であれば、後繼のことなどは考へないで、すぐにバツ／＼とやり出すであらう。かやうにいふと、それでは聖人の信念が弱いのではないか、眞に聖人の覺りが佛の本懷なり正法ならば、きつと諸天の助けがあつて、法敵の手に奪れるやうなことはないまい筈だ。すれば「匡人それ我を如何せん」の自信で、一人でもやれるではないか、日昭尊者が來てからなどといふことは、後世の附托説でないかなどいふ考の人があるかも知れない。ところがそんな風なのは聖人の一家のやり口とは違ふ。聖人はすべて空想に確實性を許されない。思想觀念は、それが事實化して來た時に、はじめて確實性を認められるのが聖人のすべてに互りての考察法である。道理と文證との外に現證を加へられ、而も道理すなはち思惟……言ひ換れば、凡夫理性の働きも必要であるが、それよりも文證すなはち佛の經文……言ひ換ればそれは佛の思惟理性の果實、大覺の發現であるから、凡夫の思惟よりもより多く確實とする。文證は確ではあるが、それよ

りも現證すなはち現前の事實……言ひ換れば世間の實相、つまり大覺者は、その實相を究められたのだから、大覺の發現たる佛の思惟の果實も、事實に如はねば果のない華である。事實が佛の豫言のとほり經文のとほりになればこそ、佛を實相通達者とする。それゆゑに道理、文證、現證の三つにも具備せねばならないが、道理よりも文證、文證よりも現證と、累次にその確實性を増し、三つが究竟するに至りて、はじめて之を眞實の實相なりとせられるのである。

聖人が叡山で覺られた「現在の日本國の亂れは、佛法の亂れに起り、佛法の亂れは、法華經を忘れたるに依る」との事は、すでに三證具はつて居ても「末法の現在を救ふべき法は、上行菩薩に附屬せられた法華經本門の法で、その弘通は折伏逆化でなければならぬ」といふことは、單に聖人が道理と文證とによつて推究せられたに止まりて、聖人みづから上行菩薩だといふ現證はない。言ひかへれば、道理と、道理で推した文證だけでは、上行菩薩の自覺ともいふべきものは持つて居られなくても、それはまだ思想の分際で、確實性がない。その確實性のないのに、おれは上行の自信自覺を持つて居るから、どんな場合でも天が護る。護らねばならぬ！といふやうな、そんな考へは聖人の許されない所である。最初の聖人の誓ひは、「天モ捨テタマヘ、諸難ニモ遭ヘ、身命ヲ期トセン」である。さア天が護るか護らぬかわからぬ。とすると萬一の場合を考へねばならぬ。自分の覺りを書き残して置くか、後繼の人を得るかせねばならぬ。聖人は成辨律師を得て、後繼の安心を得て後、御自

身の開覺のままに辻説法の逆化を始められたのである。すると御自覺のまゝに、聖人の周囲が經文の通りに現實化して來たから、そこで其の自覺が漸次三證具備の確實なものとなつて來て、『匡人それ我を若何んせん』と同じやうな、我はこれ道そのものなりとの御自尊ともなる。聖人でも孔子でもはじめからそんな考へだつたら、一種の誇大妄想狂に過ぎない。最初の聖人は、眞劍にやはり身命を何時捨てるかも知れない。師子尊者、提婆菩薩の例に、何時遭ふかわからぬといふ御格護であられたに相違ない。すると當然、無謀なる暴虎憑河はなされにくい。後繼を待つことも必要となる。若し成辨律師が來なければ、別に何かの方法をお取りになつて居たに相違ない。

辻説法は、どんなに危険でも、聖人の自覺の中の、末法謗法の世には、必然的にせねばならぬ弘通法であり經文の不輕菩薩の行化に倣ひ、勸持品の『聚落城邑の中』の文等によつて、佛の豫言と御自身の自覺をお試みにならねばならぬのだから、身命を期として敢然これをせられた。

けれども又、はじめから清澄山でやられたやうな四個格言はいはれなかつた。先づ念佛宗を打撃し、次ぎに禪宗を御破折になつた。これなども實に御用意の周到なるものである。それは當時の鎌倉で、實際に宗教的に生きて居る宗教は、やはり念佛と禪であつた。天台、眞言は、たゞ祈禱宗教である。現世の災を攘ひ福を招き、所願成就を祈る外に何ものもない。一念三千觀も、五輪觀も、月輪觀も、或る一部の極めて少數なる僧侶のみの外は、之を行するものはなかつた。實は天台眞言の

僧侶でも、多くは念佛をして居たのである。だから念佛と禪との破折は、數の上からも鎌倉の僧侶一般の、大部分の折伏となる。それだからはじめは、専ら此の二つに攻撃の箭を集められた。是が第一の理由。それから又、聖人は叡山天台宗の學僧であつた。叡山には止觀遮那の二業、即ち法華と眞言とを併せ傳へるのであるから、山門僧として眞言を破折すると、山門僧たる立脚地が失はれ、全くの新義を主張するといふことになつて、聖人の社會的地位が不利益になられる。それは當時、山門の勢力は朝廷を動かしたのみでなく、幕府(幕府は三井を歸依しては居たが)に對しても、相當の勢力を持つて居る。随つて山門僧として弘通して居る時は、山門の勢力の背景があつて、幕府も一般民衆も、迂濶なことや、餘りにひどい事は出來ない。それから山門僧が、法然上人の念佛や、達磨の禪宗を排斥して謗法と呵責することは、聖人弘通の前約二十年位までは、よく屢々あつたことである。たゞ聖人のごとくその破折が徹底しないと、たゞ朝廷に停止を訴へる位で、直ちに一般僧俗を前にし、街路で之を折伏し、質疑難問、いくらでも受けるといふやうな離れ業を爲し得なかつただけである。だから山門僧としてなされた聖人の念佛禪宗の折伏は、必らず當時鎌倉の評判になつたらう。『どうです。モ一叡山でも、専修念佛と禪宗との事が瞭つたらうと思つたのに、あの小町の日蓮房の辻説法は！念佛無間、禪天魔だと悪口する相ですよ。まだ齡は若い相だが随分と時代後れな人間ですね。それでも道隆禪師や、然阿聖人や、道阿聖人が居なさる所へ來て、御一門の信仰せられる念佛禪を

誤るといふのは、よほどの大膽ものだし、學問には覺えのあるものと見えますね」などと、噂に聞いたものは、定めて言つて居たらうが、さてまのあたり聞くと、ひし／＼急處にあたるから、怨嫉の情、憤怒の念がむら／＼と出て来て、罵詈、嘲笑、瓦石、となる。けれどもその山門僧といふ爲に、容易に刀杖殺傷など出来ない。罪のない山僧を迂濶に殺してもすれば、どんなに幕府の迷惑になるかわからない。清澄や小松原では、刀杖の難がすぐあらうとしたのに、幕府直轄の鎌倉では、焼打までは、御身に瓦礫の傷はあつても、刀劍の難がお有りでなかつたのは、おそらく山門の學僧といふ背景が、大なる庇護となつて居たに相違ないとおもはれる。これが第二の理由。それから第三には、聖人みづから仰せあつたやうに、眞言宗の法門は、深く佛法の研究をしたものでなければ瞭らない。況して其の謗法の所以は、根が深く浅智では顯はし難い。古來、誰も手を附たものはない。傳教は法華眞言の勝劣を糾しく分けなかつた。弘法は法華は三重の劣といひ、慈覺智證は大日經は法華經に對して理同事勝などいつた。それ以來四百餘年、法華經は顯教の中の勝れたる經だが、密教の大日經等には及ばぬとは、不動の輿論となつて了つて居る。傳教、慈覺、智證を同じく祖師とする山門僧では、之に對し時に學說的異義は挟み得ても、宗教的に破折することは出来ぬ。此の破折は、自から山門僧の位置を脱し、少くも傳教と雁行し、慈覺、智證を眼下に見得る、何等かの靈的資格があらはれてからでなければ、其の語に力がない。念佛禪のごとく、破折者の先例のあるのは

が違ふ。大體は以上の三理由によりて、まづ念佛禪を折伏して、眞言を後進しにせられたのである。從來これを養利啖鈍といつて、眞言の利虫を養ひて、念佛と禪の鈍虫を啖はしめ、さてのち利虫の眞言を破折せられたといつて居るが、いまだ眞相を得たものとは思へないのである。

つぎには又、「立正安國論」の進獻の如きも、聖人の豫言的直覺は、正嘉の大地震の時である。それ以前から、念佛宗と禪宗とは是れ謗法亡國の宗なりと斷言し、破折して居られたのだから、禪念の停止は早くから幕府へ進言せられてもよい筈である。然るに早くそれをせられなかつたのは、おそらくは一つは、御自身の社會的勢力位置の或る點までの形をなすまでと、今一つは何等かの進言の機會とを待たれたものと思はれる。さきに御事蹟の處に引いた「唱法華題目鈔」にも明なるが如く、聖人の建長六年からの叫びが、同七八年から後になつては、念佛者をして、諸行往生を許さねばならぬほどに變説せしめ、從來の富木、太田、曾谷の外、四條、池上、荏原、進士、平賀、波木井などの名門忠武の士が、檀越となるほどになつて來た。加ふるに内には著述も出來、御弟子も、同志者も増して來て、康元の頃には既に隱然たる社會的一勢力となられて來たのである。仍で次ぎに直諫進言の機會を待たれた。そこへ正嘉の大地震は、聖人の感應直覺の豫言的感觸を煽つた。けれども直ちに之を發表することはせられない。まづ大藏に入つて一切經中、その直覺と背馳する經説の有る無しを研められた。つぎには破折當面の謗法宗たる、專修念佛に對する教學的批判として、

「守護國家論」と、先規法令の蒐集たる「念佛追罰五篇」を著はされ、又次ぎに「災難對治鈔」で、此等の災難は念佛等の謗法に依るに非じとの疑問に對する會通解明をせられ、「唱法華題目鈔」で、念佛に代るべき、眞實易行たり眞實佛教たる法華經の本尊修行信念を明確にし、さて後はじめて「立正安國論」の上書になつた。かゝる思慮周密な豫言の發表、謗法禁斷の獻言は、日本に例のなかつた許りでなく、おそらく世界のいはゆる豫言者にも、類の稀れなものである。直覺したらずぐそれを絶對の眞理のごとく、大聲呼號するやうなものは、もつとも低級のもので、アラビヤやペルシヤの豫言者は、直ちに自ら教を立て、神祕的交通をして居るが、ヘブライなどの多くの豫言者は、聖人の爲されたのおなじく、時の聖權たる經典を引いて、現前の民衆の背馳、即ち社會の腐敗と、天地の變災、内訌外患等を擧げ示して痛撃する。けれども聖人のごとくそれが用意周到に組織的に發表せられて行つたらうか。日本は聖人の如き唯一の豫言者を持つたことを感謝せねばなるまい。

また伊豆流罪の時の著なる、「教機時國鈔」と、「上行菩薩結要口傳」(年代に異論はあるが)の鈔註とを見る。どうしても聖人には、上行菩薩が末法の初めの五百歳に出で、法華經本門の秘法、題目象徴の宗教を建設する筈であるとの信念が、修學二十年の結果、ことに叡山で三大部に専心親まれた最後證得として、確立して居たことを疑へない。それは此の證得がなければ、清澄の四大格言と、題目宗の創建が出来ないからである。然るに此の自信自覺を、ふかく内心に秘めて容易に之を口に筆にせ

ず、單に「天台沙門」佛敎大師門人「法華經の持者」と聲明し、いよ／＼「立正安國論」の進言に至つて、單に私見を民間に流布する野に叫ぶ豫言者でなく、公然たる國家全體に對する豫言者としての位置を獲得せられ、それに囚れる社會的集團的迫害としての松葉ヶ谷燒打。國家的權力的迫害としての伊豆流罪の擯出拘禁。この二つを経て後、はじめて法華經の勸持品に、末法法華經の行者が受くべしと豫言せられたる事實を、一分確かに身に實踐せりとして、自ら公然「法華經の行者」と名乗り、上行菩薩が弘通すべしと聖典に豫言せる宗教の五義を發表し、且つ上行菩薩結要付屬の法門を注し、窃に之を暗示せられたといふことは、是れまた思慮周到なる、活動的、發展的、向上的の人格、現實的に、實驗的に、秩序的に、新生命を躍動し創造して行く特殊なる人格とせねばならぬのである。

それから今一つ附け加へて考ふべきことは、「法門可申鈔」に、自分は決して偽らない、言を飾らないといふ證に、「禪は天魔の所爲であらうと、最明寺入道に向つて申し陳べ、後に勘文を以て之を告げ知らせた」とある文によると、「立正安國論」上書以前、時頼入道に遇はれた機會に、禪天魔の法門を直諫せられた。無論、禪だけでなく念佛無間も仰せられたらうが、それは入道が念佛信者でないから、省筆せられたものかと認められる。禪は天魔の所爲だといふことを、現に禪宗信者たる最明寺入道にさへ、憚りなく直諫したとの御文意だらうから。それはまた後に「立正安國論」を宿谷入道から最明寺に傳達せしめる時の副言として、「禪宗と念佛宗とをお止めあるやうに御申し

副へ下さい。この諫言をお用ひなさらぬならば、此の御一門より謀叛おこり、他國から攻め來られるやうな不祥な災難が、此の上に現はれるでござらう』といはれてあるのにも照應するからである。然るに肝心の「安國論」は、禪宗破折がない。單に念佛禁斷のみである。この相違は何であらう？私にこれも聖人の周密な思慮からでないかとおもふ。それは元來日本國一同の謗法といつたやうに蔓延して居たのは念佛宗で、禪宗ではない——禪宗の蔓延は、足利氏時代である——。これが即ち元兇たる念佛を擧げて、その禁斷を主とせられたわけでそれが第一理由。また念佛に對しては、公認教たる八宗の南都北嶺から、法然上人の存生及び後後に互りて、數々禁斷の訴へが出て、朝廷は之を採用し幕府もその實行を命ぜられて居る。その後には公武ともに念佛者の禁斷を赦免したといふ公然の手續もなく、何時とはなく其の流行を默認して居たのである。それゆゑ之を止めることは政治家として、先規を勵行するといふことになるから、手續上甚だ爲し易いわけなのである——禪宗は念佛ほど普及せられなかつたから、南都北嶺の陳奏も念佛ほどでなく、公武ともに念佛のやうにハツキリした數々の禁斷はなかつたやうだ——。それゆゑまづ爲政上當然爲し易い念佛禁斷を獻言して、禪宗の方の糾明は、論の文に「然ル後念佛禁斷の後ニ、法水ノ淺深ヲ斟酌シ、佛家ノ棟梁ヲ崇重セン」といふ、佛教の淺深勝劣を明めて、一國同歸の宗教を定める時に譲られたのが、第二の理由。それから次に論そのものは、最明寺入道に進められたのである。所がその入道は禪宗信者だ。單に

宗教上の教訓としては、以前對面の時に、禪宗は天魔の所爲と直諫せられたけれども、今の「安國論」は、單なる時頼一個人に對する訓誡諫言でなく、實際の爲政者としての根本主腦へ、國家の宗教改革を促がすのである——當時は政教兩權ともに最後は國家にあつたことを忘れてはならぬ——。すると其の實際の權力者主腦者へ、あたまから、爾の信仰しつゝある教そのものが悪い！一切災禍の根源だ!! 捨て、置くと謀叛と外寇があり死んで地獄に墮つるぞ!!! と文書を以て痛撃する、といふことは、痛快は痛快だけれども、其の進言を受けた爲政者としてはどうだらう？一國の宗教改革を促がす公然の進言書とすれば、愈よ主腦者にそれを採用しやうといふ意志がある場合、それぞれ他の當路者にも見せねばなるまい。假令主腦者が聰明で公平であつたとしても、其の時の氣量の悪るさ、威權を損ぜられることは夥しい。爲政者、支配者の心理上、これは到底も堪へ得にくい事である！私會見では遠慮なく之を直言し、公然の時は其れを婉曲に回避して他の首惡を彈劾する。韓非子の「說難」を聖人の心で行ふゆき方!! 支配者心理の洞見!!! 聖人はおそらく其處をも考へられたらう。それに上記の二理由もある。デ「安國論」の文上には、禪宗禁斷が書かれて居ない。これが第三の理由——けれども最明寺入道が、何んだ、日蓮はかつての時、念佛は無間、禪宗は天魔といつたのに、これでは念佛宗だけが謗法で、三災七難の基なのかと思ひ違ひ、前後相違などと思つてはならぬ。そこで宿谷入道へ副へ言して、此には念佛宗だけと書き申したが、決して念佛許り

ではござらぬぞ、同一理由によつて、禪宗も謗法天魔の所爲でござる。禪宗と念佛宗とをお禁めなさねば三災七難は現前でござらうぞと止めを押ししておかれたものとおもはれる。でなければ「安國論」の現文と、「法門可申鈔」と、「撰時鈔」その他の諸文との會通がつかない。思慮周密の人格でなくて、どうして斯うまで理義明白な分別がつかうか。最明寺が後に聖人に或る種の好意を持ちはじめたのは、こんな風なことに考へ及んだともその動機の一ではなからうか。私は實にこれ等を拜して肅然たる心持になるものである。これを私會見の時には、柔かにお茶を濁し、退いて公然と打撃し、自己賣名の術とするなど往々あるのと較べて、慈悲から出た聖人の諫言と、復讐や自家廣告から出た凡夫の彈劾との相違の、いかに大なるものなるかを知ることができるのである。

(三) 感應直觀の豫言的人格

聖人が感應直觀の豫言的人格であつたことは、正嘉の大地震に對して、他國侵逼難、自界叛逆難の豫感をお受けになつたその事で、既に證明出来るのであるが、その人格的素質は、決して此にはじまつたのではない、元とく豫言的人格とは、天地の現象、世態人情、義理恩愛のすべてについて、深く強い感應力を持ち、單にそれ等に感激し感動するばかりでなく、人間と宇宙及びその現象とを通じての一貫した尊崇中樞を持つて居る、あるひは持たうとする、敬虔なる道德的宗教的人格

である。そして天地人事の現象に感動すると、その感動がすぐ彼の尊崇中樞に觸れて、そこに反射的に一種の直觀が應現する。言ひ換へれば、豫言的人格とは、天地人事の變異現象に、鋭く激しく感動し、現在の變異の原因、及び未來の禍福に對する直觀洞見を、俊敏に應現する精神的磁力電力に富むた、超異的特質である。

聖人が生れながら此の特質に優かでありになつたのは、十二歳の時の御發心に明かである。佛法かくの如く旺であつて、國が斯くも秩序を破壊して居るといふのは、何に因ることだらう。たゞ一人の釋尊に、八宗十宗などといふあまたの宗旨は、どうして存在するものだらう。又佛法繁昌して居ながら、なぜ毎年天變地天、飢饉疫癘等打續くことであらう、(洵に聖人生誕後、此等の不祥で寧歳はなかつた。)といふ三つの疑問、これすでに自然界人事界における變異現象、精神界における變異現象を根本的に訝つたものであつて、その結果、虚空藏菩薩に日本第一の智者となしたまはれと祈られた、その疑問と祈りが、明瞭に此の特質をものがたりつゝある。

また十二歳から三十二歳までの、二十餘年の修學時代も、此の疑問解決が常に主として働いて居た。此の間も、天福一文曆一嘉禎三曆仁一延應一仁治三寛元四寶治二建長七と九の改元がせられて居るが、大抵は天變地天、炎旱、水損、地震等の爲めである。その當然の結果は飢饉、それから疫癘である。聖人がそれに就いて如何なる直觀をお持ちになつて居たらうかといふことは、仁治三年、

二十一歳の「戒體即身成佛義」や、それに引續いた「戒法門」「色心二法鈔」などに、人間の行爲と天地の災禍との關係を説かれた邊に、その萌芽を見ることが出来る。其の後の十餘年は、この聖人の直觀をいよ／＼有力にするに過ぎなかつたものと見ることも出来る。かやうに見る場合は、「立正安國論」は、正嘉元年の大地震を動機として、お書きになつたものではあるが、その之をお書きあるべき聖人の素質は、發心、修學の間にも一貫してほの見えて居る、感應直觀の豫言的人格であつたればこそ、皆人の怪しまなかつた事を、十二歳やそこいらで疑問として虚空藏菩薩に立願し、修學中も常に、自然人事の變異現象に對する根本的解決に一貫するといふことになつたのである。

(四) 深智卓識の思想的性格

ところで豫言的人格などいふものは、多くは神祕的で、學問を度外視するものが往々ある。ところが聖人は、豫言者たると同時に、深智卓識の學者であつたといふことが、またその特質の一つであらねばならぬ。

聖人は博識多聞といつた側の學者でなく、むしろ深く明かに考へる智慧と、卓れて高い識見を有つた學者であられた。その傾向は何れの御書にも見ることが出来るけれども、此の前期鎌倉時代に在つては、「守護國家論」を、その代表として擧げるのが便利である。

此の書は、いふまでもなく、法然上人の「選擇集」の所立によつて、日本上下謗法となり國に不祥多し、殊に正嘉の大地震以來の著しき災禍、その源は此の惡見にありとて、「選擇」の謗法なる所以を論ぜられたものであるが、此の書によつて、聖人の教學的識見が、一世の群を抜いて居たことがわかる。それは本書の開卷劈頭に、同じく「選擇」の破折書たる、三井公胤僧正の「淨土決疑鈔」三卷、山門並榎の定眞(或は)の「彈選擇」一卷、拇尾の明慧高辨上人の「摧邪輪」三卷を以て、いまだ「選擇集」謗法の根源を示さないものとして、學譽隆々たる三學匠を批評して居られる。それは三學匠ともに、法然上人が一代佛教を二大別して、此土入聖(此の娑婆世界にて聖人の位)の聖道門と、往生淨土(極樂等の淨土に往生して聖人の位)の淨土門とする教相判を非認せず、聖道門を難行とし淨土門を易行として、末法の惡機下機は往生淨土の易行を主とすべしとの時機判をも必しも非認せず。此の二つを認容しながら、たゞ法然上人が、諸行往生(唱名念佛以外の大小乘の戒定慧讀誦修善世間道徳)を、阿彌陀佛の本願に非ざる故に、末代の惡機は修行成就し難き故に、往生極樂の決定業となり難し、諸行往生を願ふ者は千人の中に一人も往生し難しとて、當時の諸宗の人々が、自の宗々の修行をしながら、之を回向して極樂往生せむと願へるを、千中無一の徒勞の行なりと否定し、唯専ら口唱の念佛を修せよと勧めた。此の諸行不往生の義を破折したり、或は又法然上人が、菩提心(諸宗にては法門にも之を根本の必要とす)を不必要なりとし、自ら菩提心なくとも、彌陀の本願を信賴する心のみ



あれば、往生疑ひなしと立てたるを、師子身中の蟲、佛法の大賊、惡魔外道なりと諸經論釋を引いて破折したりしたのである。然るに西方極樂の彌陀の超越的實在を認め、その四十八願を認め、往生極樂を易行の法と認め、末法惡機に相應せる法と認むる時は、十念口稱の念佛こそ、大悲立願の中心本領、易行の中の最易行、末法下劣の惡機適應の法であらねばならぬ。諸行や菩提心は、末法劣惡の機に對しては、これ機教相應せぬ不成就の法であり、之を修行する機は、彌陀の大悲本願を蔑視して、自ら諸行を修するに堪ふ、自ら菩提心ありと慢する、自力我執の機であると斷すべき徹底義も生じて來るのである。即ち法然上人のは、淨土三部經、ことに「大無量壽經」の四十八願の教義を徹底して建立した新教義である。之に對して三學匠のは、四十八願の教義の末法相應を認容しながら、諸經の教義と妥協せしめて不徹底的に取扱ひ、そして法然上人の徹底を、是れ甚しい行き過ぎの誤謬なりと破して居るのであつて、之を例すると、通途の天台學者が、諸經無得道法華獨一成佛を主張する我が日蓮聖人の教義を、行き過ぎだといふのとよく似て居るのである。法然上人は「淨土三部經」の教義を徹底して一代佛經を解釋し盡した人。我が日蓮聖人は「法華經三部十卷」の教義を徹底して、一代佛經を解釋し盡した人なのである。「等しき人のみ等しき人を解す」。法華經の徹底解釋者としての聖人は、淨土三部經の徹底解釋書としての「選擇集」をば、「謗法の書なり」と斷じ、三學匠の不徹底的の破折をば、

恐クバ未ダ選擇集謗法ノ根源ヲ顯サズ。故ニ還テ惡法ノ流布ヲ増ス。譬ヘバ、盛ナル旱魃ノ時ニ、小雨ヲ降セバ、艸木彌ヨ枯レ、兵者ヲ打ツ刻ニ、弱キ兵ヲ先キニスレバ、強敵倍ス力ヲ得ルガ如シ。と評破せられたのである。

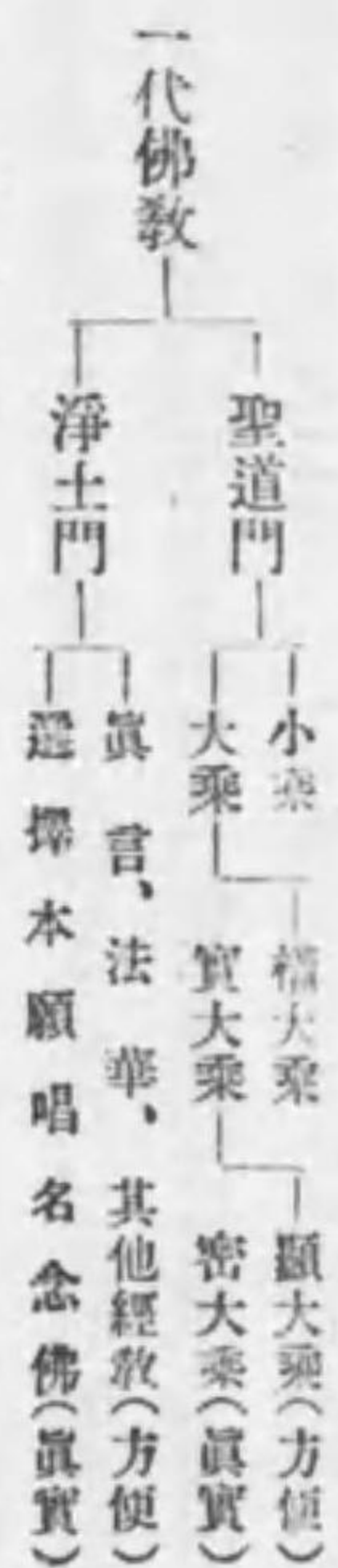
さらば聖人は果していかなる點から、「選擇集」を謗法の書なりと破せられたか？

「選擇集」一卷十六段の所詮は、釋尊一代所説の佛經を、聖道難行の法門と、淨土易行の法門とに分つを以て、淨土宗の「教判」(教相判釋のこと)とし、淨土易行の教義に於ては、「大無量壽經」の阿彌陀佛の四十八願の中の第十八なる念佛往生の願をば、彌陀の眞實本懷、隨自意の本願(他の意志に隨へる眞實の本願)報身如來の智慧慈悲を圓滿に具足せる無上の教法と定めて、淨土宗の「宗旨」とし、三心(至誠心、深心、回向發願心)具足の信念を淨土宗の「信心」とし、口稱の念佛を往生極樂の正業とし、三部經の讀誦、彌陀の禮拜と供養讚歎、彌陀極樂の觀察の四種の行を助業とし、此の正助二業を五種正行とて、淨土宗の「修行」とし、念佛の衆生は必らず極樂に生れて、不退轉の菩薩(正定)の位に入ると決定せる心を、淨土宗の「安心」とし、五種正行以外の佛經の讀誦、他の佛菩薩や佛國の禮拜、讚歎、觀察、又は戒定慧等の一切の修行を以て極樂往生に回向せむとするは、みなこれ千人中一人も往生する能はざる雜行で、時を失ひ機を逸せる無益の法だとした。(此故に佛像もてテダを摺り讀經は管絃に劣るなど云ふ)

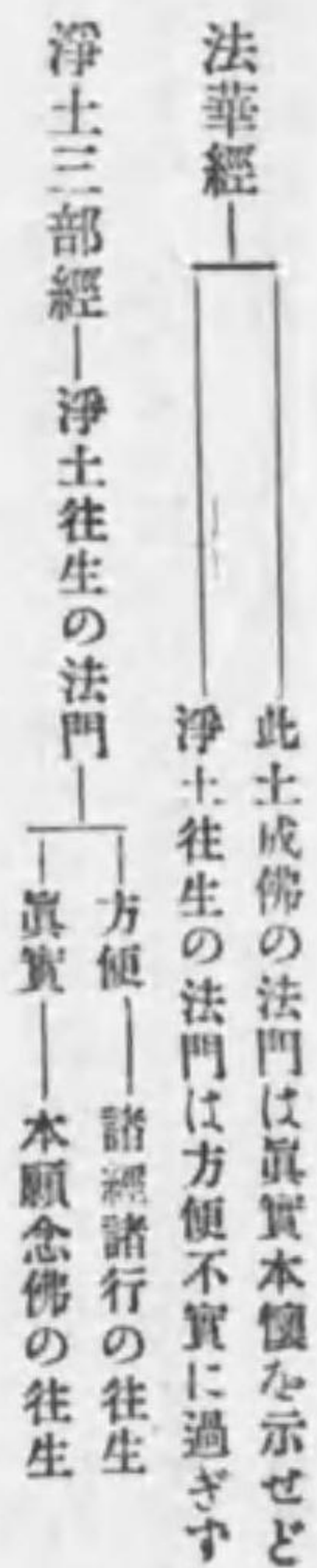
そこで聖人は、「宗旨」「信心」「修行」「安心」の依つて立つ根本たる、「選擇集」に明す淨土宗の「教

判」そのものを倒壊し、此の誤謬の教判の基礎に建設した「宗旨」乃至「安心」によつて、法華經等を排斥するは是れ謗法なりと斷ぜられるのである。

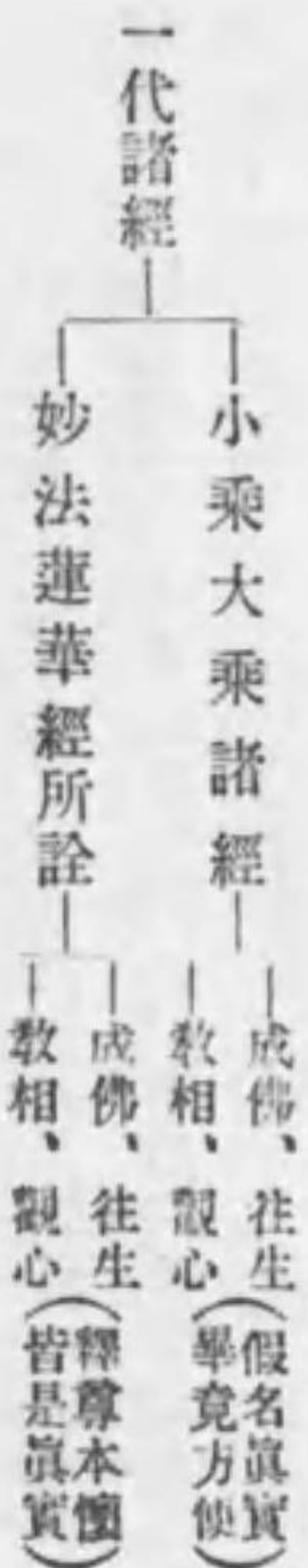
故に「國家論」の第一門に、釋迦如來の經教には、方便と眞實との二教の別ありとは、是れ一代佛教の教主たる釋尊自らが、その最後說法の「法華經」における判定であつて、又方便から漸次眞實を顯したまふ所以をも、その順序次第をも明了に説き示されてある。此の外には如何なる經教にも、釋尊みづから一代經教の判釋をせられたことはない。諸宗の判釋は、佛の滅後に印度の論師支那日本の人師が、各みづから悟る所に因つて爲した判釋である。いかなる論師人師も、釋尊の前には迷者たるに過ぎぬ。その悟れる所も一局部に過ぎない。論師人師の判釋は、それが一切經の説主たる釋尊みづからの明白なる判釋に抵觸せざる場合に於てのみ用ふべく、若し抵觸する時は、その判釋を捨つべきである。「淨土三部經」は一代五時の中では方等部(五時とは、華嚴、阿含、法華涅槃)の方便の經で、「法華經」は眞實の經である。その方便の經によりて聖道淨土の二門を立て、法華經は聖道門此土成佛の法門では眞實だか、往生極樂の法門では方便に過ぎぬ。淨土門の眞實とは、彌陀佛の名號であるといふことは、聖道淨土の二門といふ部分的の法門分類を以て、方便眞實といふ全體の經教分類を律したる謬れる教判である。執權謗法の謗法である。何となれば、成佛、往生といふことは、諸大乘經に明せる一つの得益の相統の相違に過ぎないが、方便眞實といふことは、それ等の種々法門(得益の相統たる佛と往生・修行法)を含める經教の全體の上に下されたる佛の宣言であるからである。即ち法然上人の所立では、



となる。此の結果、



である、故に此の所立は、釋尊、多寶、十方諸佛が、同じく「妙法華經皆是眞實」と定め、「正直捨方便但說無上道」と明し、「不受餘經一偈」と誡められたる、法華經の中の往生の法門を、方便と斷ずる謗法の義立である。何となれば佛は、



と定められたからであるとの意で、法然上人の判教の根本を非認せられた。これ三學匠の識見とま
 るで相違して居る處で、次に第二門に、道綽、善導、慈恩、等の唐土の人師が、「大無量壽經」の、
 『當來ノ世、經道滅盡セン、我レ慈悲哀愍ヲ以テ、特ニ此ノ經ヲ留メテ、止住セシムルコト百歳ナラ
 ン』の文によりて、彌陀念佛の法門は、末法萬年、餘經悉く消滅したる後までも、彌陀教獨り百年
 切めらるゝとあれば、念佛の法門は今ノ末法に正しく行はるべき法、諸經は消滅し行く法なれば、宜
 しく廣く念佛眞實の義を勸むべしと釋せるは誤である。『經道滅盡』の經語は「大集經」の第五の五百
 歳「白法隱沒」の經語と義おなじ、諸の小大乘經はおなじく方便の經なれば、正像二千年にして利益
 消滅すべきもの。此の末法第五の五百歳は、始めて法華經の弘まるべき時である。經に「於末法中」
 『惡世末法中』如來滅後後五百歳』等とあるのは是れである。眞實の經の明文を隠して、法華經は末
 法に利益なしと謗り、方便の經の不確實なる文によりて、念佛は末法に得益といふ。これ顛倒妄見の
 甚しきものなりとて、『念佛往生は時を得たり』の義を根本的に打撃せられ、第三門に、斯の如き聖
 道淨土の二門の判教は、源と曇鸞が「往生論註」の引文に、龍樹菩薩の「十住毘婆沙論」に、菩薩が不退
 轉の位を得るの途に二あり。一に難行道、これは自ら菩薩行を修むる此土入聖の法門、二に易行道、
 これは佛の願力に乗じて淨土に入る往生淨土の法門なりとあるに基き、難行道、易行道を立て、道
 綽は「安樂集」を著し、此の難易二行を聖道門、淨土門に分つた。しかるに此の龍樹が、難行易行

行を立て、自力聖道、他力淨土と分つたのは、法華經以前の方便經の當分において立てたる所の法
 門で、法華經を含まず、論の文に二乗作佛を許さざるによりて明である。法華經は此の「毘婆沙論」
 の所判と異り、其の淨土往生の法門が易行たるのみでなく此土入聖の法門も、難道でなく易行であ
 る。自力と他力との對立でなく三力(信力、佛力、法力)一體の妙力である。されば道綽の「安樂集」にも、聖
 道門を難行無益と定むる時、歷劫修行の意をもて之を「證し難し」と斥ふ。是は權大乘の法門を聖道
 難行と立てたことになる。即ち論の文の如く法華以前において聖道淨土を立てた義である。然るに
 法然上人は「選擇集」に、『今此ノ集ノ意ノ聖道門難證トハ、顯大(眞言)及ビ權大(法華)ヲ存ス。故
 ニ歷劫迂回ノ行ニ當ル。之ニ準ジテ之ヲ思ハハ、應ニ密大(眞言)及ビ實大(法華)ヲ(聖道門難證ノ中ニ)
 存スベシ』とて、「毘婆沙論」及び「安樂集」の斥はざる速疾成佛の法華經をも聖道難行の中へ入れた。
 つまり此の「準之思之」の四字が、謗法の根元であると破せられ、一代全體を判じた佛の經の權實二
 教の義を、法華經以前をのみ判じた菩薩の論の難行易行によつて、破壊するのは、甚しい根本的謬見
 の謗法だと斷ぜられた。以下なほ四大門あつて卓異な種々の論明をせられてあるが、法然上人の判
 教の根本は以上で打ち破られたのである。(もつとも「準之思之」は實は法然上人としては卓見なの
 で、法華、眞言は歷劫迂回でない、速疾成佛、即身成佛の法門であるが、實際上に今の末法では證
 り得られない。證れないとなると歷劫修行とおなじ結果になるから、やはり聖道難行である。但し

それは教の罪でない。教は眞實なのだが我等の機が堪へないから、淨土三部經の易行に依ると立てたのである。日蓮聖人からいへば、それならばなぜ眞實本懷の法華經の易行に依らないか、末法得益の文が歴々とあるのだから、執れにか末法の易行が、此の眞實の經に明されてないかしらと研めない。なぜ眞實の經の明文を顧みないで、方便の經に走り、却て眞實經を排した？ 畢竟して釋迦佛を信することの篤からざるものであるといふことになる。これ實に當時念佛破斥の諸學匠が、夢にもおもはなかつた論明で、佛教學上における聖人の深智卓識を證するものである。

(五) 温情慈愛の同化的人格

聖人の折伏が激烈なる故に、勇猛果敢な方とのみおもひ、或は自高我慢な人などとおもつては大變な誤である。聖人は一面實に温情慈愛の同化的人格であつた。

それが明に顯れて居るのは、かの「船守彌三郎殿御書」の御詞である。一介の漁夫夫婦にむかつて、彼の執權の面前でも、「あなたの信ぜらるゝ禪宗は天魔の所爲でござる」と、顔色もかへず直言するほどの人が、「洗足、手水」の些細の事の親切まで感謝し、「日蓮が父母の伊豆の伊東、川奈といふ處に生れて憐んで呉れるのか」とまでにはれる。そのお詞は何處から出たものであらう。自ら持するところの高いものは、他人が相當の禮儀、親切、保護、尊敬をしても、あたりまへだといふ

風のところのあるものである。然るに聖人の彼の御書には、そんな處が棄にたくもない。なぜこれほどにいはいはるゝかと思はるゝばかりである。「五月の頃なれば米も乏しかるらん」とは何といふ御同情の深いことだらう。物持ちの何千何萬より、貧しき者の數圓十數圓が、どれほどの苦しみから出て居るかも知れない。ことに海中出現の釋尊感得の功德を夫婦にゆづり、第一番に即身成佛の法門を授けられたなど、その慈愛同情のどこまで深いかを測れないほどである。

ナニそれは命を助けられたからだといふ人があるかも知れない。それでは伊東の地頭はどうだ。彼は聖人の反對者怨嫉者であつた。それが難病で困つて死にかけて居る。あわくつて祈禱を願ひに來た。謗法者の爲めには、(總じて一切衆生の爲の祈りの中には漏らさないが、) 特別それが爲めの祈りは出來ないことになつて居る。それで一度は斷られた。然るに今や地頭はいよゝ命絶ゆるばかりである。重ねて請うた時。「一分信仰を日蓮にもたれて居るのだから」とて、その迫害怨嫉した地頭を救ひに出かけられた。そして現に息の絶えたのを蘇生せしめられた。

また日朗師の流罪地までもと慕ふのも、日興師が岩本から出て來るのも、たゞ高い識見や深い學問や、不惜身命の行者といふだけではなく、全く人間味の優かな慈愛温情があまりになつた自然の結果である。但し聖人が義を正し理を拆かれる時は、嚴烈無比である。この深意を知らぬものが、門下の内でも怨嫉者となるものも後にはあつた。けれどもその嚴烈は、聖人の温情慈愛の淺い爲で

なく、それが徹底して深く、眞に彼を同化せしむべくどこまでも願はれて居たからである。

(六) 感謝報恩の内省的人格

随分と卓れた人格でも、往々に内省は易いものである。況して聖人の如き、總てが積極的に、發動的になつて行く人格は、尙更の事だ。ところが聖人くらゐ内省にすぐれた人格はまた類稀れといふべきである。

「四恩鈔」はその内省の記録である。供養し又は迫害して法華經を行ぜしむる衆生に感謝し、生みて法華經の行者とならしめし父母に感謝し、法華經の修行者を怨嫉し流罪し、以て末法の法華經の行者の豫證にかなはせし國主に感謝し、法華經を説き給ひし釋尊(寶佛)成佛の要法たる法華經(寶法)法華經を順逆二面から末法に傳へし諸師(寶僧)の三寶に感謝し、其の報恩に身命を供養せんと誓ひ、また法華經を用ひず、我が弘通の法に背いて、罵詈し迫害し擯出する諸人は、我をして法華經の行者たらしめると同時に、謗法の罪によりて永く無間地獄に墮ち、久しくして復我が教化に歸すべきも、我が爲めに墮獄の因を激發する悲歎かぎりなしと、我が身に内省して、謗法の衆生の罪惡のみならず、その苦報をも攝受せられる。天地法界たゞ是れ感謝報恩の絶待的の偉大なる内省内觀、これ聖人の始終一貫せる宗教家としての最も深刻なる御人格である。王者の無外なるがごとく、此の點に

おいては、聖人の眞の怨敵は、法界の中に何も無い。ことごとく菩薩行の贊同者共鳴者なのである。阿彌陀佛の無外の慈悲は、經典の昔話である、また他の國の佛のことである。聖人のこの徹底せる絶大の慈悲は、まさに人間歴史上のこと。此の國の事である。末法萬年の一切衆生、一人として此の聖人の感謝報恩の内觀誓願から漏れることは出来ない。嗚呼末法の救主日蓮大聖人。

(七) 上行自覺の信念的人格

聖人の不惜身命も、思慮周密も、感應直觀も、深智卓識も、温情慈愛も、感謝報恩も、ことごとくみな法華經に集中し、大聖釋尊に集中して居らるゝ。若し聖人から法華經と釋尊とを試みに取り去つたならば、聖人の一切の人格的根據は、全くその依據を失つてしまふ。いかにして聖人は、しかく釋尊と法華經とに傾倒せられて居るのか。

それだ！それが聖人の聖人たる所以で、釋尊と法華經との外に、いかなる佛にも經にも關しない。それ等の佛や經教は悉く釋尊と法華經の方便派生と見て居られる。

それは聖人の識見學問ではない。三十二歳の開覺から後は、これ聖人の一生を通じての不動の信念であつた。爾り！金剛不壞の信念であつた。それは即ち上行菩薩の自覺である。

一切經の文によれば、地涌の上行菩薩といふ菩薩は、法華經の外には孰れの經にも出て來ない、

法華經でも本門でなければ出て来ない、随つて一切諸佛の浄土へは、本資格としては少しも往来したことがない。随つて諸佛を崇める機会もない。全くの法華經本門専門の菩薩、本佛釋尊専門の菩薩である。聖人の一生の行動は、常に此の自覺に根ざして居る。勿論此の自覺を得るまでの根本は、その感應直觀の豫言的人格にある。が一び叡山から下りて後の聖人の一切の淵源は、實に此の信念にあつたものとせねば、どうしても解釋し切れないのである。但しその自覺がまだ聖人の自心に於いての覺りのみで、事實の如何が残されて居たことは、「我れはこれ上行の化現なり」と敢ていひ得たまはざりし所以である。

詮する所、聖人の人格は、外面においては「不惜身命の法華經の行者」、内觀においては「本化上の自覺の信念」、その人間的資質としては「感應直觀の豫言的人格」であつたのである。

(三) その教義面

前期鎌倉時代、伊豆時代を教義の側から見る時は、「天台沙門より末法の法華經の行者まで」——術語でいへば「外用相承より内證相承の塔外付屬まで」——といふ一句で盡すことができる。

言ひ換れば、鎌倉弘通の當初には、みづから「天台沙門」とも、「根本大師門人」とも、「傳教大師門人」とも名乗つて居られたのが、伊豆流罪の後には、「四恩鈔」において、

此ノ身ニ學文ツカマリシ事、ヤウヤクニ十四五年(十六歳から)ニマカリナル也。法華經ヲ殊ニ信ジマイラセ候ヒシ事ハ、僅ニ此ノ六七年(建長康元の秋木五石と天變地妖より數へらる)ヨリコノカタ也。又信ジテ候ヒシカドモ、懈怠ノ身(特に謙辭を)用ひたまふタル上、或ハ學文トイヒ、或ハ世間ノ事ニサエラレテ、一日ニワヅカニ一巻一品題目計リ也。去年ノ五月十二日ヨリ、今年正月十六日ニ至ルマデ、二百四十餘日ノ程ハ、晝夜十二時ニ法華經ヲ修行シ奉ルト存ジ候。其ノ故ハ、法華經ノ故ニカ、ル身トナリテ候ヘバ。行住坐臥ニ法華經ヲ讀ミ行ズルニテコソ候ヘ。人間ニ生ヲ受ケテ、是程ノ悦ハ何事カ候フベキ。凡夫ノ習ヒ、我トハゲミテ菩提心ヲ起シ、後生ヲ願フトイヘドモ、自ラ思ヒ出シ十二時ノ間ニ、一時二時コソハハゲミ候ヘ。是ハ思ヒ出サヌニモ御經ヲヨミ、讀マザルニモ法華經ヲ行ズルニテ候カ。無量劫ノ間、六道四生ヲ輪廻シ候ヒケルニハ、或ハ謀叛ヲオコシ、強盜夜打等ノ罪ニテコソ、國主ヨリ禁ヲモ蒙リ、流罪死罪ニモ行ハレ候ラメ。是ハ法華經ヲ弘ムルカト思フ心ノ強盛ナリシニ依テ、惡業ノ衆生ニ讒言セラレテ、カ、ル身ニナリテ候ヘバ、定メテ後生ノ勤メニハナリナント覺エ候。是程ノ心ナラヌ(聽と讀み書き等)晝夜十二時ノ法華經ノ持經者ハ、末代ニハ有リガタクコソ候ラメ。

と。身讀を以て、天台の讀誦(口)觀念(意)に對し、是は思ひ出さず讀まざるにも法華經を行するものであると、法華經の行者の義を説かれて居ながら、なほ自から行者といはず、「晝夜十二時の法華經

の持經者』といはれて居る。ところがその翌月「教機時國鈔」を著はされた時は、

法華經ノ勸持品ニ、(佛ノ滅シタマヒシ後ノ) 後ノ五百歳二千餘年ニ當リテ、法華經ノ敵人、三類アルベシト記シ置キタマヘリ。當世ハ後五百歳ニ當レリ。日蓮、佛語ノ實否ヲ勘フルニ、三類ノ敵人之アリ、之ヲ隱サバ法華經ノ行者ニ非ズ。……之ヲ顯サバ法華經ノ行者也。而レドモ必ズ身命ヲ喪ハシ敷。例セバ、師子尊者、提婆菩薩等ノ如シ云云。

とて、自ら後五百歳、末法の法華經の行者なりと公言された。是れ外相に依用して居られた天台傳教の相承から、内觀に證悟して居らるゝ上行自覺の一分たる、宗教の五義を顯はされたから、僅に二十餘日の間に、「法華經の持經者」(これは彼の當)から「法華經の行者」まで轉進せられたのである。これ等によつてもいかに聖人の宗教が、假初にも自ら許さない嚴密さに充ちて居るかを惟ふべきではないか。

そこで此の轉進の解釋を、左の四項に分つてしやうとおもふ。

- 一、法華經說相の梗概——特に其の流通と化導面。
- 二、五逆謗法の機を叩發する折伏逆化の化導。
- 三、天台沙門としての弘通と其の根據——外用相承としての法義の所在。
- 四、末法の法華經行者としての弘通と其の根據——内證相承の一分としての五義法門と塔外付

屬。

(その詳細は、恩師智學先生の「妙宗式目講義録」の名義門に示されて居るからそれで知られたい。)

(一) 法華經の説相の梗概——特に其の流通と化導面

聖人は全く法華經専門の宣傳者、體現者、闡明者、またその活躍せる解説者である。聖人を解するに、法華經を離れて解しやうとするのは、恰もレールを離れて、汽車の方向を議せむとすると同じである。

少し複雑でもあり、本回は餘り長きに過ぎるけれども、前後の講の参考ともなると思ふから、此で一往「法華經」品々の起盡の梗概を談さうとおもふ。

通例「法華經」といふのは、「妙法蓮華經」八卷であるが、聖人の取られたのは、此の外に序分としての「無量義經」結了分としての「觀普賢經」各一卷。合して之を「法華經」十卷と仰せられて居る。釋迦牟尼佛が、十九歳で出家せられ、六年の苦行に眞理を得ることあたはず、樂行六年三十歳の時、伽耶城を去る遠からざる處の、道場菩提樹の下で、無上正等覺を成ぜられて、瞿曇沙門は、能仁寂默と名くる佛陀になられたのである。その菩提樹下を三七日去りたまはざる間に、十方の菩薩や、大乘の根柢の熟した天龍八部衆などの爲めに、「華嚴經」を説いて、菩薩獨自の廣大の法門を明

し、起つて波羅奈に趣いて、五比丘の爲めに四諦の法を説きたまひしを始として、十二年間、「阿含經」に、小乘涅槃の法を開示し、更に四十二歳より後は、諸の大乗經を説き、十方の淨土や、多くの佛、菩薩、その國土などの功德を明して、前の小乘經の阿羅漢、辟支佛、菩薩、佛が、ひとしく但空の消極的滅無の涅槃に住するを彈劾し、つぎに諸の「般若經」に、一切の法はみな摩訶衍大乘なり、小乘、外道の法も、若し大乘の空法門より見れば、摩訶衍の一分なりとの一切空の義を以て、大乘と小乗との掛け橋とせられた。けれども小乗の聲聞、緣覺等の人が、大乘の法を行じて、佛に爲り得べしとは説かなかつた。衆生の機根には、人間の世に満足する人乗の機、天上の樂を求むる天乗の機、六道を離れて涅槃の空に歸する阿羅漢、辟支佛を求めむとする二乗の機、或は一切衆生の苦を抜き樂を與へ、やがて佛にならむと願する菩薩乘の機の別があつて、區々であるから、それ等に相應する三乘(聲聞乘の四諦、緣覺乘の五乘、天乘を加ふ)の法を説かれ、衆生おの／＼之を修行して差別の果報に住したのであつて、差別そのまゝ平等空であるといふのである。

然るに佛、御歳七十二、成道このかた四十二年。大聖の一生も、月の山の端に傾かむとせる頃、摩伽陀國の靈鷲山に、萬二千人の阿羅漢達、八萬人の菩薩方、天龍八部衆にかしづかれつゝ、「無量義經」と名くる經を説かれ、「爾前四十餘年の長い間、華嚴、阿含、方等、般若の經々を説いたが、みな衆生の機根に應はう爲めにした、佛の方便力の説法で、未だ我が眞實本懷の覺りの法を顯はさな

かつた。それだから衆生に各異つた悟りの果報を與へた。がこれ等の經々を無量無邊不可思議阿僧祇劫の間修行しても、畢竟方便の果報を受けるのみで、眞實の佛の大道の果は得られない。詮する所種々に説いた無量の義は、たゞ一つの法から出た」と示され、又この經の十の功德を説かれた。「法華經」の序品第一は此の經を受けて、「無量義經」を説き了つた佛が無量義處三昧と名くる定に遣入られると、天は華の雨を下らし、大地は六種に震動し、衆は驚き怪しみ未曾有心地がして居る時、佛の眉間の白毫から、光りは出で、東の方萬八千の三千界を照らす。その中の六道の衆生の善惡の因果、四聖(聲聞、緣覺、菩薩、佛)の因果を現りに悉く見るやうに示された。彌勒菩薩が怪しむで、此の所因を文殊菩薩に訊ねると、かやうな瑞相は私は昔の夥多の佛に隨つて見た。惟ふに是から妙法蓮華經といふ經を説かれるものだらうと答へたとある。

方便品第二に、佛、三昧から起ち立で、智慧第一の舍利弗に向つて、佛の智慧には、眞理を照らす實智と、衆生の迷妄界を照らす權智とがある。爾前四十餘年の經教は、此の權智によりて説いた方便の教であつた。その方便も二乗や菩薩の知る所でない。況して實智は諸法の實相を究め盡す、是は佛と佛とのみ了る境界だと讚嘆せられた。舍利弗が何故そんなに佛の權實二智をお嘆めになるか、その所以を聞かせて頂きたいと願ふと、佛三び制し、舍利弗が四び請ふた時、それでは今から佛の自から證悟として居る實相の法を説かう。是こそ眞實唯一の佛法である。佛の世に出たのは、

たゞ此の唯一眞實實相の法、佛の知見を得せしめむ爲である。聲聞、緣覺、菩薩の三乗の法ありと
いつたのは方便で、實には此の一大佛乗あるのみである。況して人乘、天乘等を加へた五乘などは、
勿論佛の意志でない。今やそれ等の方便を捨て、實相の法を説く。是の如きは唯我れ釋迦一佛のみ
でなく、總じて佛といふ佛、過去の諸佛、現在の諸佛、未來の諸佛、みな同じく初めに三乘五乘等
の方便を説き、最後に唯一佛乗の妙法蓮華經を説く、一切の阿羅漢も、菩薩も、悉く今日より三乘
を捨て、此の法に歸せよと説かれ、反覆して其の方便を用ひた所以を諭された。

此より後、譬喩、信解、藥艸、授記、化城、五百、人記の八品の間に、理解(説法)と、譬喩(譬説)と、
因緣(因緣説といひ、合せて法)とに互つて、懇々と手をかへ品をかへ、三乘方便、一乘眞實、妙法蓮
華經が唯一の眞實佛乗たることを説かれ、さしも爾前四十餘年の間に、諸の大乗經の中に、菩薩の
み成佛し、聲聞、緣覺は成佛せず、三乗の因果みな異ると説かれた經説を根本から打破られた。之
を「法華經」の述門(この事は後に)正宗の八品といふ。

さて次には法師品。此の品から下は、此の佛の本懷たる法華經の、在世滅後の流通の功德を説か
れたから、迹門の流通分といふ。その中まづ此の品には、佛、藥王菩薩に因せ八萬の菩薩に告ぐ。此
の法華經は、たとへ一偈一句でも其の意を説くを聽いて、歡喜隨順するものは、必定成佛の記を授か
る。一切の菩薩の成佛は皆此の經に屬する。此の經に近づくは成佛に近く、此の經を知らざるは成

佛に遠い、菩薩にして此の經を怪しむものは新發意。羅漢等にして怪しむは増上慢である。佛が已
に説き今説きし當に説かんとする無數の經教の、一切に超過して此の經は佛の第一の説である。此
の經は佛が自から説くすら、なほ増上慢の僧俗、新發意の菩薩は怨みと嫉みを懷く。況して佛の滅
度の後をや。その怨嫉多きは知るべきである。佛の滅後に此の經を説かむものは、大慈悲の室、忍
辱の衣、諸法空の座に坐して説け、此れ如來の使、如來の事を行するものぞ等と説かれた。

すると次の寶塔品第十一に、佛の前に一大寶塔が出て、塔の中から、多寶如來が「妙法華經はみ
な是れ眞實なり」と證明した。一會の衆は怪しみて此の中の多寶佛に御目に掛りたいと佛に請ふ。
すると釋尊が、此の佛は、三世十方法華經を説く佛の處には、何處へでも行つて證明する。若し塔
を開かうと願へば、法華經を説く佛が、みづからの分身の佛を集めて後に、我が塔を開くべきぞとの
誓願があるといふ。それでは其の分身の佛にもお目にかゝりたいと請ふと、釋尊がさらばと自身の
十方の分身の佛を集めるのに、娑婆世界のみではその一小部分だも迎へ得ない。そこで八方に二百萬
億那由他の國土を淨めて、はじめて分身の佛を集めた。その時釋尊、空中の多寶塔を開き塔の中へ這
入つて多寶佛と共に並び坐し、一會の衆も佛の神力もて虚空に上る。(是より後を法華經の虚空會と
いふ。)時に、佛、大音聲を出し我が涅槃は當に近い、誰か此の娑婆世界にて、此の妙法華經を説く
ものぞと弘經者をつゝる。但し此の經の弘通は最大の難事であるぞと、六難九易の法門といふ恐ろ

しい不可能のやうな難かしさだと説かれた。

次の提婆品第十二は、衆會が其の弘通の難に怖ぢつゝある時、佛を重ねて、佛を迫害せる提婆達多は、昔わが法華經の師なりきとて、善惡は定計することができぬ。迫害却て佛事を爲す所以を暗示し、五逆謗法の提婆もまた必ず此の經によつて成佛すと説きたまふ時、海中を教化して居た文殊が歸り來り、愚痴の果報の龍女、歳は僅に八歳で、修行久しからざるものが、法華經に教化せられて、智慧利根となり、成佛の悟りに入れるを伴ひ、即身成佛を實證して、智積菩薩と舍利弗を啞然たらしめた。

順縁は速疾頓成、逆謗の機も決定成佛と見て、つぎの勸持品第十三の初に、藥王菩薩及び二萬の菩薩は、不惜身命に娑婆の弘通を誓ひ、六千の聲聞及び比丘尼達は、娑婆世界は弘通困難の故に他土の弘通を誓つた。その時佛は、默然としてなほ快からざるが如く、ひそかに八十萬億那由他の菩薩を瞻はした。時にその菩薩達は佛の意に隨ひ、ひとしく起ち同じく聲を發へて、二十行の偈を説いた。それには此の法華經を惡世の中に正直に説けば、必らず俗人、僧侶、聖僧の三種の者みな敵となり、惡口罵詈、刀杖瓦石を受け、塔寺を遠離せしめられ國王大臣等に譏奏せられ、數々擯出せられるであらう。されど身命を愛まず、但だ法華經の隱沒して衆生の利益を失ふことを惜むが故に、聚落城邑に在りても必らず之を説くべし等と、懐しい化導難を説いた。

仍で次の安樂行品第十四に、文殊菩薩が、佛に八十萬億の居士の弘通誓願は、餘りに難事なれば、

惡世にありても安樂に行じ得る法はございますまいかと問ふ。佛ために身、口、意、誓願の四に互りての安樂の修行を説かれた。以上を法華經述門流通の五品、之に正宗八品、序一品を加へて述門十四品といふ(述門の意義は)此の述門の流通には、付屬がない。これは後の本門の處に至つて同時に付屬があるからである。

次の涌出品第十五(これから後が本門の意味は)に、安樂の行あることを聞いた他方の菩薩は、それならばと、各此の娑婆世界の惡世の弘通を誓願して出た。すると佛は意外にも、「止みね善男子よ、汝等が此の經の弘通を須むない。此の娑婆世界には、自から六萬恒沙の菩薩がある。此等が此の經を弘通するであらう」と止められた。その語の下から、無量千萬億の菩薩達が、大地の下から出て來た。其の數は不可議不可量の多數である。其の中に、上行、無邊行、淨行、安立行の四大菩薩が上首となり、釋尊及び多寶佛十方分身佛を供養する。彌勒菩薩が、之を見るに、華嚴經以來四十餘年の經教の中に曾て一人だも見も知らぬ菩薩だから、之を怪むで釋尊に問ふと、佛が之は我が初めて發心せしめた弟子だといはれる。彌勒いよく疑つて、此の菩薩達の無數なる、皆久しく既に菩提を證し、新なる佛よりその尊特は遙に勝れる、失禮ながら此等菩薩は百歳の翁の如く、世尊は二十五歳の青年にひとしい位。父の少うして子の老いたる。世抑も誰が信じましたやう。我は世尊の語なるが故に信じますが、後の世の爲めに具さにその意を説きたまへと問うた。佛之を嘉みましたま

ひ、善くも是の如き大事を問うた。是によつて如來の智慧、諸佛の自在神通の力、師子奮迅の力、大勢威猛の力を明にするを得ようぞといはれた。法華經は不思議な組立てである。法師品以來流通分だつたのが、忽ち此に來つて、一大法門が再び顯るゝ正宗分が出て來た。それゆゑ此の品の初半品(六萬恒沙の菩薩、釋尊の弟子と判らざりし前半品)を本門(此の事は後)の序分とする。

次の如來壽量品第十六で、釋尊が、諸の菩薩を三び誠め重ね誨めて、當に佛になるべしと規められた彌勒菩薩を總代とし、爾等菩薩は、みな我れ釋迦牟尼佛を、四十餘年前に始めて佛となつたと謂つて居る。此れ佛の眞實祕密の本地を知らざる迷妄の見である。我は五百塵點劫といふ一切經の中に説けるいかなる佛よりも測り知れざる古き昔に、既に成佛せる佛、それより以來、三世十方に無數の法報應の三身を示し、又九界の身をも示し、佛の法、九界の法を説き、佛の國土、九界の國土をも示し、種々の方便もて、三世に衆生を利益する。伽耶城で始めて成佛したと見せた我身もまたその方便示現の一分である。我が實の身は三世に常住で、我が垂迹の身は十方に遍なく出世し滅度して絶えず三世を利益する。此の六萬恒沙の地涌の菩薩は、五百塵點の本時成道の時、直ちに我に隨つて本地の佛法を受けた弟子である。爾等もまた我が此の本地の身を知り本地の法門に依つて、本地の菩提を成ぜよ。更に我が今の垂迹の身の滅後には、此の本地の法華經の眞理を留め、後の迷妄の衆生には、使を遣はして之を授けやうぞと説き示された。此の佛の本地——俗解せば本有本來

根本の地位——を現はして説かれたのを法華經の本門(本地の法門)といひ、方便して、影迹是迹の如く、一時的の又は技末的の佛身を示現せられたのをば、迹門(垂迹の法門)といふ。本有本來根本の佛は唯一眞實の實在で、技末垂迹の佛は十方三世に無數である。本地の佛を本佛、その弟子を本化、垂迹の佛を迹佛、その弟子を迹化といふ。若し教法の唯一に約すると、四十餘年の經は方便權教、法華經は眞實であるが、今や佛陀の唯一に約する時は、四十餘年の諸教と、法華經の中の前十四品は、ともに方便迹門であつて、涌出、壽量品以下の十四品が本門である。但し爾前經は權教迹門で、方便品中心の前十四品はこれ實教迹門である。仍で前十四品は同じ實教たる妙法蓮華經であり、法師品寶塔品以來本門とは切つても切れない關係があるから、爾前經が全く權教迹門なのとは違ふ。かくて迹門本門一具して、唯一の妙法蓮華經である。本主迹從の妙法蓮華經であるとなる。そこで次の分別功德品第十七で、此の本門を聞いた迹門の菩薩達が、法身の記莖を得。眞の本門の覺りに入つた。又佛の在世に信するものゝ四種の階級、滅後の五種の品類の人々、みな齊しく、本地の佛の功德を得。惡世末法の中にも此の功德があると示され、

次の隨喜功德品第十八には、此の本門の法華經に對しては、尤も微細殆んど確と名け難きほどの信念の功德——即ち五種品類の最初の信念微細の人の功德——の廣大なるを説かれ、

法師功德品第十九は、佛滅後に、此の經を修行する五種品類の人の功德果報たる六根清淨を説き、

次の常不輕品第二十には、五品の最初歩の隨喜品の位から、六根清淨を得た人の實例として、過去の威音王佛の像法の末、末法の初に、不輕菩薩が、増上慢の四衆を折伏する爲め、道路に在りて、強ひて「我れ深く汝等を敬ふ、敢て輕慢せず。汝等みな菩薩の道を行じて、當に作佛すべきが故に」と合掌し禮拜した。四衆は怒つて杖木瓦石をもて打擲すると、避け走り遠く住して又高聲に之を説く、又打擲すると又是の如くする。やがて後ち此の菩薩、更に佛に従うて六根清淨を得、神通自在を見て、彼の上慢の四衆も之に信服隨從したが、先の謗法謗人の故に千劫阿鼻地獄に墮ち、後また此の菩薩に従つて佛道を得た。その昔の不輕は我れ釋迦、上慢の四衆は今此の會の中に在りて不退轉を得たる跋陀婆羅等の菩薩だと説きたまうた。

次の如來神力品第廿一の初に、地涌六萬恒沙の大神は、待兼たといふ様に、一齊に滅後惡世末法の弘經を願ひ出た。佛、文殊菩薩等の迹化他方の諸菩薩の前に、一々に象徴ある十種の大神通力を示して、此の法華經が、現在に於いて十方の佛及び法を統一して居ること、又未來に於いて、教法(宗)、理法(眞)、行法(業)、果法(神)の統一あることを示し、然る後に上行等の菩薩にむかひ、多寶塔中において、此の法華經は、如來一切所有の法、如來一切自在の神力、如來一切祕要の藏、如來一切甚深の事、みな此の經の中に宣示顯説した。滅後に此の經の在る處行せらるゝ處は、諸佛の四處道場であると、反覆丁寧に付屬し、又上行菩薩の弘通を讀し、宗教の五義の化導によつて、日月

が圓を除く如く、衆生の圓を除き、畢竟して衆生を一乘妙法に住せしむるであらう。此の經を受け持たむ者は決定して佛を得るぞと説き結ばれた。之を塔中付屬といひ、特に本化菩薩のみに付屬せられたから別付屬といひ、又結要付屬ともいふ。

さて後ち囑累品第二十二に、佛は塔中より起つて、上行菩薩はじめ一切の菩薩の頂を三び摩で、此の法華經を總じての菩薩に付屬せられていはるゝには、若し如來の滅後に佛の智慧を信じ求める者あらば、此の法華經を説いて成佛を得せしめよ。若し佛の智慧を信じ求めざる者あらば、まさに餘の深法じんぽうを以て示教し利喜せしめよと誠しめ、諸菩薩はみな躬を曲げ頂を低うして、當に具ついでに奉行しまつるべしと三び誓つた。これで寶塔品以來の付屬の事は終つたから、釋尊が高聲に、多寶佛は塔を閉ぢられよ。十方の諸佛は本土に歸られよと命ぜられ。上行菩薩等の地涌の菩薩も娑婆世界の下方空中へ歸つた。(寶塔品より此品までを虚空會十二品といふ。)

次の藥王品第二十三は、藥王菩薩が身を焼いて佛を供養する苦行を以て法華經を修行し、不退轉、普現色身三昧の定身を得たるを説き、また十の喩を以て、十方世界の中に、此の法華經より勝れたる經なしと定め、

妙音品第二十四は、妙音菩薩が、法華經によりて三十四身を以て、一切衆生を利益すること、觀音品第二十五は、觀世音もまた法華經の功德によつて三十三身を以て、應じて衆生の苦しみを

濟ふことを説き、

陀羅尼品第二十六には、藥王・勇施の二聖、持國・毘沙門の二天、鬼子母神・十羅刹女が、陀羅尼を以て、法華經の持者修行者を守護するを説き、

妙莊嚴王品第二十七には、藥王、藥上、妙音等の菩薩が、誓願して妻となり子となりて妙莊嚴王の邪見を救ふを説き、

普賢品第二十八には、東方より普賢菩薩來りて、法華經の重ねての略説を請ひ、佛爲めに四法を説き、普賢は滅後の法華經修行者の前に身を現じて守護せむと誓つた。上の藥王品以下の六品を還迹流通といふ。多寶佛は塔を閉ぢ、本化の菩薩、十方分身の佛は各本土に還りて、釋尊一人となりたまひ、迹門の説相とや、同じやうになつたから斯く名ける。

次に結經の「普賢經」には、普賢の威神力と、並に此の法が諸佛の師であること、佛の三身は悉く此の法から出る。釋尊を毗盧遮那遍一切處といひ、住處を常寂光といふ等と説かれて、本迹二門を結ばれてある。

これが法華經の説相の梗概である。さて此で注意すべきは、其の流通分と化導面とである。

尤も著しいことは、此の法華經の付屬が、神力品に、上行菩薩に對し、四句の法を以て付屬せられた塔中の結要別付屬（結要別付屬）、囑累品に、上行菩薩を首めとして一切の菩薩衆に、法華經を付屬せられ、更

に若し法華經を信じないものには、餘の經を以て方便攝化せよとある塔外の總付屬と、この二つあることと。次に滅後化導の方規として、安樂行品の如き攝受柔和の順化導と、勸持品や不輕品の如き折伏強硬の逆化導とがあつて、法師品の三軌では、大慈悲室と諸法空の座とは同じだが、忍辱が、攝受の時は柔和忍辱の衣となり、折伏の時は忍辱の鎧となる相違がある。そして經文では、法師品の「如來の現在にすら猶ほ怨嫉多し、況んや滅度の後をや」は、此の攝折二門の化導に冠るやうであるが、寶塔品の六難九易は、ほとんど不可能といふほど惡世の弘通はむづかしいとあつて、安樂行品のやうな安樂に行じ得る法に關係した御語とおもへない。これは勸持品や不輕品に冠るものでなければ結局の算が合ひにくい。随つて説明を拜すると、佛の寶塔品の募集の本意が、勸持品側にあるらしく、勸持品の初めに藥王菩薩等が、不惜身命に此の土で弘通致さうと願つたのにも關らず、不足げにわざ／＼八十萬億那由他の菩薩を贖はせして、二十行の偈の折伏逆化の豫證をさせられた。つぎに其に堪へない菩薩の爲めに、安樂行品が説かれた。仍で此の安樂行ならと、弘通を願ひに出ると、却つて「止みね善男子」と止められた。惟ふに彼等の願は佛の寶塔品募集の本意たる、六難九易と勸持の二十行偈の弘通化導の誓願でないから止められたのであつて、其等安樂弘通の方は跡まはした。六難九易と勸持偈の弘通者は此にあると、本化の菩薩を呼び出された。その菩薩によつて本門壽量品の本法と本佛が顯はれ、その信仰利益をば、分別、隨喜、法師の三功德品で説かれ、この

本門三功德品の過去の例證として、勸持品と同じ折伏逆化の不輕品が説かれた。そして寶塔品の六難九易と勸持品と不輕品とが、正しく一系を爲す時、その次ぎに此の本筋の弘通の爲めに呼び出された上行菩薩へ、特別の付屬が塔中であつた。それはたゞ法華經だけ、それも四句に結要した法だけの付屬だつた。此の本意特別の方がスツカリ片付くと、今度は本化をはじめとし、迹化他方の菩薩等に對して法華經を付屬し、及び法華經を信じ得ないものゝ爲めには、法華經の方便としての餘經の深法を以て方便攝化せよといふ、安樂行品の攝受の化導に對する付屬があつて、寶塔品以來の弘通者募集の事件は、茲にめでたく事済みになつたのである。之を正直に解釋すると、どうしても、

況滅度後——六難九易——勸持品偈——不輕品——神力品(結要付屬)——『本化菩薩』——折伏況滅度後——安樂行品——囑累品(法華經並ニ餘深法)——『迹化他方菩薩』——攝受

となり、本化菩薩の化導に多難なのは、最惡世の末法に、如來の現在にすら怨嫉があるといふ法華經を専門に弘通するからで、多難なる故に本化を要するといふ義になり、迹化他方菩薩の化導は、惡世は惡世でも、末法よりは善い像法の時、法華經及び餘の大乗を方便應用して弘通するから、比較的難が少いのだといふ結果になる。審かには、恩師の「本化攝折論」に示されてある。

(二) 五逆諸法の機を即發する折伏逆化の化導

「法華經」の説相を、正當に解すると上のやうになる。そして天台、妙樂、傳教の三人の大師は、文の上にもそれは明でないが、其の義意をさぐれば、斯やうに解釋せねばならぬやうに注してある。ところが不思議なことには、支那、日本の天台の學者が、此の事に氣のつくものが殆んどなかつた。支那では四明知禮尊者が、一念三千の觀心の義學の上では、實に立派な大家であるが、法華經の文段起盡の學問の方では、むしろ、沒交渉で、たゞ妙樂大師の直弟東春の智雲といふ人や、道暹といふ人などが、相當な力ある解釋をして居る。日本に至りては、慈覺、智證の兩大師以來、眞言化したから、法華經學は衰へた。あつてもそれは矢張支那と同じく止觀の側の觀心の學問であつた。ただ聖人の少し前、實地房證眞といふ、慧心、檀那の兩流に互つた山門の總學頭が、三大部(天台大師「法華玄義」「法華文句」「摩訶止觀」)の「私記」各十卷を作つた。けれども此の中にも付屬だの弘通だのいふ事には、深い注意が拂つてなく、其の學問の立場は、法華經の圓理(徹底した圓融哲學で不徹底)と、諸大乘經の圓理(之を圓體同といふ日)と同一だ(運聖人と反對の學說)といふ義を立てゝ居る。そして是また不思議に、支那も日本も、天台法華宗と、眞言と念佛と禪宗とが妥協して行き、殊に日本では、弘法大師の眞言、法然上人の念佛は、支那以上に立派な組織と識見とを示したと同時に、支那の祖師以上に立派に法華經を貶斥した。その時代は恰も像法の末、末法の初であるから、法華經の勸持品や不輕品の時なのである。すなはち上行菩薩が法華經の要法によつて、折伏逆化をすべき時になつたのである。けれども支那に

も日本にも、誰一人として其れを證る人はなかつた。たゞ天台宗の一念三千の觀心、その坐禪、その念佛、或は法華經の讀誦、その題目を各自に修行して居る。それが一番筋の正しい天台學者、法華經の持經者であつた。

何故？ 彼等は考へなかつたらう。經文には、安樂行品の攝受の行と勸持品不輕品の折伏の行との二つがあり、上行菩薩への別付屬と、一切菩薩への總付屬、藥王菩薩の弘經の誓がある。そして實際の歴史上、支那日本の法華經の弘通者たる天台、傳教兩大師は、藥王菩薩の自覺に入つた。そして安樂行品ばりの修行をして居る。上行菩薩と勸持不輕の弘通行規はあるが、まだ誰もその自覺をしたものがない。又經文には『末法惡世中』佛滅度後、後五百歲、廣宣流布』とあるのに、實際には、法華經は、今や第三戲論、理同事勝、千中無一、標月指（たてしるべ）といはれて居る。經文と實際とはどうして斯う違つて居るのかと考へなかつたらうか。それは無理もない。彼等天台學者の多く、殆んど全體が、教相は方便である、觀心は眞實である。法華經の説相を研究するなどいふことは、たゞ一念三千の觀心を練磨する必要としてのみ有意義である！ と信じて居たのである。それだから觀山では、聖人遊學の約二十年後には、「止觀」は「法華經」よりも勝れて居るといふ説が、其の學匠の秘藏の法門として傳へられたによつても知ることが出来る。總じて各宗の學者もみな爾うだ。畢竟、「法華經」の付屬だの弘通の法規だの、そんな豫言めいたことは、全で方便のやうに考へて深くは研

めて居なかつたのである。

どうして日蓮聖人だけそれを考へられたらうかといふと、それは全く聖人が感應直觀の豫言的人格だつたからである。十二歳で、國の秩序顛倒と、佛教の多岐と、佛法熾であつて國が根本からは治つて居ないといふ矛盾とに疑ひ出し、二十年の修學の裡に、一切經並びに八宗の章疏を見られて、それが孰れもみな一理あるのに、どんなに惑はれたらう。惑ひに惑つた結果、到頭「涅槃經」(四依)の「法に依つて人に依らざれ、義に依つて語に依らざれ、智に依つて識に依らざれ、了義經に依つて不了義經に依らざれ」の文に覺められ、それ以來は論師人師の語に依らず、ひたすら釋尊を信じ、經典を信じ、其の文を案じ義意を研めるのみでなく、廣く之を三國二千餘年の佛教史の事蹟と、佛の豫言に照らし、更に現在の事實に鑑み、いはゆる道理、文證、現證を以て究められたのである。此の道理、文證、現證といふ攷察法は、ほとんど現代の科學的攷察法とかはならない。「道理は文證に若かず、文證は現證に若かず」。試みにこれを今日に譯すれば、道理とは吾人の理性である。その理性のもつとも普通に存在して居るものは常識である。其の常識は、今日のいはゆる聖權たる各科學の文證、即ち各學者が一般に是定せる公理や假説にはとても及ばない。けれどもその公理や假説の文證も、現證すなはち現實の實驗には及ばない。若し公理假説と實驗とが違つた時は、またその公理假説と實驗との矛盾に鍛錬せられた理性即ち道理に訴へて、更に新しい聖權たる文證を作り、實

驗を以て證するといふことになる。聖人が常に一切此の立場に在つて、先天理性の道理と、その頃の聖權たる佛經の文と、實際の史的事實、現代の事象たる現證とに照り合して、而して過去の佛教史上、佛の豫言が確實に現はれて居ること、現在の世態が、同じく佛の「闡譯堅固白法隱沒」の豫言の活現なること、従つて當代の佛教の誤なること等に考へ至り、佛の眞實本懐とせらるゝ「法華經」の經文が強く深く信ぜられ來り、上行菩薩の出でざるべからざる世なることも悟り出され、信じ出さるゝに至つたのである。聖人が佛經を豫言的に史實的に取扱つて、此の確信を得らるゝに至つた痕跡は、「佛の未來記の合へばこそ人も信ずれ。若し佛の言の事實に合はずば誰か佛經を信ずべきぞ」といふことを仰せられたのに依つて推し測られる。

さて其の上行の教化はなぜ折伏でなければならぬのだらう。穩かに説く工夫はなかつたものだらうかといふと、靜かに穩かに説けるやうなれば、折伏の必要も、上行の必要もないのである。

折伏——法華經の折伏化導といふものは、全く止むを得ざるに出るのである。何故？つていふと、普通に慈悲最も諸佛に優れたといはれる阿彌陀佛。而も其の第十八の超世願たる念佛本願でさへも、唯ダ五逆ト正法ヲ誹謗スルヲバ除ク

とある。殺父・殺母・殺阿羅漢・出佛身血・破和合僧、かやうな逆罪を犯したものと、正しき佛法を誹謗するもの、それはいかな彌陀の慈悲でも極業へ救ひ取ることとは出来ない。いくら十念の念佛を唱へ

てもお断りだといふことになつて居る。これは彌陀一佛だけでなく、佛教を通じてどの佛でも誡門の定則である。兎に角そのまゝでは救ふことが出来ないのが五逆と誹法である。若しそれが個人的でなく、舉世滔々としてそれだといふことになれば如何する。どうして救ふ。末法の衆生といふものは、大體はそれなのだ。それを救ふのには、どうしても折伏逆化でなければならぬ。何となればその時はたゞ法華經の折伏によつてのみ救ふことができるからである。法華經によつて彼の邪見を摧破する。改悔すればそれでよい。改悔せずとも、法華經及び其の行者を、彼等がいよく誹謗する時、提婆達多の三逆誹法をも成佛せしめた力ある妙法蓮華經に縁せられ、一たびは地獄に墮ちても、後かならず法華經で救はれる。それは人の地につまづいて倒れたものが、また地に依つて起きるやうなものだと釋してある。不輕品の不輕菩薩の化導がそれだ。隨つて末法の上行菩薩の勸持品の化導もそれではなければならぬ。而して日本國の鎌倉時代は果して爾ういふ五逆誹法の世だつたのか。といふことになる。全く爾うだつたのである。

保平の亂の後には、世間では立派な五逆の競争が行はれて居たではないか。殺父も、殺母も、殺阿羅漢に似たことも、出佛身血に似たことも、破和合僧も十分に揃つて居る。それで誹法を、「人のいとせぬ事にて候」といふのが訝しい位なものであつた。併しながら彼等は、出世間の五逆を知らず、誹法といふことを知らなかつたのである。

聖人は彼等が、一齊に自ら覺らざる、此の五逆と謗法とを叩發し剔抉すべく、彼等佛教各宗の僧俗全體の上に折伏の大雷を下された。

「爾等は、悉く主師親三徳の釋尊を蔑ろにし、精神的に釋尊に背ける五逆罪の徒、唯一本法の妙法蓮華經を貶し、權教權門の經教に執著して、妙法に背馳する謗法罪の輩である。今生には國を亡ぼし、未來には無間地獄に墮つべきである!!!」

鎌倉の辻説法は、逆謗救治の不輕菩薩の教化と同じであつたのである。

(三) 天台沙門としての弘通と其の根據——外用相承としての法藏相承

天台沙門としての不輕教化は、天台傳教の先例のないことであるが、聖人は之を世の相違とし、龍樹、提婆等の例によつて辻説法をする旨を仰せられた。そして題目の五字七字に至つては、外相は天台傳教等の流れの意味で傳へて居られたのが、佐渡前の化導である。

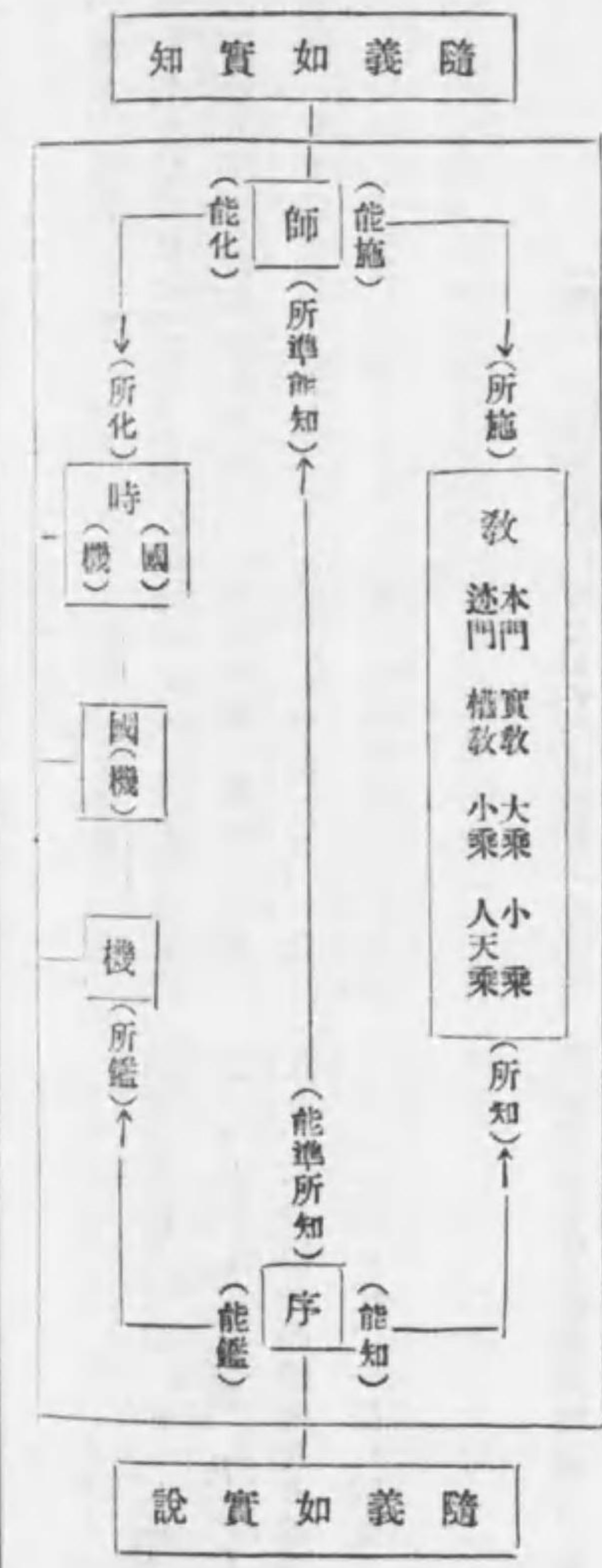
それは叡山の慧心流の傳へとして、聖人が俊範から傳へた七箇相承(一念三千、一心三觀、止觀大旨、法華深義の中に更に圓教三身、蓮華因果、常寂光土義を開く)の本典たる、「修禪寺決」の中に、臨終の一心三觀、臨終の一念三千、共に南無妙法蓮華經と唱へ、また天台大師は、一切經の總要と名けて、此の題目を毎日一萬返唱へたまうたなどいふことがある。また誰かからお傳へになつたらしい檄那流の「一三一」の五箇相承の、一

言の妙旨、灌頂の玄旨も、また妙法蓮華經の五字七字である。だから聖人の初年の弘通は、此の天台、章安、智威、慧威、玄朗、妙樂、行滿(慧心流源)、傳教と傳つた妙法五字を、外用相承の法藏相承としておいでになつたものだとおもはれる。それゆゑに此の前期鎌倉時代では、決して「上行所傳の妙法五字」とは仰せられぬ。「一生成佛鈔」「總在一念鈔」「一念三千法門」等の諸篇、乃至「唱法華題目鈔」に至るまで、妙法五字を一言の一心三觀なり、一念三千なり、一代佛教の總要なり等といはれ、たゞ少しく別に片鱗を示し、天台では重要な個人的相承にして居たのをば、一般に開放して末法成佛の直道だとせられたのである。

(四) 末法法華經行者としての弘通と其の根據——内證相承としての五藏法門(塔外付屬)

天台沙門としての「立正安國論」が焼打を惹き起し、焼打が聖人を伊豆に流罪した。それによつて晝夜十二時に法華經を身に讀む人になられた。而も「四恩鈔」は、尙「法華經の持經者」と仰せられ、「行者」とはいはれない。しかるにわづかにその二十日ばかり後、「教機時國鈔」を著はされた時に、自から末法の初、後五百歳の法華經の行者なりと公言せられた。末法の法華經の行者とは、聖人の内證である上行菩薩の模範的通稱なのであるから、此の「教機時國鈔」と上行の自覺とは、何等かの關係がなければならぬのである。

「教機時國鈔」の明す所は、教、機、時、國、序(又は教法流布の前後)を知ることをして、聖人自身が末法の日本に、法華經を擴むる所以を明にする、能標準の判教とし、また前代の諸宗の正邪當不當を糾明する標準とせられたものである。「機」と「時」と「國」とは、「教」を施かるべき對象であつて、此等を導くべき「教」を施くには、必らず孰れの點でも前代の教に勝れるものを施かねばならぬといふ標準を示したのが「序」である。而して此の五を知つて弘通するのが導師である。之を圖示すると左の通りになる。



「時」は一番大きく、「國」は之に次ぎ、「機」は又之に次ぐ。同じ「時」でも、「國」なり「機」なりとの相違で、必ずしも徹頭徹尾同じ教は施せない。(併し「國」と「機」とは違つても、大きな「時」の影響もまた蒙らぬわけにゆかぬ。世が末になると共にますますこの三つはそれが無差別になつて行く。) 其の「時」の態、「國」の風、「機」の類に適する所の「教」を説くべきであるが、必らず守らねばならないことは、前に弘まつて居た「教」よりも劣つた「教」を布いてはならないといふことで、これは人でも國でも時でもすべて向上せしむべき管の宗教が爲してはならぬことである。必らずどの點でも、前の「教」に勝れた「教」を弘通せねばならぬといふのである。そして此の「機」「時」「國」と「教」と「序」とを知つて、新に適當な「教」を弘めるものは「導師」であるから、「序」は導師を標準づけらるものにもなる。それゆゑ五義の「序」をば、後の「太田禪門御書」といふのでは、「師」を以て解せられてある。

さうして此の五義がなぜ上行菩薩の自覺に關係があるかといふと、これは正しく神力品で、佛が上行菩薩に付屬せられた時、此の菩薩の化導を讃めた語に、
 於諸法之義 名字及言辭 樂說無窮盡 如風於空中 一切無障礙上
 於如來滅後 知佛所說經 因緣及次第 隨義如實說
 とある中の下の四句に依つて立てられた判教だからである。即ち



知教乃至知序の知は、『知佛』の知。五義といふは『隨義』の義であるとは、恩師先生の説である。

私は十數年前、此の五義は、統一的宗教の判教である。統一的宗教の資格としては、世界のいかなる時代、いかなる國に起つた宗教でも、いかなる人の起した宗教でも、其の判教の中に取り入れて合理的に之を批判し説明し得る判教標準がなければならぬ。それが缺けて居るならば、統一的宗教の資格のないもの、容量のないものであるとし、此の五義は、正しく左の如き義理があつて、世界のどの宗教をも説明し批判するに足りるものであると説いたのである。

先づ「教を知る」といふのは、宗教哲學的知見である。聖人の宗教では、外道、小乘、權大乘、迹門、本門、觀心といふ風に別たれて居る。

第二に「機を知る」とは、宗教心理學的知見である。聖人の宗教では、人天乘機、三乘機、權一乘機、唯一乘機、本圓一乘機、正法機、像法機、末法機、利根、鈍根、順緣、逆緣等を説く。

第三に「時を知る」とは、宗教社會學的知見である。聖人の宗教では、無佛世、佛世、正法、像

法、末法の三時、五箇五百歲等の判がある。

第四に「國を知る」とは、宗教民族學的知見である。聖人の宗教では、外道國、小乘國、權大乘國、大小兼行國、迹圓一乘國、本圓一乘國、寒國、暖國、潤國等がある。

第五に「序を知る」とは、宗教進化學的知見である。これは時代にても、國家社會にても、個人にても、凡そ新に宗教を布かむとする時は、必らず前の宗教より一階勝れたものなることを要するといふ進化的見解である。

宗教の相異をば、宗教哲學的知見からのみでなく、その個人の心理状態、その社會の進歩程度、その民族の特質等から解釋すれば、それ等の宗教の全體的價值がよく判るのである。

聖人の時代は、佛教のみであつたから、聖人の判釋は、主として佛教であるが、此の範疇は、あらゆる宗教を批判解釋するに足りる統一的組織に成つたもので、今日の進歩せる學界においても、全く具備して了つた研究方針であるといふべきもので、これ等によつても、佛智といふことの測るべからざるものなるを知るべきである。

經文の説相に従へば、上行菩薩は、屬累品で、釋尊が諸菩薩に、法華經並びに法華經を内容にせる餘の深法(此の中に權大乘も小乗も含む小乗も)を付屬せられたのに立會つて居らるゝから、其の時の佛囑のある所を明に知つて居られることになつてゐる。それだから聖人は伊豆で宗教の五義を發表

し、此の屬累品塔外付屬の時の上行菩薩の資格として、前代の各宗の祖師に對し、此の人の弘通は佛囑に準ずれば正し、此の人の弘通は佛囑に準ぜざる故に正しからずと斷じたまうたのである。

而して此の伊豆で、その屬累品の時の教主の説相たる、立像の釋尊を得られたのは、實に不思議の因縁といふべきであると、恩師智學先生は解説せられてある。「妙宗式目講義録」に詳しく説かれてある。

第五講 あゝ日本の柱

弘長三年伊豆赦免の翌文永元年から、同八年の十月佐渡に遷らるゝまでの八年間を、私は後期鎌倉時代と名ける。伊豆にて五義法門を顯はした後ちの聖人は、末法の法華經の行者であつたが、此の期の初めには、自ら『日本第一の法華經の行者』と名乗り、「安國論」豫言適中の後は、更に『日本柱』を以て公然と任ぜられた。そこで此の期をば「あゝ日本の柱」の題下に講ずる。

(一) その御事蹟

建長六年の弘通から文永元年までは、十年を過ぎた。此の間に聖人の教團は可なり膨脹して居たやうである。時輔の近臣南條七郎や、又は大學三郎のやうな學問邊の人も、檀越の中に増して來た。(此の大學三郎をば、普通には、比企能員の遺子で諱は能本、幕府の儒臣であつたと傳へて居るが、富士日興師自筆の「御臨終記録」には、大學九、大學三郎と兩名出て居る。大學九は「吾妻鏡」に慶ある陰陽博士の一人安倍晴吉(又は晴長!)といふ人らしいから、此頃の慣用語としては、大學三郎は當然大學) また御弟子達の中に允の子息でなければならぬ。或は能員の子をば、大學九の養子として居たかも知れない。も、燒打の時に奮戦した能登房(房といふから相當年輩の)伊豆へ立文を持つて行つた但馬公、その他おそらく曾谷殿の二弟なる大進阿闍梨、三位房。或は少輔房、また鏡忍、乘觀、長英などいふ人々も、最早御門下に列つて居たらうと思はれる。

この文永元年の三月廿三日、叡山の衆徒は朝廷が四天王寺の別當を園城寺に付けられたのを憤り、抗議を奏して居たが、抄々しいお取上げがなかつた。すると何者か自ら火を放つて、講堂、戒壇堂、はじめ多くの堂塔伽藍を燒き失ひ、その二十六日には、山門の衆徒、神輿を奉じて京に入り、後醍醐、後深草兩院御所の附近を騒がせ、武士等と互に殺傷した。爲めに朝廷は四天王寺別當職を園城寺から召上げられた。のち園城寺も悉く伽藍を灰燼にした。當時の舊佛教の常態とはいへ、何といふ淺ましいことだらう。此の山門炎上と神輿振の事を、逸早く聖人へ通知した人がある。その時の聖人の答書を「御輿振御書」と名けて居るが、おのづから聖人の抱負と豫感が示されてある。その御文には、「御文と共に御輿振の日記を給うたが早速で悦び入る。中堂まで炎上したとは事實でござるか。若し爾うならば山門破滅の期とも申すべきか。併しそれも故のない事もムらぬ。天竺の祇園精舎や鷄頭摩寺、支那の天台山みな正像二千年に滅んで居るに、今末法に入つて此の日本國のみに正法の住處として叡山がある。三千界に唯此の處のみでござるから、定と惡魔一跡に嫉みを留め、小乘權教の輩も之を妬むでござらう。隨て禪僧、律僧、念佛者等は、國王大臣等に山門をよくは申すまい。それを三千人の大衆、我山破滅の根元とも知らずして、彼等禪念佛等を迎合し、師檀共に破國破佛の因縁に迷うて居らるゝ。但し法華經第七卷には、後五百歲於闍浮提廣布流布の文、傳教大師の正像稍過已末法太有近、法華一乘機今正是其時とある釋のみ持もしようござる。滅するは生ぜんが爲め、下るは登らんが爲めとあれば、此の留難も山門繁昌の爲に起る事にもござらうか。紙面には盡し難うござれば早々見參をお期まをす」と書かれてある。末の文によれば山門遊學の御弟子へ

與へられたやうだか、前の方で見ると、何さま叡山の故舊の人にでも與へられたかとおもはれる御文體だ。而して祇園精舍鷄頭摩寺天台山の例を引いて、山門滅亡かと疑ひ、滅するは生ぜむが爲めとの仰せは、御自身の新傳道を暗示せられたものに相違ない。(此の書の日附三月一日の二は古文の三を。三と誤つたものだらう。一日は少し早い)

すると五月三日に、幕府の評定衆筆頭、武藏前司大佛朝直(泰時の從弟)が五十九歳で死んだ。彼は然の高弟隆寛律師から十念を授かり、叡尊から受戒した。その子の武藏守宣時は、良觀房の信者で、後に聖人をひどく惡むだのに依ると、朝直も恐らく焼打の默認者、伊豆流罪の贊同者であつたらう。續いて六月から疫癘が流行はじめた。またかと眉を擧める内に、その七月の五日、寅の刻、東北の方に當つて、凡そ一丈餘に見える彗星が見えた。大きな彗星だと噂して居ると、一日／＼それが長大して、十餘日の後には、半天に亘り、竟には東北から西方へ虹の様に一天を掛け渡した。其の物すごさは衆の心を騒がさねば措かなかつた。陰陽師は種々に占ひ、佛教家は有ゆる祈禱をした。儒臣達は古からの史籍の前例を調べた。何事でごさるか、兎に角不祚のごさる!! 此の十年の間に、日蝕、月蝕、星宿變怪、大地震、飢饉、疫癘、さまざまに自然から慮まれた民心は、愈いよ深い／＼恐怖に悸えた。此の彗星は現代の天文学上何といふ規道星か、又は全く判明しない星か知らないが、科學全盛の現代ですら、十年前ハレー彗星の尾へ這入るといつた時は、随分と浮説流言に人心を迷はせた。況して六百數十年前の武家時代だ、その驚駭がどれほどだつたか測られる。

此の凶兆の始まる前二日、熱權武藏守長時は、俄に出家し、淨光明寺の別墅に入つて、專阿と法名(或は觀惠とも傳へる、專阿は阿彌)したが、八月廿一日に卒した。僅に三十五歳である。聖人を流罪してから、發頭人の重時は奇病を發して、その年の内に死に、追善請求の夢枕にさへ立つた。其處へ恰も太夫律師の謀叛がある。一年おいて匆々聖人を赦免したが、その年に最明寺、今年は又朝直と長時と四人まで死んだ。何となく薄氣味悪く思つたらう。處へこの大長星だ。疫癘はなほ熾である。聖人は此の長星を見て、

文永元年甲子七月五日、彗星出、東方、餘光大體及二國、此又始世已來所無凶瑞也、内外典學者不知其凶瑞根源、予彌增長悲歎、(安國論御勸由來)

大明星之時、彌々知此災根源、(安國論書)とあつて、是れ破佛破法破僧の爲め、謗法の爲めの惡相、自界叛逆、他國侵逼の先兆だと直觀せられた。(撰時抄諸御書)

この時幕府は、連署政村が執權となり、時頼の子時宗が十四歳で連署となつた。かゝる時に一國の宗教改革などの建議は詮のない事だと見切り、最明寺の死んだ時すでに、

イカニモ此事アシクナリナンゾ。イソギカタルベキ世ナリ。

と一時は思つたといふ聖人は、その八月に久々で房州へ下り父君の墓まうでをせられた。後ち弘安

年中の「妙法比丘尼御返事」に、

地頭東條左衛門尉景信ト申セシ者、極樂寺殿、藤次左衛門入道、一切ノ念佛者ニカタラハレテ、度々ノ問註アリテ、結句ハ合戦起リテ候上、極樂寺殿ノ御方人、理ヲマゲラレシカバ、東條ノ郡ヲセカレテ入ル事ナシ。父母ノ墓ヲ見ズシテ數年也。

とあるのによると、聖人は東條郷を塞がれておいでになつた。「父母の墓を見ず」とあるから、母上御歿後の事かとも思はれるが、『極樂寺殿』と重時を現在人物として呼んで居らるゝのに依れば、『父母の墓』の母は、意味なき帶文字たいもんじでないかとおもはれる。それは「善無畏三藏鈔」に、文永元年十月、西條華房で、舊師道善房に會はるゝ時のことを、

別シテ中違ナカズグヒマイラスル事ナケレドモ、東條左衛門入道蓮智ガ事ニ依テ、此ノ十餘年ガ間ハ見奉ラズ。但シ中不和ナルガ如シ。

とあるから、東條の郷を塞がれたまふたのは、文永元年以前のやうである。何故お塞がれたらなつたのだらう？ 度々の問註とは何事だらう。「清澄寺大衆中御書」に其の内容らしいものがある。

東條左衛門景信ガ、悪人トシテ清澄ノ飼鹿カシカヲ狩取リ、坊坊ノ法師等ヲ念佛者ノ所從ニシナサントセシニ、日蓮、敵ヲナシテ領家ノ方人ト成リ、清澄二間ノ二箇ノ寺、東條ガ方ニツクナラバ、日蓮法華經ヲ捨テント、精誠セイセイノ起請キジウヲ書テ、日蓮ガ御本尊ノ手ニユヒ付テ祈リテ、一年ガ内ニ兩寺

ハ東條ノ手ヲハナシ候ヒシ。

これを上の「妙法尼鈔」に照すと、景信は、極樂寺入道、藤次左衛門入道、一切の念佛者に語らば、清澄寺の坊坊の法師を念佛者に隸屬させ、なほ二間寺をも奪ひ取りて、領家の手を放し、地頭の支配下としやうとした。おもふに景信は極樂寺の家人らしいから、所領をも極樂寺にかへる。それは寺僧すべての望みでござるからとでもいつた風な仕組にでもしやうとしたものらしい。其の横車ヨコクルマを押すのには尋常ではない。武力を示して置かねばならぬとて、其の頃の禁制だつた寺領の飼鹿を狩取つて、彼是文句をいふと徒は置かぬぞよとの氣勢を添へた。道善房は温和な人、領家は尼御前だ。此の無法を如何とも出来なかつた。仍で詳しく顛末を聖人へ報じ來つて、救ひを請うたものと見える。壯んに念佛破折をして居られた聖人に取つて、我が發心出家の道場たる天台宗の管轄下の名利が、而も聖人の天台僧としての本籍地であつたらう清澄寺！それが念佛宗に取られるといふ事は小事件でない。仍で聖人は直ちに宗教上には、御本尊に起請し、世間面では、領家尼の方人となつて、所領争ひとして問註所へ訴へ出る黒幕になられた。いづれ門下の誰かゞ領家の代理となつたらう。そして清澄の大衆へは、「そんな不法な事は私が何處までもさせない、武力でも恐れるに足りない。まさかの時は大衆一同に佛法の爲めに弓箭を取られい」と強烈な獎勵をせられたらう。おそらく御弟子の誰彼は下つて、専修念佛者になつた坊坊の法師を論破したらう。仍で度々の問註

の結果は、一年ほどして法規上領家の勝になつた。東條景信は齒嚙をして最後の手段の武力で嚇かした。けれども聖人によつて獎勵せられ、勝訴となつた清澄方の氣勢は揚つた。佛法守護の爲めとの僧兵と領家の武士等も、立派に之を防がうとした。仍で合戦が行はれた。恐喝は奏効しなかつた。景信も此の上清澄を攻め滅ぼすなどいふ事は、我が身が可愛いから出来ない。到頭折角の企てが泣き寝入りになつて了つた。此れ畢竟日蓮奴が後楯をして居るからだ。景信も、極樂寺入道も、藤次入道も火のやうに怒つた。けれども奈何ともできない。仍で難辭を設け、極樂寺入道の方人の奉行が、理を曲げた判決をして、日蓮は東條の郷へ入るべからずといふ事になつたものだらうかとおもふのである。

ところが此の文永元年に至るまでに、極樂寺入道はじめ、朝直も長時も歿してしまつた。何等かの理由で、東條郷構へといふことが無効に畢つたか、或は年數が満ちたものであらう。一方鎌倉の状態も上の通りだつたから、至孝の聖人は、茲に十二年ぶりで故郷へお歸りになつたのである。

併し天は聖者に幸ひを降さなかつた。父君の御墓を弔ふべく歸られた時、御母上はあはや既に御臨終あらうとする許りの急病であられた。あゝ十二歳以來出家の道に登りて、二十年間の苦修練學の間には、寒暑につけ風雨につけ、連長はいかに在りつると日毎に心を煩はせ參らせ、業成つてかへれば、新しき法義の講説に忽ち地頭一山の怨みを受けて下山し、一たび父母に見えて志を語り、第

一次の弟子とは爲しまゐらせたが、それ以來一昔、今歸る時には父すでに此の世におはさず、空しき墓を弔ふ。それが今眼前にまた一人残された母上を喪はうとせられるのである。後に身延で領家の新尼から海苔を送られた時、

今此アマノリヲ見候テ、ヨシナキ心思出テウクツラシ。片海市河コミナトノ邊リニテ、昔見シアマノリナリ。色、形、味モカハラザルガ、ナド我ガ父母カハラセ給ヒケント、方チガヘナル恨メンサニ、涙モ押ヘ難シ。

と。六十に近うなつてなほ父母を追慕せられた聖人の、其の時のお驚きはどんなであつたらう。執權連署をも物ともせぬ聖人、末法法華經の行者を以て任ずる聖人の血涙は、不惜身命の十餘年の功德にもかへて、むしろ一生の弘通にも代へて回春を祈られたらう。いかなる佛神も此の法華行者の祈りに聴かねばならなかつたらう。母上は聖人の至誠によつて蘇生せられた。此の事の確實なるは、眞蹟現存の「可延定業鈔」に

日蓮、悲母ヲイノリテ候ヒシハ、現身ニ病ヲイヤスノミナラズ。四箇年ノ壽命ヲノベタリ。

とあるによつて明である。母上が蘇生せられた時。會ひたさに充ちて居られた聖人が、枕邊にお居でになるのを見て、亦どんなにお悦びになつたことだらう。私共は親子の情念において、此の御事蹟に深い／＼人間的共鳴を感じるものである。傳説に依ると、此の時の奇蹟を目撃した民衆は、折